

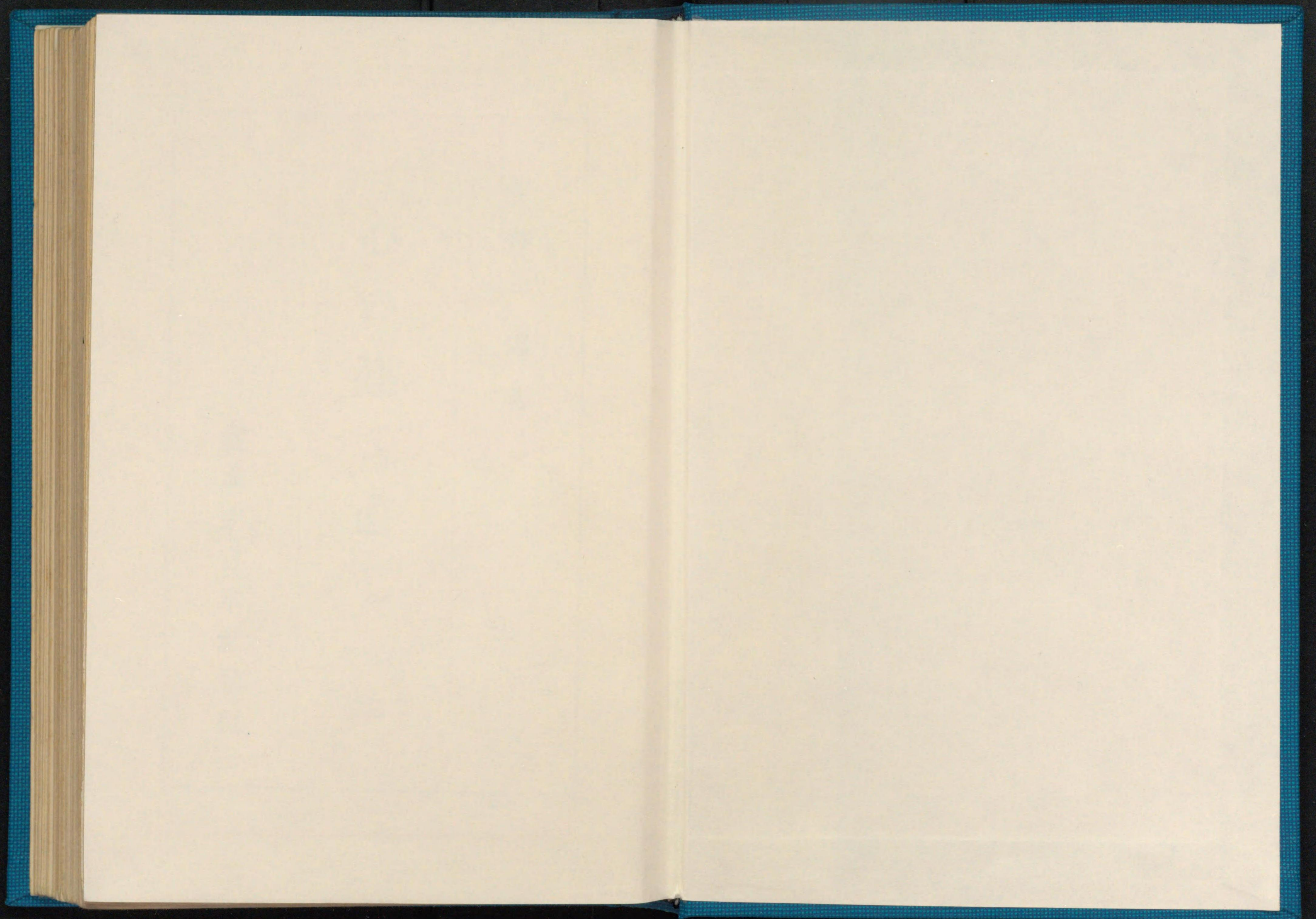
760-39



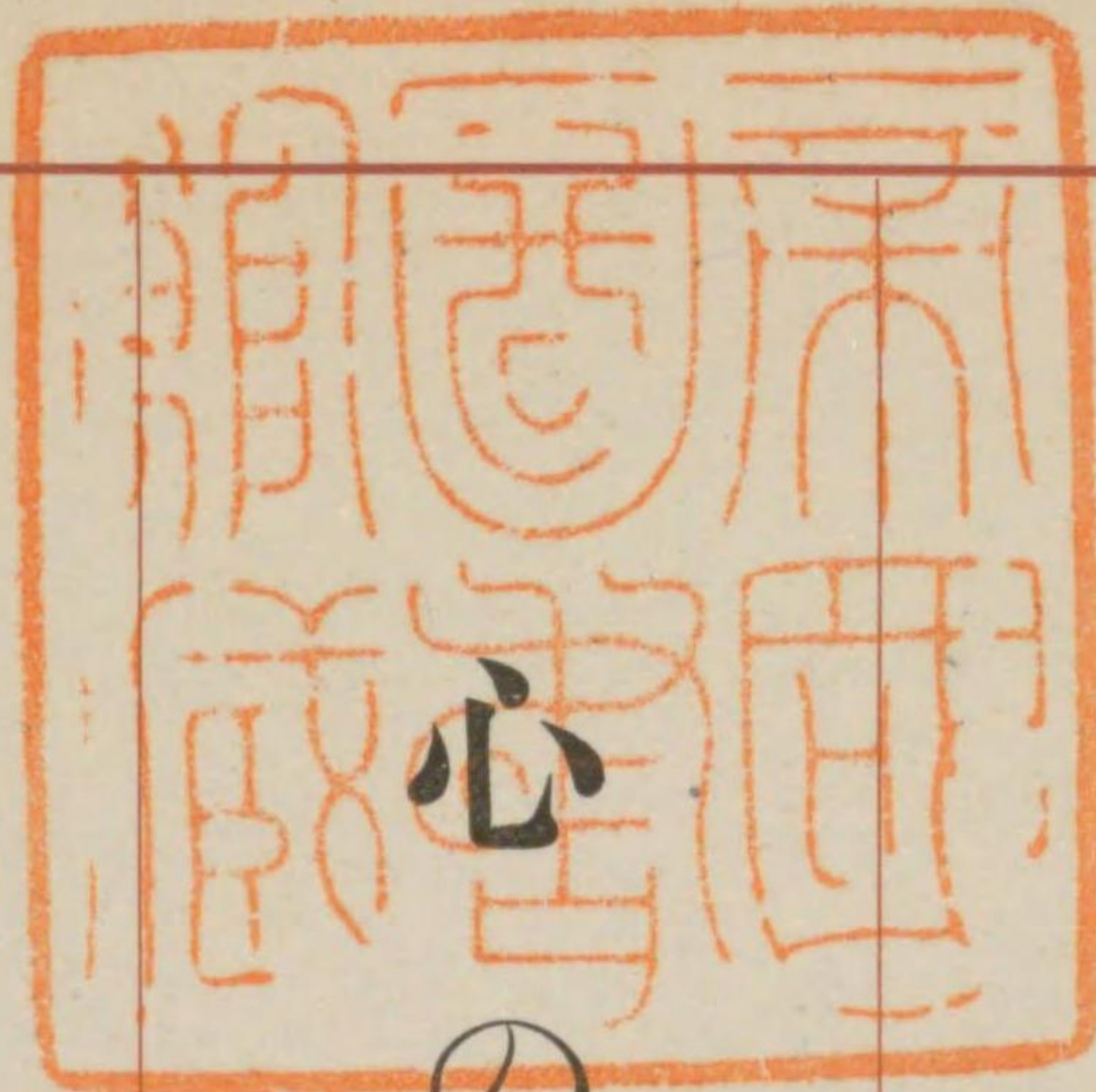
1200501596652

760  
9





H3U-94

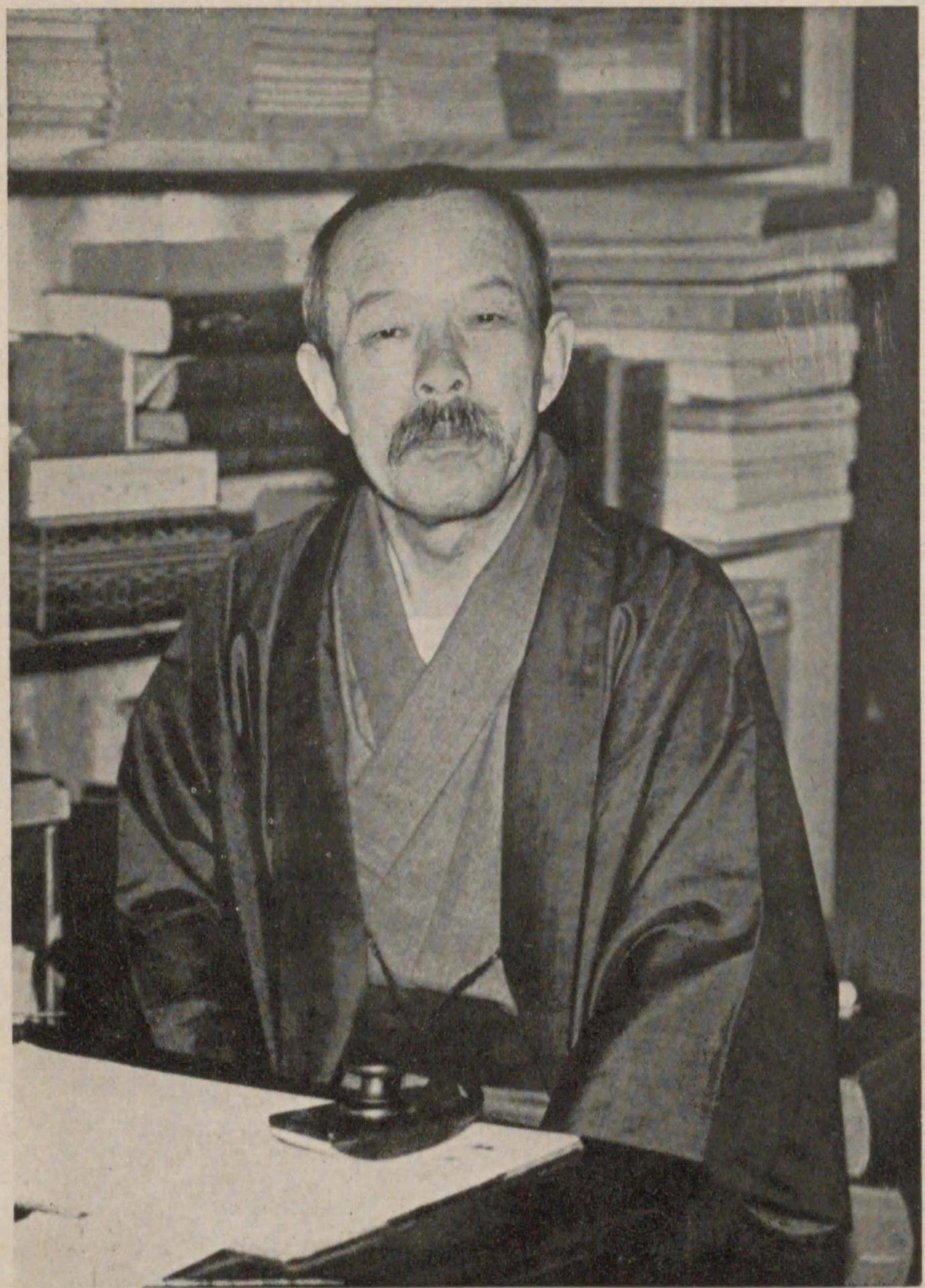


小林一郎著

心の建て直し

實業之日本社發行





影 近 者 著

序

兎角壞れがちな自分の心を建て直すために、吾等は絶えず努力しなければならぬ。その建て直し方にはいろいろ有るが、正しい信仰の力に依るのが最も良いと思つて、私は此の二十數年來大乘佛教の信仰を勵んで居る。二十數年といへば可なり長いことであるが、殆んど進歩の見えぬのが甚だ恥かしい。併し進歩は至て遅くても自分の心にはいつも大なる悦びがある。此の悦びを人にも願ちたいと思ふところから、私は折々多くの人の前に立つて、大乘佛教に就て語るのである。昨年の夏も五十人ばかりの集まりで、一週間ばかり續けて話したことがある。その時の速記に聊か手を加へて、今回世に公にすることに成つた。

吾等日本國民は今や正義のために戦つて居る。私はモウ老人であるために、此の

大切な戦ひに參加することの出来ぬのをまことに心苦しく思つて居る。併し此の戦ひのすんで後こそは吾等の一層奮はなければならぬ時であるに違ひない。私も此の大切な時に於て出来るだけの努力をして、聊かなりとも世間のお役に立ちたいと竊かに心に誓つて居るが、それにつけてもが心の建て直しに益々力を盡さなければならぬわけである。此の小著が私と志を同うする方々に多少の参考ともなるならばまことに望外の幸である。

東京に於て

小林 一郎

昭和十三年九月

## 目次

一、信仰の生活	一
人生の大事——佛の出現——知行一致——平等の慈悲——佛魔一如	
二、佛と佛弟子	一五
世俗の信心——信心の利益——比丘比丘尼優婆塞優婆夷	
三、受戒と僧院生活	二五
眞の佛弟子——戒の種々——受戒の式——知合衆——僧房の生活——乞食の行	
四、釋尊の出家	三九
釋迦族——阿私仙人の豫言——八相成道——降兜率——託胎と出生——釋尊出家の動機——眞の報恩	

五、釋尊の修行……………五三

佛陀伽耶の釋尊——行乞の生活——自重の念——菩提樹の下

六、降魔と成道……………六二

二種の魔——魔の乗ずる時

七、説法と入滅……………六七

樂説無畏——懈怠の心——死の教訓——何時死別しても後悔ないやうに

八、佛典の特色……………七四

釋尊の歩まれた跡——佛教と諸教——教の選擇

九、釋尊と其の時代……………八二

印度の所謂四姓——釋尊の卓見——婆羅門の全盛時代

一〇、宗教の發達……………九一

現世の利益——多神と一神——天の賞罰——帝釋と四天王——婆羅門の墮落——三世因果の説——懈怠の罪——婆羅門の苦行

一一、昔の印度の教育……………一〇〇

所謂五明——眼を過信する弊——順境と逆境

一二、釋迦牟尼と云ふ名……………一〇〇

釋尊と其の國——提婆と阿難の兄弟——複雑なる人生——成道の時の感想——衆生に對する哀愍——能仁寂默——感恩の念

一三、覺ると云ふ意義……………一三七

『ほとけ』と云ふ語——心中の煩惱——盜人の慈悲——煩惱の佛性の對立——覺察と云ふこと

一四、佛性の開發……………一四七  
 眼前の活きた教訓——正しき教育

一五、自覺と覺他……………一五三  
 歡喜と哀愍——布施の心得——常任の説法

一六、法の意義……………一六一  
 法の三意義——其の一、法則——其の二、教法——其の三、眞理——佛の妙法

一七、信解の力……………一七一  
 聽法者の種々——發菩提心——信解の力——疑惑と其の解決——研究と疑問——知識の  
 惡用——信解圖通

一八、末世の信仰……………一八五

信解を得る努力——世間の影響——末法の世の爲の教

一九、小乗と大乘……………一九一  
 小乗と四果——大乘に入る道——菩薩の意義——大心の士——精進の力

二〇、妙法蓮華經……………二〇三  
 佛性の開發——大乘心——小乗と大乘の根本的區別——行懸りを捨て得ぬ——方便の必  
 要——方便と眞實

二一、本佛の實在……………二一九  
 吾等と吾等の四圍——根本の力——知る力と感ずる力——佛教と諸教——佛教の信仰を  
 助くるもの——妙法蓮華——眞の經典——南無といふこと——身<sub>ノ</sub>意の三業——相待妙  
 と絶待妙

二二、佛教流布の中心……………二二〇



無縁の慈悲——教化の種々——佛教に疲勞なし——佛教以外の諸教——諸教は佛教の前  
驅——印度と佛教——釋尊の降誕は世界の爲

二三、日本國と佛教……………二五五

佛教の東漸——統一なき印度——佛と國王——印度と支那——不惜身命の決心——經論  
の漢譯——日本の國體——大日本の名

二四、正義と慈悲……………二七一

養正の聖勅——正を養ふの心を弘む——聖德太子の時代——正義の基礎としての慈悲——  
正しき信仰の力——北條時宗の修養

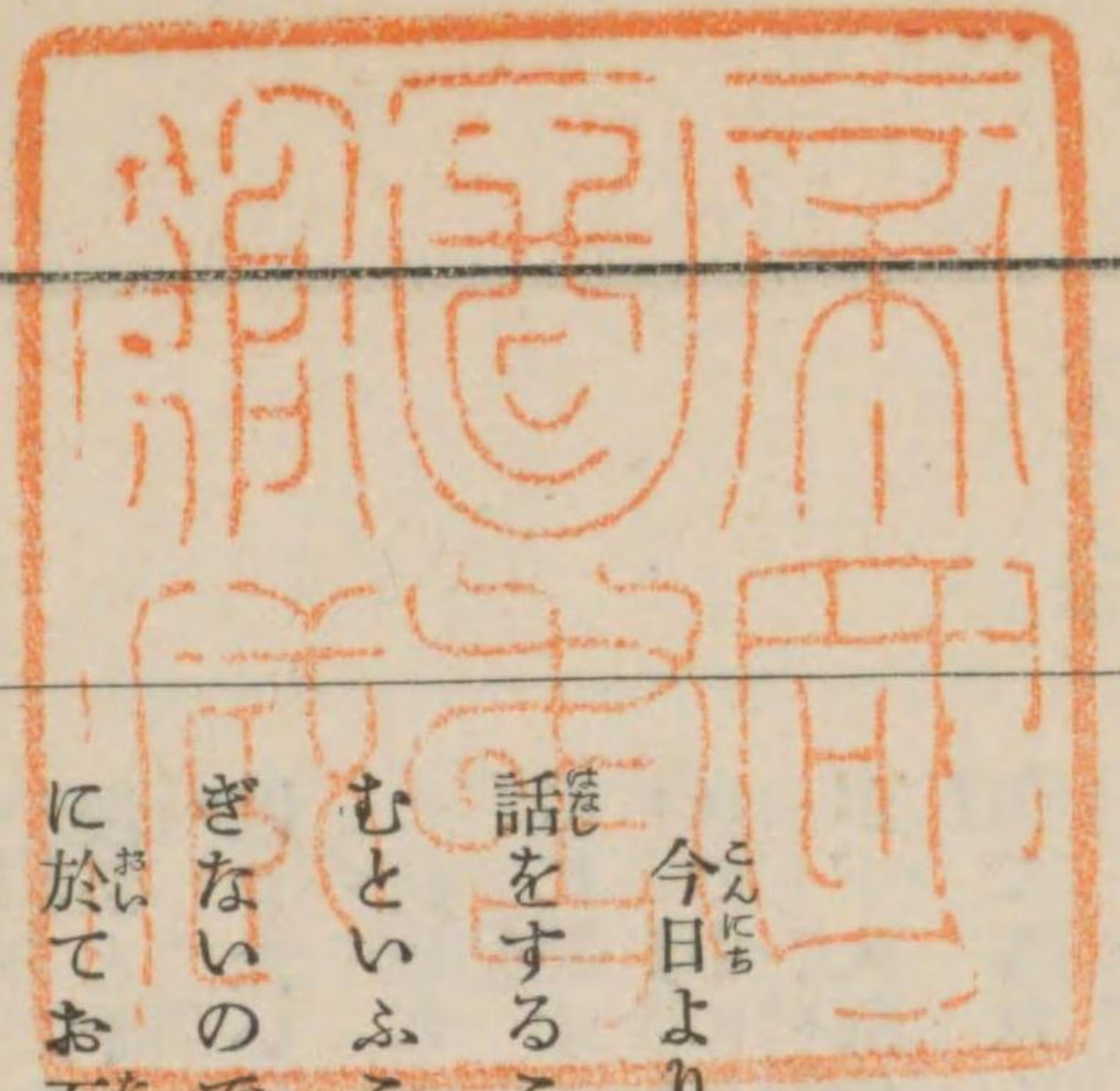
—— 目次 畢 ——

# 心の建て直し

小林 一 郎 著

## 一、信仰の生活

今日より數日間、毎朝お集りを願つて法華經を中心として大乘の佛教に關するお話をすることになつた。尤も私のお話の主ではない。御一緒に本尊の前でお經を讀むといふことが主であつて、私はたゞ此の機會に於て少しばかりのお話をするに過ぎないのである。實は私一人がお話をするといふことも本意ではない。斯様な機會に於てお互ひに平生考へて居ることを語りあひ、又お互ひに平生疑問として居る所を質しあふといふことが出来れば、それが最も良いことなのである。併し誰か最初に云ひ出さなければならぬといふことになる、お互ひに遠慮しあつて急には話の



端緒が開けぬものであるから、マア私<sup>わたし</sup>が其の端緒を開くといふ意味でお話を始めることになつた。随つて私の申すことは組織の立つた講議といふものではなく、たゞ漫然と平生感じて居ることを申上げるにすぎない。此の點は豫め御承知を願つて置きたい。

此處にお集りなつた方は大概お忙しい方のやうである。たゞお経を讀むとか、佛敎に關する研究をすとかいふことで毎日を過される方は殆んどなく、それぐに世の中に立つて活動して居られる方である。婦人の方も多數にお見えになつて居るが、大部分は一家の事を主宰して居られる方のやうに見受ける。私自身も僧侶でも何でもなく、世間の生活の傍ら佛敎を學んで居るものにすぎぬ。さてお互ひに斯ういふ世俗の生活をしながら佛敎の事などを學んで居るのには何か相當な理由がなければならぬ。お互ひの一生涯といふものは至て短いものである。長生きしたといつても六十年か七十年で、百歳まで生きるといふ人は至て稀である。其の中で毎日六

七時間は睡らなければならぬ。その他に食事をすとか、顔を洗ふとか、着物を着換へるとか、人に逢つて朝晩の挨拶をすとかいふ時間を差引いてしまふと、残る所は至て少いものである。此の少い時間の一部分でも無意味に過すのはまことに惜しいものである。若し斯ういふ集會があまり役に立たぬものなら止めてしまつた方が宜い。むかしは寺詣りをすとか、お経を讀むとかいふことは主として老人のすることであつた。家の事は若い者に任せてしまつて別段定まつた用もなくやつた人が寺詣りをしたり、お経を讀んだりする。つまり是れは道樂仕事である。盆栽をいじつたり書畫骨董をヒネくつたりするのと殆んど同じ氣持ちであつた。それであるから、青年の人などは全く佛敎の事などには無關心であつた。斯ういふ時代に於ける信心といふものは、唯だ先祖から代々傳はつたことを受け嗣いで行くに過ぎなかつた。自分の家は淨土宗だから、何の意味だか能く知らぬが南無阿彌陀佛といふ、自分の家は法華宗だから南無妙法蓮華經といふのだといふ程度のものであつた。阿

彌陀佛が何だか、法華經が何だか殆んどわからずにやつて居たのである。日本は世界に於ける唯一の佛教國だといふことになつて居るが、佛教がどういふものか知らずに、唯だ先祖以來の墓を何宗かの寺へ預けてあるといふだけの佛教徒では甚だ心細い次第ではないか。吾等はモット眞面目に佛教といふことを考へて見なければならぬと思ふ。吾等は道樂半分に信心をするのでなく、人生の眞の意義を知るために信心をするのでなければならぬ。何の爲に生きて居るのか知らぬけれども、兎に角生れたのだから生きて居るのだといふのでは、生きていふことが全く無意味である。生きていふ事の意味がよく分つて生きて居るのでなければならぬ。これが吾等に取つては實に一大事である。

法華經の方便品の中には釋尊が何故に此の世に出て、此の佛教を説かれたのであるかといふことを説明して居られるのであるが、それは諸佛世尊は唯だ一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふ。

佛の出現

とある。釋尊は勿論のこと、凡て佛といふものは吾等に一大事を示すために世に出て教へを説かるゝのであるといふのである。その一大事の因縁とは何であるかといへば、吾等をして皆佛と同じやうな智慧を具へ得るやうにして下さることである。元來佛といふのは梵語の『佛陀』とあるのを略した語であるが、佛陀といふ梵語を漢譯すれば『覺者』といふことである。即ち佛とは『人生の眞の意義を覺つた者』といふことなのである。釋尊は久しい間難行苦行の數々を積んで人生の眞の意義を覺られたから、世間で之を仰ぎ貴んで佛即ち『覺者』と申すのであるが、其の自ら悟られたところを吾等のために打明けて説かれたのが即ち佛教といふものである。今吾等が斯ういふ會合を催して互ひに語りあひ質しあふのも、要するに人生の眞の意義が知りたいからである。即ち人生の一大事を解決したいと思ふが爲に外ならぬのである。

但し眞に知るといふのは『一通りわけが分つた』といふやうな事ではない。吾等

は何事に就ても一通り説明を聴けば、『成る程さうか』とわかるのであるが、一通りわかつたから實行が出来るといふと、實行するまでは容易ではない。例へば朝早く起きれば身體のためによいといふ事は能く分つて居るけれどもツイ朝寝をしてしまふ。食ひすぎでは良くないと知つて居るけれども、旨いものはツイ食ひすぎるといふやうな状態であるが、是れは要するに本當にわかつて居ないからである。希臘の賢人ソクラテスが『知つて行はぬといふのは、眞に知らぬからである』といつたのは眞實の事である。吾等の心の作用はまことに複雑であつて、一通り物事を理解するといふことは此の心の作用の一部分にすぎぬ。吾等には好きとか嫌いとか、ほしいとか惜しいとかいふやうな種々の感情がある。此の感情の作用と理解力とが往々にして衝突することがある。それで吾等は『斯うするのが良い』と知つて居ても、何だか氣が進まぬために實行しないで終ることが少くない。ところが段々修養を積んで行くと、此の知る力と感ずる作用とが能く一致するやうになるのである。

知行一致

斯うなれば正しいと知つたことを實行しやうといふ決心がつく。斯うなつて初めて眞に知つたといへるのである。吾等が信心をするとか修養を積むとかいふのは、要するに斯ういふ意味に於ける『知る力』を得たいからである。多くの人が釋尊の所へ集つて熱心に其の説法を聴いたのはつまり斯ういふ『知る力』を得たいからであつたに違ひない。釋尊はモウ二千數百年前に入滅せられたので、吾等は親しく釋尊の御教へを受けることは出来ないけれども、釋尊が魂を打込んで説かれた所は多くの經典となつて今日に遺つて居る。吾等が誠心を以て此の經典を學べば、宛かも親しく釋尊の御教へを受けるやうな効果が得られるものと思はれる。それは法華經の法師品に、

此の中には已に如來の全身まします。

とあるに依つても明かである。此の經典の中に佛の御心がスツカリ打込まれてあるから、此の中に佛の全身があると思へといはれたのである。吾等は毎日親しく釋

尊に接して其の教へを受くる心を以て經典を讀誦すべきである。

經典といふものゝ成立ちに就ては、後に至つてなほ委しく申すつもりであるが、兎も角も今日に於ては經典を措いて佛教を學ぶべき途は求められぬのである。然るに此の經典に用ゐられたる用語が吾等の日常の用語と非常にちがつて居ることは佛教を學ぼうとするものに取つては何より困つたことである。耶蘇教のバイブルなどは吾等の毎日使つて居ると、あまり甚しくは異はぬ言葉でかいてあるので、誰でも讀めば一通りの意味はわかる。勿論其の深い意味を知ることが容易ではないけれども、兎に角讀みさへすれば一通りの意味はわかるから、耶蘇教の方は餘程親しみ易い感じがする。論語などはバイブルよりも用語が餘程むづかしいけれども、それでも佛教の經典よりは、遙かにわかり易いから、普通の教育を受けた者であれば、一通りの意味はわかるので、今でも修養のために論語を讀んで居るといふ人は可なりあるやうである。ところが佛教の經典となると、特別に研究でもした人でないと、

讀んで見ても更に何の意味だか分らぬ。それでツイ讀んで見たいと思ひながら讀まずに終る人の多いのは残念なことである。併しながら經典といふものは要するに佛の説かれた所を記録したもので、而も佛は一切の人には皆盡く人生の眞の意義を知らしめたいといふ御考へから世に出て教へを説かれたのである。決して一部分の特別に頭の良い人にさへわかれば宜い、頭の悪い者はどうでも宜いのだといふやうなお考へではなかつたやうである。法華經の方便品に於て釋尊は、何の爲に世に出て教へを説かれたかといふことを説明されたと前に申したが、その説明の續きに、我本誓願を立て、一切の衆をして我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき。

とある。「一切の衆」といふ中には善人も悪人も賢者も愚者も皆含まれて居る。「我が如く等しく」とは佛と同等になることである。釋尊は抑々世間に出て説法を始められた時から、凡ての人を御自身と同じやうな者にしてやりたいといふ御心持であ

つたといふのである。是れが即ち平等の慈悲といふことである。平等といふのは現在の状態に就いていふのではない。現在の世の中には善人も悪人もあり、智慧の多い者も足らぬ者もある。此の事實は決して否定の出来るものではない。佛がそれを皆平等に視られるといふのではない。人間本来の性質の上から平等と視らるゝのである。佛の眼から御覽になれば、世の中に絶対の悪人といふものはない。悪人といふのは要するに愚者に外ならぬのである。正しい思慮分別があつて、罪を犯し過を重ねることのあらう筈はない。要するに皆愚者である。その愚者といふものも決して見棄てゝしまふべき者ではない。智者と愚者とが全くちがつた者なのではなく、愚者といふのは畢竟智慧のまだ充分に發達せぬものであるから、其の智慧を發達せしむべき道さへ與へらるれば、いつ迄も愚者では居ない筈である。譬へば水といふものは百度に達すれば沸騰し、零度になれば氷る。此の沸騰した熱湯と氷とを比べて見れば非常にちがふけれども、百度の熱湯の熱を九十度、八十度といふやうに段々

下げて、零度になれば氷るのである。其の氷に熱を加へて十度、二十度と段々上げて行つて、百度に達すれば沸騰するのである。氷と熱湯とが全く別のものなのではない、要するに續いたものである。吾等は凡夫であるが、修行を積んで怠らなければ佛の境界にも到達し得らるゝのである。又ウツカリして居れば迷ひが次第に多くなつて来て、悪魔のやうな者になるかも知れぬ。それで、『佛魔一如』といふやうな語もあるので、梵網經に、  
魔界を轉じて佛界に入らしむ。  
とある通り、一たび悪魔の境界に墮ちた者でも、貴い佛教を聽聞すべき機會が與へられて、其の心が一轉すれば、後には佛の境界に到達することも決して不可能ではないのである。  
また『善惡不二』といふやうな語もあるが、善と惡とは固より同じものではない。併し惡を作る心が一轉すれば善を積む心ともなれるのである。維摩經に此の事

が説いてあるのに基いて、謡曲の『山姥』にも、

いや善悪不二、何をか恨み何をか喜ばんや。

とある。斯ういふ語は兎角に誤解を招き易いもので、『善悪不二といふのだから、如何なる悪事をして佛の力に縋りさへすれば直ぐに救はれるに違ひない』といふやうな、勝手な考へをもつ人もあるが、實はそんな淺はかな事ではない。善悪不二といふのは氷と熱湯との間に隔てがないといふのと同じ意味である。隔てはないけれども氷を氷のまゝで置いては、いつ迄も熱湯にはならぬ、之を熱湯にするには充分の熱を之に加へなければならぬ。大に努力することなくして、悪が直ちに善にかはるものではない。明智光秀が『善悪不二』といふことを聞いて、主人の織田信長を殺す決心をしたなどいふ作り話も傳はつて居るが、往々にして斯ういふ誤解が起るのはまことに遺憾なことである。

佛は如何なる愚者、如何なる悪人も決して見棄つべきものではない、其の迷ひを

除くべき道を與へさへすれば必ず智慧の力も具はり、慈悲の力も具はるやうになれるものであると思召されたので、之を盡く教化しやうといふ誓願を立てられたのである。それで涅槃經には、

一切衆生悉く佛性あり。

といつてある。また首楞嚴經には、

衆生元より佛性あり他より得べきにあらす。

とある。佛性とは小き自己に囚はるることなく、他の人の喜びを共に喜び、他の人の悩みを共に憂へてやる性質をいふのである。此の性質が次第に發展して行つて完全なものになれば、一切衆生を救ふ所の佛の働きとなるのであるが、其の芽ばえともいふべきものは何人も皆もつて居る。全く學問もなく教育もない母親でも、其の子に乳を飲ませることは知つて居る。さうして其の子が乳を飲んで満足して、ニコ／＼と笑つて居るのを見て、自分も満足してニコ／＼と笑つて居る。此の時に此

の母親は少しも自己といふものに就て考へては居ない、唯だ其の子の喜びを自己の喜びとして居るのである。斯ういふ貴い性質を吾々は生れながらにして皆もつて居るのであるが、たゞ親子といふやうな狭い間にのみ其の働きが發現して、一向に廣い範圍に及んで居ないのは、此の貴い性質を育て、伸すべき方法が立つて居ないからである。

佛は此の事を徹底的に見て居らるゝものであるから、一切の人に具はつて居る貴い佛性を皆充分に育て、伸さしてやりたいといふ御心から世に出て法を説かれたので、其の説かれた所を記録したものが即ち經典である。前にもいふ通り、此の經典の中に佛の全精神が打込まれてあるのだから、吾々は此の經典に示された所に基いて修行を重ねて、自ら本來具有して居る佛性を伸して行くことに努めなければならぬのである。信仰的生活といふことは種々に解釋されるけれども、眞の信仰的生活は此の如き趣意のものでなければならぬ筈である。

### 二、佛と佛弟子

#### 世俗の信心

然るに世間で『信心をする』と稱する人の殆んど大部分は殆んど斯ういふことは考へて居ないやうである。多くの人は何か求むる所があつて、其の求むる所を遂げたいと思つて信心をするのである。つまり自分の力で出来ないことを、神や佛の力を頼んで出来るやうにして貰ふことを『信心をする』と稱して居るのであるが、それが眞の信心であるならば、信心といふことは決して奨励すべきものではない。私は學校生活を終つた時には全く無宗教であつたが、或る日將來の指導を願ふために某といふ老大家を訪問した。其の先生はいろ／＼懇切に話をしてくれた末に、『君は何か信仰をもつて居るか』と尋ねられたので私は『イエ何も信じては居ませぬ、無宗教です』と答へた。さうすると其の先生がいはれるには『それは實に結構だ。』



一體宗教などいふものは愚者の頼るものだ。譬へば眼の良い者には眼鏡の必要はないが、眼の悪いものは自分の眼だけではよく見えないから、眼鏡の助けを借りなければならぬ。宗教は眼鏡のやうなものだ。自分の考へで萬事を決定し得るものは、何も宗教などに頼るには及ばぬが、それだけシツカリした考へのない者が宗教に頼つて、やうやく安心を得るのだ。君はシツカリして居るから、宗教などに頼らないで、自分で生涯の方針を立てゝ行けるだらう」と散々に褒められたので、私も大に満足して歸つた。世間の大多數の人の所謂信心が眞の信心であるならば、此の老大家の批評も決して間違ひではない。併し眞の宗教といふものは決してそんな下劣なものではないのである。

自分の力で出来ぬことを神や佛に頼んで、出来るやうにして貰はうと思ふのは、例へば車を挽いて坂を上る者が自分一人の力では車が動かぬので、後押しを頼むのと同じやうな簡である。それは神や佛を自分の注文通りに働かさうといふ、まこ

とに手前勝手な考へ方といはなければならぬ。人々は皆それ／＼の立場があり、その立場によつてそれ／＼求むる所がちがふのである。例へば農民は米を賣るものであるから米價の成るべく高くなることを望んで居る。俸給生活者は米を買ふものであるから、米價の成るべく低くなることを望んで居る。此の雙方の望みを共に叶へるといふことは出来ぬ。若し此の雙方から頼まれたら、神も佛もどうすることも出来ぬであらう。宋の蘇東坡が杭州で河畔に立つて船の出入するのを見ながら、此の入船が帆を張るのに便利な風が吹けば、出船の者は困難するであらう。雙方で都合の宜いやうに風を吹かせてくれと頼んでも、神はどうする事も出来ぬであらうと思つて、一首の詩を作つたが其の中に、

若し人々をして願ひて輒ち遂げしめんには、造物たゞ應に日に千變すべし。

とあるが如何にも尤もなことである。人々の願ひがそれ／＼に異ふのであるから、それを皆叶へてやる爲には、神が一日に千度も變化しなくては追ひ付かぬわけ

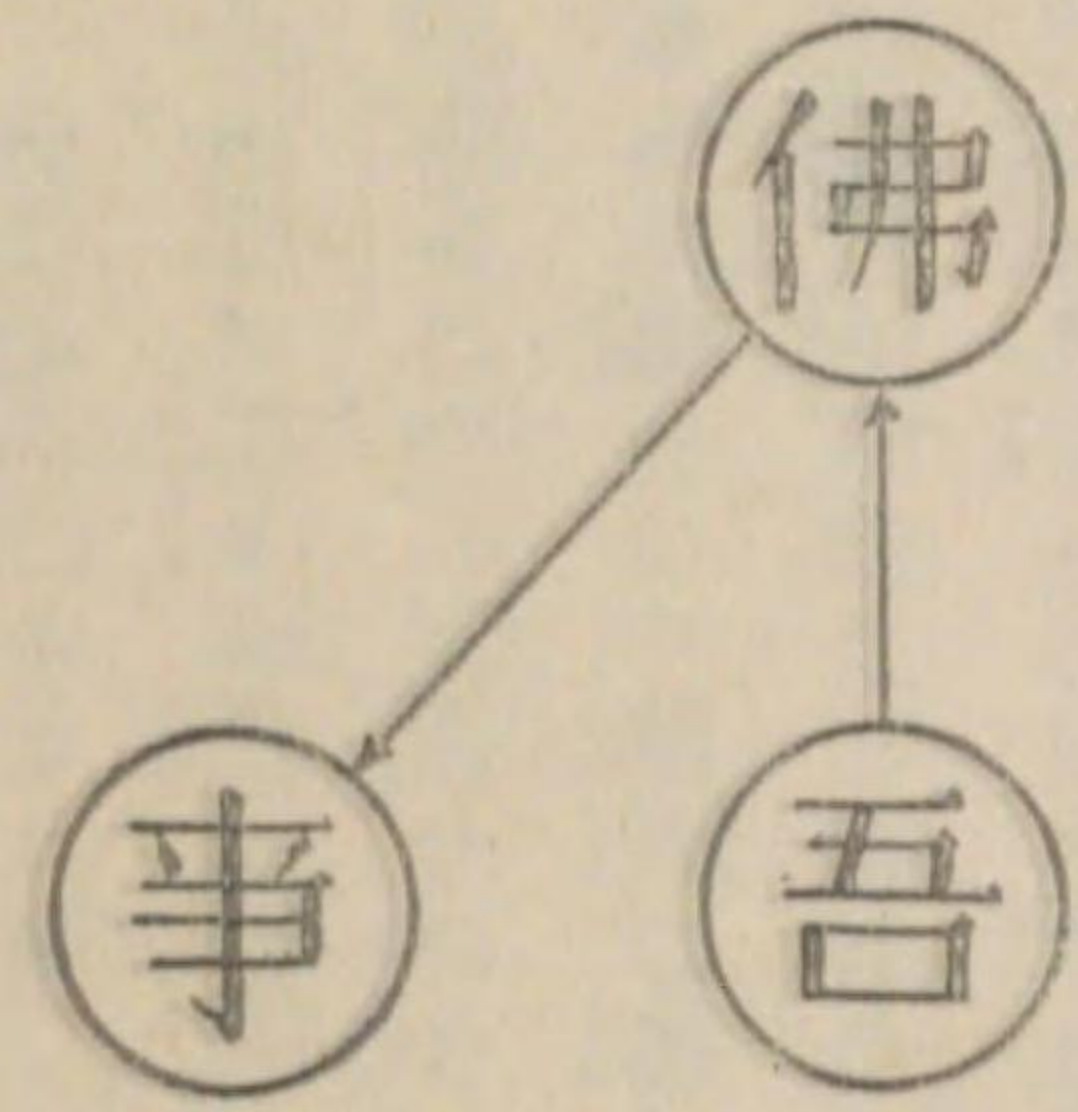
である。斯ふいふ愚な願ひをすることを信心だと思つて居る人は其の信心をする相手が始終變つて行くのである。觀音様に頼んでも効目がないから不動様にする。不動様も頼みを聽いてくれぬから今度は毘沙門様にするといふやうに、いくらでも變るのである。中には五六ヶ所も廻つて頼んで、『是れだけ方々へ頼んで置いたら、何處かで聽いてくれるだらう』と思つて居る人もある。

徳川時代の漢學者などが頻りに佛教の攻撃をして居るのも、主として斯ういふ幼稚な信心の弊害を指摘したものである。人は自己の職分を果すために全力を注がなければならぬのに、神様や佛様の助力を恃みにして力の打込み方が足らず、それで旨く成功しないと『神も佛もない世の中か』といつて世を呪ふやうになる。斯ういふことでは人の道といふものは立たぬといふので、漢學者などが頻りに之を非難したのは如何にも尤もな次第である。正しい意味の信心といふものは決してそんなものではない筈である。寶積經の中には、

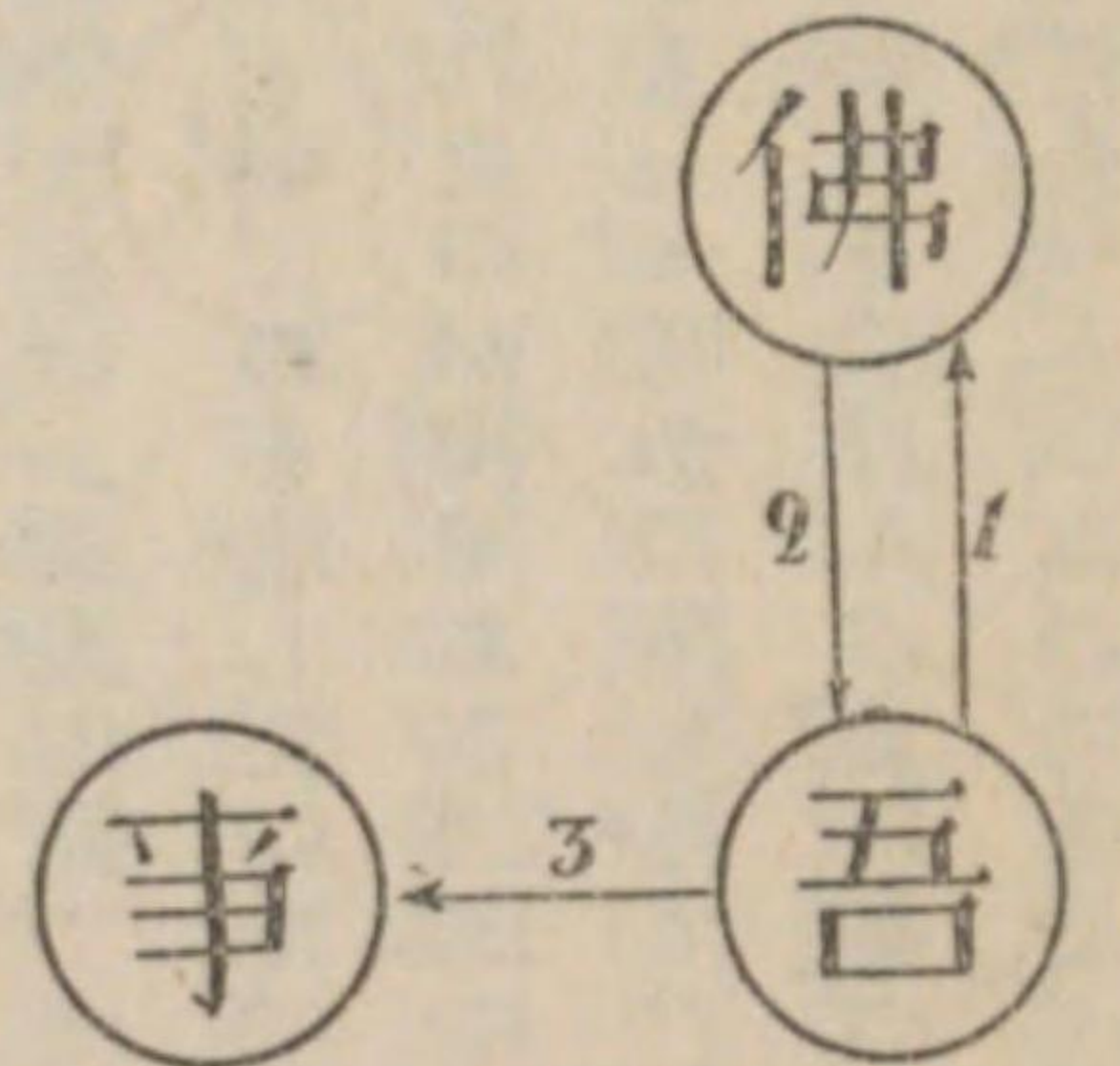
信は是れ佛の子なり。

とある。吾々が深く佛を信するならば、その信の力に依つて佛の御心と吾々の心とが通ひあつて、吾々の本來具有する所の佛性が伸びて来るのである。佛性が伸びて来るに随つて、種々の迷ひが消えて行くから、以前とは異つた心持になるのである。即ち信することによつて新なる心となるのである、精神的に生れかはるのである。吾々は生れかはることを目的として信心をすべきものであつて、或る欲望を達せんが爲に信心をすべきものではない。譬へば冷たい物を温くしたいと思ふならば、之を火の上に置くが宜いのである。熱い物を冷たくしたいと思ふならば、之を氷の上に置くが宜いのである。吾々凡夫が精神的に生れかはるのには、大慈悲の佛を信するより外はない。深く佛を信じ、佛の吾々に遺されたる貴い教へを奉じて行きさへすれば、吾々の此の心が、宛も火の上に置いたものが熱くなり、氷の上に置いたものが冷たくなるやうに、次第次第に凡夫の境界を離れて、佛に近くなつて行

くに違ひないのである。斯うなるに随つて、以前に出来なかつた事も出来るやうになり、以前に困難であつた事も困難ではなくなる筈である。それは佛が直接に手助けをして下されたのではないけれども、自分が生れかゝつたからである。信心をして利益があるといふのは即ち此の事なのである。いかに多くの神や佛の助けを求めて歩いて、自分が元の空阿彌では仕方がない。澁柿に砂糖をつけて人にすゝめても、其の砂糖を嘗めた下から澁い味が出れば、人は棄てゝしまふであらう。其の澁柿を日にさらして、日光のお蔭でスツカリ甘くなれば、誰も喜んで之を賞翫するであらう。吾々が信心によつて心の迷ひを除き、全く生れかゝつた者になるのも其の通りである。



試みに圖を以て之を現はして見ると、此の第一の圖のやうな考へで信心をするのは全く間違ひである。即



ち自分が佛に頼めば、佛の御力が直ちに自分の仕事の上に働いて、良い結果が得られると思ふのであるが、そんな事の望めぬわけは前にいつた通りである。若し此の第二の圖のやうな考へで信心をするならば、必ず利益が得られるに違ひない。即ち第一の箭で示すやうに自分が一心に佛を信じ佛を念ずると、第二の箭で示すやうに佛の御力が自分の心に加はり、自分の心は以前と變つて來るのである。以前には懦弱であつた心が強くなり、以前には怠つて居た心が健かになつて、大に努力しなければならぬといふ大決心がつくのである。そこで此の新なる心を以て第三の箭で示すやうに、自分の仕事にかゝるから、以前に出来なかつた事も出来るやうになるのである。三條小鍛冶宗近が院の御所よりの御下命によつて刀を鍛へた時に、伏見稻荷に祈願を籠めたところが、稻荷明神が現はれて相鎚を打つて立派な刀

を仕上げたといふ傳説がある。是れは要するに宗近が信心を凝した結果として、自分の力では到底出来まいと思はれた名劍が出来たといふことであらう。此の如くに信心の利益といふものは、自分が必死の努力をして後に現はるべきものである。努力を惜むやうな心で利益を求めるのは愚の至といふべきである。

佛に歸依して佛弟子となつたものは、皆精神的に更生することを念願として佛門に歸した者である。自分の或る欲望を達せんがために佛弟子となつたのではない。「佛」といふ意義に就ては後に改めて委しくいふつもりであるが、是れは梵語の佛陀といふのを略したので、佛陀といふのは「覺者」の義である。即ち絶對の理を覺られたのが佛である。既に絶對の覺を得られたのであるから一切の人の性質氣風等をも一々明かに照し見て、一々其の人に適したる教へをお與へになるのである。其の教へを受けんが爲に集つた者が即ち佛弟子であつて、佛が教へを説かれた所を「精舎」といふのである。祇園精舎とか、竹林精舎とかいふ名は、有名になつて居

る。之を稱して精舎といふのは「精心の人の集る所」といふ意味である。精心といふのは純粹な、雜りのない心といふことである。心の迷ひを去つて一切の苦を脱れたいといふより外には、何の望みも雜つて居ない者が來つて教へを求め、彼等を教へて其の迷ひを除かせ、其の苦を脱れさせやうといふ念のみで教へを説かれる。即ち説く方も聽く方も共に精心であるから、其の場所を精舎と申したのである。後世になると「信心をしたら自分の欲望が達せられるであらう」といふやうな考へで多くの人が寺に集つて來る。その寺では多勢の人の歸依を得て大なる勢力を作らうとか、裕かな生活をしようとかいふ考へで法を説く者のみが多い。これでは精舎の精神といふものが全く失はれてしまつたものといはなければならぬのである。精舎といはれぬやうなものは寺とは認められぬ。「寺」とか「院」とかいふのは元來役所のことで、佛教が支那に渡つた最初には佛像を假に役所に置き、教へを説くのも役所で説いたものであるから、後に至つて専門の説法の場所が出来ても、之に寺とか

比丘比丘尼  
優婆塞優婆  
夷

院とかいふ名をつけたのである。併したとへ其の名は異つても其の精神は佛の在世の時の精神でなければならぬ筈である。

此の精舎に於て佛の説法を聽いて、修行を勵むものには凡て四種あつた。即ち比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷である。比丘といふのは出家した男、比丘尼といふのは出家した女、優婆塞といふのは在俗の男で佛敎を信する者、優婆夷といふのは在俗の女で佛敎を信する者である。之を併せて『四衆』と呼ばれた。此の比丘といふのは『乞士』の義、比丘尼といふのは『乞女』の義である。之を乞士及び乞女といふのは『法を佛に乞ひ、食を人に乞ふ』といふ意なのである。法を佛に乞ふといふのは、佛の敎へに依つて人生の眞の意義を知ることである。食を人に乞ふといふのは、出家の人は自ら生計を立てることが出来ぬのであるから、人に乞ひ得たる所に依つて生活して行くのである。されば佛恩に感ずるは勿論のこと、一般の人に對しても常に感謝して居なければならぬのである。又優婆塞といふのは『清信士』の

義、優婆夷といふのは『清信女』の義である。清信とは清淨なる心を以て佛法を信するのである。自己の慾望を達することを目的として信心をするのではなく、自己の心中の迷ひを除いて、眞に意義ある生活をしたといふ考へで佛に歸依するのである。若し其の慾望を達したために佛に歸依するといふ者があれば、佛は之を御弟子とは見做されぬわけである。佛の在世に於て斯う定められたのであるから、後世になつても勿論此の精神が守られて行かなければならぬ。殊に今日に於ては敎へを説く人も、敎へを求むる人も互ひに反省することが肝要である。

### 三、受戒と僧院生活

出家の人と在俗の人とを問はず、眞に佛弟子とならうと思ふものは、是非とも受戒をしなければならぬ。受戒といふのは『今日より必ず佛の定められたる戒を守

眞の佛弟子

り、佛の説かれたる教へを實行することに努めませう』といふことを佛に對して誓ふことである。それには固より定まつたる儀式がある。此の受戒をしない前は、いかに佛教に就て多くの事を知つて居ても、佛弟子の數には入れぬのである。如何に多くの經論等を讀んでも、又各種の教義に精通して居ても、唯だ多く知つて居るだけでは學者若くは研究家とはいはれるけれどもまだ佛弟子ではない。書畫骨董を**玩ぶ**やうな了簡で經典を讀んだり坐禪をしたりする者は、固よりいふに足らぬ。經典といふものは佛の魂を打込んであるものであるから、眞面目になつて之を讀めば、唯だ其の意義を了解したといふだけでなく、何ともいはれぬ有難さを感じるやうになる筈である。有難いとか貴いとかいふ感じが強くなれば、之を信する念が必ず起るので、斯うなつてこそ經典を讀んだかひがあるわけである。大智度論に、**佛法の大海には信を以て能入とす。**とある通り、之を信するやうになつて初めて佛弟子の列に入ることが出来るので

ある。

然るに誰も皆最初は凡夫であるから、其の心には種々の煩惱が蟠つて居るのである。それで此の煩惱に妨げられて、切角の信する心がまた弛んで來ることを免れぬ。特に末世になつては世間が益々複雑になり、吾々の心には日夜非常に多くの刺戟が集まつて來るから、此の中に於て信を持ち續けるといふことは頗る困難である。そこで佛の定められたる戒といふものに依つて吾が心を制して行くことが肝要になるのである。佛は一切の人の心の中に起つて來る煩惱の種類を盡く知つて居らるゝと共に、其等の種々の煩惱が起つて來る事情をも明かに照見して居らるゝのであるから、一々に之を指摘して吾々に反省を與へられ、又其等種々の煩惱を除くべき道をも指し示して居らるゝので、これが即ち戒である。戒といふものは勿論直接に佛の御弟子となつて居た人々の爲に制せられたものであるが、今になつて之を讀んで見ると今の複雑な世の中に身を置いて居る者に殊に適切に感ぜらるゝのであ

る。但し今より二千數百年前の印度で定められたものであるから、今日の日本に於ては到底行はれぬやうな事もあるけれども、大體に於ては今日に甚だ適切なものである。此の戒によつて各自が其の身に反省し、其の過を改めて行くことに努むるならば、信仰の弛むのを防ぐことも必ずしも困難ではない。それであるから佛の在世の時から受戒といふことが佛弟子となる條件となつて居たのであるが、實は今日でも此の受戒といふことが勵行されなければならぬと思ふのである。瓔珞本業經には、

一切衆生初めて三寶海に入るには信を以て本と爲す。佛家に住在するには戒を以て本と爲す。

とあるが、戒を持つことに代つて初めて佛門に身を落ち着けて居ることが出来るのである。

元來此の戒といふのは梵語の『尸羅』を譯したのであるが、戒といふのは意譯な

戒の種々

ので、之を直譯すれば『清凉』といふのである。清凉とは煩惱の火を滅して心を清凉ならしむるの意である。能く戒を持つ人は其の心に煩惱が無くなるから、いつも爽やかに涼しい心持をもつて、佛の貴い教へを能く味つて行けるのである。此の戒にも種々あつて、殺すこと勿れ、盜むこと勿れといふやうな簡単な戒を五つ擧げられたのを五戒と名けてあるのは誰も能く知る所であるが、その外に十戒とか八齊戒とかいろく有つて、最も細密なものになると比丘の守るべき二百五十戒、比丘尼の守るべき五百戒といふものもある。(尤も比丘尼の戒は實際三百四十八戒なのであるが、二百五十に倍するといふ意味で五百と概稱するのである。)併し誰でも皆此等の戒を盡く守らなければならぬといふのではない。出家の人は男ならば二百五十戒、女ならば五百戒を必ず守らなければならぬので、之を稱して『具足戒』といふ。此の具足戒の中には男女の夫婦生活をするのが禁ぜられてあるから、出家の人は勿論男女共に獨身を通さなければならぬわけである。併し在家の者は固より家

庭を作るべきであるから、唯だ『邪淫戒』を守れば宜いのである。即ち正式の夫婦ならぬものが夫婦生活をするのを禁じられてあるのである。其の他にも出家の人のみ守るべき戒で、在家の者は守らなくても宜いものが多くあるが、その委しいことは略して置かう。兎に角苟くも佛教を信する者は戒を守るといふことが必要なので、大智度論には、

足無くして行かんと欲し、翅無くして飛ばんと欲し、船無くして渡らんと欲するも是れ得可からざるが如く、若し戒無き者は好果を得んと欲するも亦得べからず。

といつてある。それで能く佛の戒を持ち、能く佛の教へを守るべきことを佛に對して誓ふことが必要で、之を受戒といふのである。

釋尊の御在世の時は、釋尊の前に於て受戒をするのが定つたる法であつたが、後世になれば佛像の前で受戒するより外はないわけである。又釋尊の御在世の時

受戒の式

も、御弟子の中で殊に徳の高い人が釋尊の代りになつて、其の人の前で受戒した例もある。此の受戒といふことは前に申すやうに佛弟子が誓ひを立てる式であるが、其の誓ひを受ける人を名けて『和上』といふのである。釋尊が自ら和上になれるのが正式であるが、釋尊に代つて誓ひを受ける人も皆和上といふのである。和上とは梵語であるが、漢譯して『力生』といふ。戒を守ることを誓つて、大決心をするに依つて、心に大なる力が生ずるものであるから、其の誓ひを受ける人のことを『力生』といふので、南山大師の説明に、

力生と翻す。弟子の道力教によつて生成すればなり。

とあるので其の意はまことに明かである。此の和上を和尚とも書き、之を後に至つては『をしやう』と讀むやうになつた。

さて佛弟子の中でも在家の人はそれ／＼自分の住宅があるが、出家の人は精舎に住むのである。此の精舎は講堂と僧房とに分れて居る。講堂は佛が教へを説かるゝ



所で、僧房は出家した弟子の住む所である。若し佛が居られぬ時には僧房に居る者の中で最も先輩と仰がるゝ人が佛に代つて講堂で説法をすることに定めてあつた。講堂は説法の場所であるから種々の裝飾も施され、自然に有難いといふ感じの起るやうに出来て居たのであるが、僧房の方は修行中の人々の住む所であるから、出来るだけ簡易質素を旨とし、一切の裝飾を省き、大きな椅子を置くことさへ禁じられて居た。又錢や寶物などを貯へて置くことは一切禁じられて居た。凡て執著心を起すべきものは一切置かぬやうになつて居たのである。此の『僧』といふ語に就ては特に説明をして置かなければならぬが、元來僧といふのは『僧伽』といふ梵語を略したので、僧伽とは和合といふ意味である。佛の教へを學ぶのにも、又佛の教へを世に弘めて行くのにも、多くの人の和合一致することが最も大切である。それ故に和合一致して佛法を學び、又和合一致して佛法を弘通することに力を盡す人々を稱して僧伽といふので、唯だ一人のことではなく、集團となつて居る人々のことであ

和合衆

る。それで『和合衆』といふ譯語が出来て居るのである。但し多くの人が集つて居るのみでは和合とはいはれぬ。其の心が離れ離れであつては和合衆でも何でもない。和合するためには各自の私心を去らなければならぬ。是れが最も肝要のことである。出家の人は勿論和合一致して修行を重ね、又和合一致して此の貴い佛教を世に弘むるために力を盡さなければならぬのであるが、在俗の人と雖も和合一致して法を學び、和合一致して法を弘むることに力を盡すことは極めて必要なものであるから、僧といふものを出家の人にのみ限るには及ばぬのである。今此處に會して居るゝ方々が皆各自の私をすてゝ、和合一致して修行を勵まるゝならば、此の一堂の人を『僧』と稱して宜いわけである。

世が末になると出家した人々が互ひに勢力を争ひあひ、利益を争ひあつて、執著の念が非常に強くなり、僧の姿をして居ながら、其の爲す所は和合といふことゝ正反對になつて來たのは歎すべき至である。例へば三井寺は元來叡山の延暦寺の分

院であるのに、後には兩寺が相對立して勢力を争ふやうになり、三井寺では叡山に戒壇があるから自分の方にも同様に戒壇を建てたいといつて朝廷に訴へ、終には兩寺が兵力を以て相争ふまでになつた。三井寺の頼豪阿闍梨は戒壇を建てたいといふ願ひが叶はなかつたといつて憤死して、其の怨靈が鼠となつて叡山に現はれ、多くの經卷を喰ひ破つたといふ傳説さへある。果してそれが事實であつたかどうか知らぬが、斯ういふ傳説が出来たといふことは其の頃の佛教が如何に墮落して居たかを證するものといふべきである。各自に私心を去ることに努めなければ、形ばかり僧であつても何にもならぬのである。

僧は佛と法とに配して三寶といはるゝものであるから、其の貴い職分を自覺しなければならぬ筈である。佛は申すまでもなく一切衆生を救ふために世に出られたのであるから、是れほど尊い方は無いわけで、之を『佛寶』として仰ぐのは固より當然のことである。又佛の亡き後と雖も佛の説き遺されたる法は滅びずして永く世に



傳はり、永く吾等の力となつてゐるのであるから、之を『法寶』として貴ぶのである。而して此の貴い法を世に弘むることは僧の働きであつて、之を世に説き弘むる人がなければ、法があつても無いと同じやうなものであるから、僧をも亦『僧寶』と稱して貴び、併せて三寶といふのである。されば心地觀經にも

三寶の恩とは、衆生を利樂すること不思議にして休息あること無きをいふなり。とある。又法華經の法師品にも僧の貴きことを説いて、

是の人は一切世間の應に瞻奉すべき所なり。應に如來の供養を以て之を供養すべし。

といつてある。僧は此の如くに貴い職分なのであるから、此の職分を果し得べき實力を養ふためには充分の修養を積まなければならぬ筈である。

されば釋尊御在世の頃の僧房生活といふものは非常に嚴肅なものであつたと思はれる。釋尊の定められたる戒に依ると、僧房に於ては一切奴婢等を使ふことを許さ

れず、一切の勞役は一同が力を協せて之に當らなければならぬのである。又食事は午前こぜんに一回、午後ごごに一回であるが、午前には飯を食するので之を正食しょうじきといひ、午後のは穀物の粉を丸めたもの、即ち日本の團子のやうな物を食するので之を小食せうじきといふのである。此の正食と小食との間に出て食を乞ふべき定めである。佛は智も徳も完全な方であるから、衣食共に歸依者の供養を受けて、然るべきであるが、修行中の者は佛ほどの智も徳も具はつて居ないのであるから坐して供養を受くべきものではない。それ故に自ら人の門に立つて、禮を盡して食を乞ふのである。尤も時として歸依者が僧房に來て供養することもあるが、其の時には之を佛に捧げて、佛が分けて下されば之を受けても宜い。若し佛が居られぬ時には之を佛像の前に捧げ、佛から頂く心持で之を下げ來て自分達の用に供するのである。併し是れは特別の場合で、原則としては毎日外へ出て食を乞ふのである。釋尊は佛であるから、乞食などこつじきをされないでも宜いのであるけれども、弟子達を獎勵する爲に彼等と共に乞食に出

乞食の行

られた。斯くして乞食から歸つて、其の乞ひ得た物が多ければ、翌日の分だけを殘して置いて、餘りは貧しい者に施してしまひ、多く貯へて置くことは出來ぬのである。尤も雨期には道路が非常な泥濘となつて、外へ出られぬこともあるから、此の季節にだけは豫め貯へて置くことを許されてあつた。其の他の時には決して貯へて置かぬ規定であつたのである。

又人の門に立つて食を乞ふ時に、小さい布などをくれる人があれば、それを縫ひ合せて着物とする。これが即ち袈裟である。吾が國などでは法衣の上へ袈裟をかけるけれども、印度のむかしは袈裟が即ち法衣なのである。袈裟とは『田相衣』といふ意である。小さい布をいくつも縫ひ合せて作るので、其の縫ひ目が田の畦のやうであるから之を田相衣といふのである。又貰つた布の中には古いのも、地質の良いのも悪いのもあるが、何れも人の好意でくれたのであるから、其の間に區別を置くべきものではない。それ故に之を田の泥に染めて、其の差別の分らぬやうにするの

で、之を『染衣』といふのである。又此の袈裟は中着衣即ち肌着と、小衣と大衣との三枚より多く貯ふることを許されぬので、之を名けて三衣といふ。それより以上に餘りがあれば食物と同じやうに之を貧しい者に施してやるのである。凡て僧房の生活は出来るだけ執著の念の生ぜぬやうにといふことを主にしてあつたと思はれる。以上のやうなのが僧房生活の原則であるけれども、特に歸依心のあつた人が佛を招待して食事を供養し、その時に弟子達も共に招かれる場合には、人の好意を無にすべきではないから、一日二回の食事といふ規定を破つて其の招待に應じても宜い。平生の規律は最も嚴重であるべきであるが、決して情味の缺けたものでなかつたことは、此の一事を以ても推すべきである。

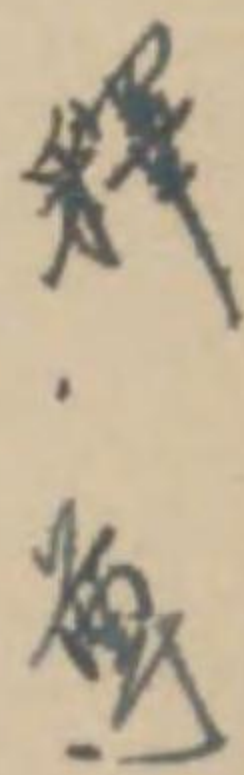
尙ほ此の乞食の行には、單に食を乞ふといふ事以外の意義もあつた。それは世間の苦勞のある人の相談相手になつてやることである。何れの家にも時として面倒な問題が起るものであるが、局外の人から見ると解決のつき易い事でも、其の局に當

る者は迷ひ易いのが常である。さういふ時に其の門に立つて食を乞うて居る佛弟子があると、その人を呼び入れて相談をして、公平な立場から判断をして貰ふといふことが屢々あつた。經典の中にも乞食に歩いた人が、争ひの仲裁をしたり、難問題の解決をしてやつたりした例が幾つとなく出て居る。人に物を與へるのを財施といひ、人に教へを與へるのを法施といふのであるが、佛弟子は財施を受くるかはりに法施をして、屢々世間の人に感謝されたのである。又斯様にして世間の種々なる問題に就て相談を受け、複雑なる世相を知り、人情の曲折を知ることが自身の修行にもなるのであつて、種々の點から見ても此の乞食の行は極めて有意義のものであつたといふべきである。

#### 四、釋尊の出家

釋迦族

此より釋尊が佛教を創められた當時の事情に就て話したいと思ふのであるが、それに先つて釋尊の御出家の事を少しく申して置かう。釋尊が印度の迦毘羅といふ國の淨飯王といふ國王の御子で、初めは悉達太子と申されたことは、御存知であらうと思ふ。但し國王といつても、印度のヒマラヤ山の南方の所謂中印度に、釋迦族の王を戴いて居た國が十國以上も分立して居たといふのであるから、先づ其の領土からいつても、又其の勢力からいつても、吾が國の昔の諸侯ぐらゐの者と見て宜いであらう。此の釋迦族といふのはインダス河の上流の方から中印度の地方へ入つて来て、多くの國を立てたところの、最も優秀なる人種であつたのである。釋迦といふのは『能』といふ義で、即ち大なる能力のある種族であるとの意味である。此の釋迦族の國々の中でも、迦毘羅は殊に榮えた國であつて、釋尊の御父淨飯王は賢明の聞えの高い名君であり、また御母摩耶夫人も淑徳の高い方であつた。たゞ此の摩耶夫人は釋尊を生まれてから僅かに七日で死去されたのは惜むべきことであつたが、



夫人の妹であつた橋曇彌といふ人が夫人に代つて養育の任に當られたので、釋尊は何の不自由もなく成人されたのである。

釋尊は初め悉達太子といはれ、淨飯王の長子であるが、委しくいへば、『悉達多』で、それは『一切義成』といふ意味である。其の御誕生になつてから間もなく、阿私仙人といふ人が王宮へ來て太子に謁せんことを願つた。其の頃仙人といはれたのは婆羅門の中でも殊に學徳共に勝れたものであるから（婆羅門のことは後に委しくいふ。）王も之を尊敬せられて、早速太子を見せられたところが、仙人は唯ださめざめと泣いて居た。王が不思議に思つて其の仔細を問はれると、仙人は答へて、『此の太子の御姿を見ると三十二相が一つも缺くる所なく具はつて居る。是れはまことに非凡な方である。他日若し王位を嗣がれたならば、必ずや徳を以て四方の國々を服して、印度を統一するほどの大業を成就せらるゝであらう。若し又王位を嗣がれなかつたならば、必ずや一切の人を救ふべき貴い教へを説かるゝやうになるであら

阿私仙人の豫言

う。是れはまことに目出たいことであるが、自分はモウ年老いて餘命は幾くもないので、此の太子の將來を目撃することが出来ない。それがあまりに残念なのでツイ涙を流したのである」と語つた。王は此の仙人の言を聞いて非常に喜ばれたが、併し仙人が「若し王位を嗣がれなかつたならば……」といつたのがたゞ氣がよりであつた。唯だ一人の男の兒であるから、是非とも立派に教育して、將來の名君としなければならぬのに、若し王位を嗣ぐことを厭ふやうな事があつては大變である、其の事のみが苦勞の種であつた。それで是非とも太子をして國王たることの幸福を深く感じて、王位を嗣ぐのを厭ふやうな心を決して起さぬやうにしなければならぬと考へて、太子の爲には費用などは全く問はず、榮華を極めた生活をさせ、又太子が十七歳に達せられた時に、隣國の拘利の國王の妹で耶輸陀羅といふ人を迎へて夫人とされたが、此の耶輸陀羅は非常な美人であつたのみならず、まことに温良貞淑で申分のない婦人であつた。されば世の中で此の悉達太子ほど幸福な方はないと

思はれたのであるが、此の幸福極まる生活の中に在つて人生の意義に就て大なる疑問を懷き、終に出家せらるゝやうになつたのである。  
 此より悉達太子即ち釋尊の御一生の中の重なる事柄だけを一通り申述べたいと思ふが、昔から釋尊の御一代を八つの時期に分けて、之を『八相成道』と申して居るから、先づ其の名を擧げて、之に就て簡単に説明をして行くことにしやう。此の分け方に就て二説あるが、今は天台大師の分け方に従ふことにした。之をたゞ『八相』といはずに『八相成道』といふのは、成道によつて釋尊御一代の活動が生み出されたので、即ち『成道』といふことが御一代中の最も重要な點であるといふ考へに依るものと思はれる。佛の說法はたゞ言語に依つての說法に止まらず、御一代の事蹟が、一々皆說法である。吾等は佛の歩まれた跡を履んで行きさへすれば、今は凡夫であつても、必ずや一歩一歩と佛の境界に近づき得べきである。されば此の八相を二千數百年むかしの事と思はず、直ちに吾等の進んで行くべき道を示されたものと

して見るべきである。先づ其の名を擧げると、

一に降兜率

二に託胎

三に出生

四に出家

五に降魔

六に成道

七に轉法輪（說法）

八に涅槃（入滅）

順を追うていふと、第一に『降兜率』といふのは兜率天より此の娑婆世界に降らるゝのである。兜率天といふのは天上界の一部で全く苦勞の無い所と考へらるゝのである。兜率といふのは『妙足』の義である。凡ての物が足りて平和安穩の所なの

である。然るに吾等の住む所は娑婆世界であるが、娑婆とは『堪忍』の義である。

此の世界は種々の苦があつて、之を堪忍しなければ住んで居られぬ所であるから、之を名けて娑婆といふのである。此處が娑婆であるのは、人々が皆佛性を具へて居ながら、之を育て、長ずることを知らぬから、互ひに相争ひ相闘うて苦を増して居るのである。釋尊は元來兜率天に住せられて、何の苦勞もなくして居られる方であるが、此の娑婆世界の衆生を哀愍せらるゝの餘りに、之に救護を與へ教化を與へんと思ひ立たれて、白象に乗つて此世へ降られたといふのである。白といふのは其の智慧の明かなることを現はすのである。平和安穩の所を去つて、苦勞の多い娑婆世界に下り、吾等衆生を教化せんが爲に力を盡さるゝのは即ち佛の慈悲の洪大無邊なる所以である。されば佛敎を學ぶものは此の佛の御心を以て吾が心と爲し、如何なる苦勞をも辭せずして世のため人のために力を盡さうといふ決心をしなければならぬのである。斯う考へると『降兜率』といふことは吾等の爲に何より大なる敎訓

である。

第二に『託胎』といふのは御母摩耶夫人の胎内に宿られたこと。第三に『出生』といふのは、四月八日に御誕生になつたことである。釋尊は此の娑婆世界の人類を救はうといふ目的で、此の土に降られたのであるから、其の説法を始められる前に、先づ吾等と共に人としての生活をせられたのである。即ち人の身の胎内に宿られ、人の姿をもつて誕生せられ、一般の人と同じやうに養育を受けて生長せられ、然る後に出家して修行を積み、然る後に成道して説法を始められたのである。此の事實は吾等に『凡夫の生活と佛の化導とは決して懸け隔つたものではない』といふことを教へらるゝものである。凡夫の生活をして居るものでも皆貴い佛性を具へて居るのであるから、釋尊の如くに修行を積んで怠らなければ皆共に其の具有せる所の佛性が育つて行つて、洪大なる智慧も具はり、世を救ひ人を教ゆべき力も具はるのである。此の事は吾等に取つて何よりも有難いことである。譬へば大空に懸つて

居る虹は如何に美しくても、此の地上の者が手を伸して之に觸れることは出来ぬ。然るに富士山やヒマラヤ山は如何に高くても、其の絶頂と吾等の脚下の土とは續いて居るのであるから、吾等が一步一步と歩を進めて怠らなければ、いつかは其の絶頂に到達することも出来るのである。釋尊が吾等と同じ土の上に生れ、吾等と同じ土の上で育ち、吾等の眼の前で修行して悟られたる實例を御示し下されたので、吾等凡夫でも決して自ら輕んじ自ら侮るには及ばぬといふことが明かになつたのは、返す返すも有難いことである。

其次には『出家』であるが、此の出家といふ事に就ては昔から随分誤解があるから一應辨じて置かなければならぬ。吾が國では『出家』といへば、世を厭うて世を遁れることであると昔から解釋されて居た。例へば熊谷直實が敦盛を殺して、世の無常を觀じて出家したとか、西行が其の友人の急に死んだのを見て無常を觀じて出家したとかいふことが傳へられて居る。此等の出來事は何れも源平時代のことであ



るが、あの時代は戦争が続いて、父子兄弟が生き別れ死に別れをすることも多かつたから、自然に無常といふことが一般に強く感ぜられた。そこへ佛教が弘まつたのであるから、世を厭うて出家するといふ人の多く出たのも更に不思議ではない。然るに釋尊の出家は世を厭うての出家ではなくて、道を求むる爲の出家であつたのである。たゞ世を厭ふといふやうな簡単なことではない、自ら人生の意義を明かにし、之によつて一切世間の人を教へ導いて、共に意義ある一生を送らせたいといふ大理想を懐いての出家である。此の點を充分明かにして置かなければならぬ。

釋尊は悉達太子として榮華の生活を送られたので、父王の恩の厚いことにも深く感銘して居られた。又夫人たる耶輸陀羅の温良貞淑なものにも満足して居られて、個人として何等の不平をも懐いては居られなかつたのである。併し其の榮華の生活の中にも眞の満足はなかつた。花の開いたのを美しいと思つて眺めて居ると、忽ち風に散つてしまふ。美しい姿をして居た人も年を取れば其の美しさは衰へてしまふ。

面白い音楽も幾度も聞けば面白さが減じて来る。その他如何なる楽しみもあまり久しく續けば、厭きて面白くなくなつてしまふ。斯ういふ事はたとへ王者の力を以ても、如何ともすることは出来ぬのである。又元氣であつた人が忽ち死んで行くものがあるが、これも王者の力で止めることも出来ぬのである。彼此と考へて見ると、まことに思ふに任せぬ世の中である。此等の事を種々に思ひ廻らして、釋尊は斯う考へられた。『自分は凡ての人に羨まれて居るが、確かに自分は此の印度中で最も幸福な者であらう。自分よりモット不幸な者が大多数なのであらう。其の最も幸福なるべき自分でさへ思ふに任せぬ事が夥しくある。自分より不幸な者はどれ程苦勞が多いかわからぬ。而もさういふ苦勞の多い者が世間の大多数であるとすれば、抑々人といふものが此の世に生れたのが無意味なことではないか。人生は果して無意味なものであるか。但しは自分等に人生の意義がわからぬので、無意義のものゝ如くに思はれるのであるか。何とかして此の解決を得たいものである。』斯ういふのが其

の心の底に蟠つて居た疑問であつた。

此の疑問を解決し得ずして、王宮に於ける榮華の生活を續けて居ることは到底堪へられぬ事であつた。一日も早く此の榮華の生活を離れ、身一つになつて印度各地を歴遊して、有力なる學者の門を叩いて其の教へを求め、人生の眞の意義を明かにしたいといふ希望は、年と共に愈々募つて來た。併し元來御心の優しい太子であるから、思ひ切つて王宮を出ることも出來ずに、煩悶の間に多くの歲月を送られた。太子は父王が自分をして出家の心を翻させる爲に、如何に苦心して居らるゝかをよく知つて居られた。又自分が出家したならば妻も歎くであらう、多くの臣下も失望するであらうといふことをもよく察して居られた。それで太子は『多くの人に歎きをかけて自分一人の望みを果すといふことは、あまり我が儘な事ではないか』と思ひ返して、其の出家の望みを自ら抑へて居られたが、併し此の大問題を解決し得ずして毎日を送るのはあまりに無意味なことであると思はれるので、其の苦悶は愈

眞の報恩

々加はるばかりであつた。

斯くして十數年を送られたのであるが、其の二十九歳の時になつて、初めて決心がついた。太子は考へられた。『人生の眞の意義を知ることが、獨り自分にばかり大切な事なのではない。親にも妻にも子にも、多くの臣下にも共に大切な事なのである。獨り自分ばかりで無く、親も妻も子も、多くの臣下も皆人生の眞の意義を辨へず毎日を送つて居る。彼等は共に皆不幸な者といはなければならぬ。若し自分が人生の眞の意義を明かにして、之を父親に傳へ、父親をして眞に意義ある生涯を送らせることが出來たなら、此に上超す孝行はあるまい。また妻子を教へて眞に意義ある生涯を送らしむることが出來たら、眞に慈悲深い夫であり、慈悲深い父であり得るであらう。之を普く臣下に教へることが出來たら、眞に君主たる責を全うするものといへるであらう。自分が教へを求むる爲に出家するのは自分一身の爲ではない、親のため妻子のため、多くの臣下の爲である。たとへ一時は彼等に歎きをかけ

ても、後に至つて之を償ふことは必ず出来る。今は少しも躊躇すべきではない。』  
 此の確乎たる決心がついたので、太子は竊かに王宮を忍び出て修行の旅に上られたのである。されば釋尊の出家は世を厭うての出家ではなく、世を益せんが爲の出家である。出家のかひがあつて人生の眞意義が明かになれば、必ず有らゆる人に對して之を説かるゝのであるから、必ず世を益すべきである。又恩愛に背いての出家ではない、恩愛を全うせんが爲の出家である。父にも妻子にも意義ある生涯を送らせて、恩愛を全うせんが爲に、一時其の恩愛に背くのも已むを得ぬ事であると考へて出家せられたのである。釋尊は後年に至つて、(勿論成道せられた後のことであるが)説かれたる清信士度人經の中に、  
 恩を棄て無爲に入るは眞實に恩を報ずる者なり。  
 とあるが、是れは實に釋尊の出家せられた御精神を能く言ひ現はされたものと思はれる。『無爲』とは世間を全く離れた生活のことである。暫く世間を離れて居るの

は恩愛を忘れた者のやうに見えるけれども、是れが實は恩に報ずる道であるといふのである。佛教を學ぶものは此處に意を注がなければならぬ。恩愛を忘れて唯一身を潔うする者は釋尊の御心に叶はぬ者なのである。  
 さて太子は竊かに王宮を忍び出られたのであるが、王が多くくの臣下に命じて手分けをして探らせたので、忽ちにして太子の所在が分つた。併し太子はどうしても其の目的を達するまでは王宮へ戻らぬといはれるので、父王は其の志の挫げられぬことを知つて暫く爲すがまゝに任された。それで太子は三十五歳の時まで其の修行を續けられたのである。

### 五、釋尊の修行

釋尊は出家されて後六年間御修行なさつたと傳はつて居る。初めは婆羅門の學者

佛陀伽耶の  
釋尊

を訪問して其の説を聽かれたといふことである。ところが其の學者の中には隨分學問あり、徳の高い人もあつたやうだけれども、釋尊を満足させるだけの教へを説く人がなかつた。そこで初めて人生の本當の問題を考へるのには、人の説を聽くだけで考へが決まるものではない。自分の問題は自分で深く考へて解決するより外はないといふ決心がついて、其以上に多くの學者の説を聽くことを止めて、佛陀伽耶に來られた。此の佛陀伽耶には尼連禪河といふ河がある。此の河へは私も行つて見たが、隅田川よりは稍々狭く、悠つたりと流れて居て、河の向ふ岸には小山が澤山あり、草木が能く生ひ茂つてゐて、非常に氣分の好い所である。成る程斯ういふ所に居たら私共のやうな者でも少しは悟りが開けるか知らと思つた位である。

釋尊は此の佛陀伽耶に來られて、尼連禪河の畔に庵を結んで、そこで足掛け六年間靜かに考へを練つて居られたのである。

こゝで一つ注意すべきことは、初め釋尊が太子として御出家なされた時に父君淨

飯王が非常に御心配になつた。何しろ今まで宮中に於て王子の生活をしてゐた者がいきなり唯の平民になつて修行に出るのだから、隨分苦勞が多からうといふので、五人の家來を選んで釋尊の從者としてお供を命ぜられた。勿論出家する以上は身一つになるのが當然であるけれども、元來釋尊は非常に情愛の篤い方で、折角父親がそれ程心配して呉れるのを無にするに忍びないといふ御考へで、五人の家來を連れて方々の學者の門を叩いて修行して居られたのである。だから初めは至極暢氣なものであつた。お供が五人もあつて、食べる物も、着る物も凡て親から仕送りをして呉れるのであるから、吾々も斯んな修行ならいくらでもやつて見たい位のものである。ところが愈々何れの學者の説も自分の疑問を解決するに足らぬことを見抜いて、佛陀伽耶に來られた時、釋尊は親の仕送りを辭退しなければならぬと決心された。何でもない事のやうであるが、是れが非常に大切なことである。自分の生命を自分が骨折つて維持する位のことにはしなければならぬ。自分の生命一つを他人の厄

## 行乞の生活

介を受けて漸く維持して居るやうな人が、如何に『國家の爲に、民衆の爲に……』と力んで見たところでも何にもなりはしない。そこに眼を付けられたことは非常に尊いことである。そこで五人の家來を呼んで、『今までは親の恩愛を無にするに忍びないから親に厄介をかけたけれども、今後は自分一人の力で生きて行つて、命懸けで修行したい。今日からは親の仕送りは一切辭める。それで氣に入らない者は歸れ。若し自分で生きる此の生活が一緒に出来る者は私と一緒に修行しても宜しい』と言ひ渡された。流石に五人の家來は何れも確かりした者であつたから、『左様なら』と云つて歸りはしなかつた。『それなら私共も御一緒に……』といふことになつた。

佛陀伽耶に於ける其後の六人の生活は毎日人の門に立つて物を乞ふことで維持せられ、極く質素な貧しい生活が續けられたのである。此の行乞といふことに就ては前に申したことを参照せられたい。是れが非常に大切なことである。贅澤をしなれば生きてゐられないなどといふ人間が、世を救ひ、人を救ふことの出来た例は決

してない。自分の慾望を充たすことに専らでありながら、口に天下國下を説いても決して役に立つものではない。人間は眞に世の爲め人の爲めと思ふならば、先づ自分の生活を質素にする決心が必要である。現在も昔も變りはない。釋尊が自分で乞食の生活をして行かうと思ひ定められたことは、極めて平凡なことのやうだが、至て貴いことである。その決心がなくては世を救ふことは出来ない。晝間は人の門に立つて食を乞ひ、家に歸つて後は釋尊と五人の者が靜かに想を練り、又お互ひに意見の交換などしたものと思はれる。

斯くして釋尊のお齡三十五になられた時には、段々と修行が熟して來て、最早人生問題に就ての疑問も略々解けたと思はれたが、或る日尼連禪河の畔を歩きながらフト河の水に自分の顔の映つたのを見ると、頬骨は高く現はれ、肉は落ち顔色も悪くて、實に見る影もない有様であつたので、これは不可ないと氣付かれた。今まで種々の難行苦行を重ねたのだから體の衰へるのは已むを得ないけれども、一體自分

は自分のために修行に出た筈ではなかつた。人生の本當の意義を悟つたなら直ぐに歸つて親にも妻子にも、家來にも説いて聞かせて、皆を意義ある生活に導き入れやうといふ積りで出家したので、此の自分の身體は自分のものではない。唯だ苦勞をして修行して自分さへ悟りが得られれば宜いと思つたが、自分が若しこゝで死んでしまつたら親や妻子や、大勢の家來を救ふことは出来ない。それでは出家した甲斐がない。もう少し自分の體を大事にしなければならぬ。この生命は自分一人のものでないといふことを本當に思ひ當られたのである。

少しく餘談になるが、法華經の中には不惜生命——生命を惜まずして法を弘めるといふことが説いてある。此の不惜生命といふことの意味を取違へて、生命一つを投げ出せば何でも出来るかと考へてゐる人があるけれども、此の生命、此の身體はそんなに輕んずべきものではない。一日生きれば一日だけ世の中の爲になり、人の爲になるのなら出来るだけ長く生きてゐたいものである。生命を捨てても格別の効果が

ないのなら敢て生命を捨てるには及ばない。深草の元政上人は平生身體を非常に大切に於て養生を怠らず、人にも此の事を説いて居られたが、或る時一人のお弟子が『お經の中には不惜生命といふことが書いてあるではありませんか。それに上人は身體が大事だと仰しやるのはお經の趣旨に背きはしませぬか』と訊ねた。元政上人は『不惜生命の覺悟を持つてゐればこそ身體を大事にするのである』と答へられた。此の言葉には非常に深い意味がある、いざとなれば道の爲に捧ぐべき此の生命であるから、つまらぬ事の爲に生命を捨てゝはならない。自分の不養生から死を早めることがあつては濟まぬ。教へを弘めるためには生命は惜しまぬのであるが、無論生命を惜しまぬといふことは徒らに死ぬることではない。釋尊もその事に氣付かれた。自分は是れから人生の有らゆる問題を究めて歸つて、親や妻子や家來の者達を導かねばならぬのだから、此の身體は大事にしなければならぬといふことを痛切に感ぜられたのである。

斯う感じて居られる時に、丁度向ふから若い娘が村外れにある社へ捧げるために乳糜（牛乳の中に穀物を入れて煮た、オートミールのやうなもの）を持って來るのに出會つたので、その娘に事情を話して之を貰つて飲んで、非常に元氣を恢復したとのことである。これは決して自分の一身のみを大事にするといふことでなく、自分の身が親を救ひ、妻子を救ひ、世の一切の人を救ふ大責任を持つてゐるから自分の身を大事に思はれたのである。

その後段々とお考へが熟して來て、三十五歳の終り——現在では一般に十二月八日といふことになつて居るが、印度と日本とは曆が違ふので正確な日時は分らぬ。兎も角三十五の齡の盡きやうとする頃に、長い間の苦心努力が報ひられて愈々人生の本當の問題が根本から解決出來さうだと云ふことになつたのである。

前に申したやうに尼連禪河へは私も行つて見たが、可なり廣い河ではあるが歩いて涉れるやうな淺瀬もある。此の河の一方に小山が幾つかあつて、その近邊に釋尊

菩提樹の下

は庵を結んで居られた。其の反對の側は平地で岸には大きな菩提樹があつた。現在でもあるけれども、これは千年も二千年も昔のものではなく、丁度根岸の御行の松と同じやうに後世に至つて植替へられたものと思はれる。此の菩提樹の下に疊二疊敷位の石がある。その近邊では昔から此の石の上に坐つて種々なる人生の問題を考へた人が多いと云ひ傳へて居る。釋尊も此の石の上に坐られたといふことである。河を涉つて來られると丁度男の兒が草刈りをしてゐたので、其の草を貰つて石の上に敷いて坐り、さア今まで六年間に考へたことをこゝで纏めるのである。こゝで自分が人生の問題の解決が出來ないうちは、此の座を立つまいと決心をなさつた。

人間には此の決心がどうしても必要である。日本には『いづれ其のうち……』などといふ非常に都合の好い言葉がある。『どうも御無沙汰して居ります、いづれ其のうちお伺ひいたします』といふが、一體いづれ其のうちといふのは何時のことか。十年先のことか、二十年先のことか分りはしない。さういふ弛んだ心では何も成就

せぬ。今釋尊はそこで坐り直して今までの考へを纏め、人生の本當の意義を徹底的に知らうと決心せられたのである。

### 六、降魔と成道

そこで降魔——魔を退けるといふ問題が起つた。印度を歩いて見ると、釋尊の降魔の有様を石に彫刻したものが方々にある。現在佛敎はセイロン島に幾らか残つてゐる位で、印度の本土では殆んど廢れてしまつてゐるけれども、併し釋尊の降魔の姿を石に刻んだものは随分残つて居る。その惡魔といふ者の姿を見ると二種類ある。一つは槍を持ち或は鉞を持つて、打つて掛るやうな姿。一つは若い女が花束を持ち横目を使つて、人を誑かすやうな艶めかしい姿である。凡そ世の中で人が何か一つの事を成さうとする時には必ず二種の魔が起る。其の一つは迫害、其の一つは

### 二種の魔

誘惑で、此の二つの魔に克たなければ何事も成就するものではない。殊に若い人々は此の點に就て大に注意を要すると思ふ。世の中に出て何か眞面目な事をしようと思ふとそこに必ず迫害と誘惑が起る。その中でも寧ろ誘惑の方が恐ろしい。そこを踏切らなければ何事も出来るものではない。愈々悟りを開かれるといふ時に、やはり魔が迫つて來たといふことが經典の中に出てゐる。それには種々のことが書いてあるけれども、大體之を纏めて見ると迫害と誘惑である。一體魔といふのは「障」といふ意味で、これは心の中から起るものであつて、決して外から來るものではない。釋尊が愈々最後の決心をされる時、此の二種の魔が心の中に起つた。一つには自分の悟つたことは極めて奥深いことで、斯んなことを世の中に出て説いたところで容易に行ははれないであらう。此の敎へを世に説き弘めるためには前途にどれ程困難があるか知れないとお考へになつた。所謂迫害を恐れる心である。これはいつの時代でも此の通りである。たとへば現在でも、本當に正直に眞面目な敎へを説



いたら、相當に迫害の來ることは覺悟しなければならぬ。いつの時代でも十人が十人悉く正しい人間とは限らないから、本當に眞直ぐなことを云へば必ず邪魔をする者がある。それを考へると少し氣が臆するのである。自分の信じたことを眞直ぐに説けば世間が容れないかも知れない。世間に妨げをする者が多いかも知れないから、世間に向くやうに柔らかに曲げた方が宜くはないかといふやうな、臆病未練な心持が起る。これは迫害を恐るゝ心持で、即ち一種の魔である。

斯く迫害を恐れる心持が起ると同時に又誘惑も起つて來る。たとへ自分の説の全部は世間に容れられないにせよ、これだけの事を説いたならば、人が驚くであらう、尊敬する人もあるであらうといふ心持が起る。世間の人を驚かさう、世間の人から重んじられようと思ふのが一種の魔である。此の迫害の悪魔と誘惑の悪魔をスツカリ撃退してしまはなければ本當に正しい仕事は出來ない。併し人間が本當に困つて居る時にはそんなに誘惑の起るものではない。もう一足といふ時が最も危な

魔の乗する時

い。私は登山が好きで、よく方々の山を歩くけれども、谷間などの非常に危ない所では決して怪我をしない。其の危ない所を通り越して、『まアよかつた』といふところで大概尻餅をついたり、怪我をするものである。お釋迦様も愈々最後の考へをお決りになる時、斯ういふ事を世の中の人の爲に説いても中々弘まるまいといふ心持と、又一方には是れだけ深く悟つたのだから、さぞ大勢の人が驚くであらう、尊敬するであらうといふ念が自然に起つて來た。其の時に『ナニ、正しい事を世の中に弘めるのに何の恐るゝところはない。迫害何物ぞ。自ら信ずるところを一切衆生に説き弘めること以外に何も考へるには及ばぬ。又世間の者が褒めても譏つても、そんな事を顧慮してはならぬ』と思ひ定められた。これが即ち降魔である。私などは人の前に立つて佛様の教へのお取次をして居るのであるが、私共のやうに本當の凡夫で取るに足らぬ者でさへも、世の中に出て人の前で物を言つて見ると、何か迫害がありさうに感ずる。又誘惑も相應にある。

『先日あなたのお話を聞いて皆感心してゐましたよ』などいられると、ツイ好い氣持になつて、『ウンさうか』と、直ぐに心の籠が弛む。人間は褒められる程恐ろしいことはない。吾々でさへすでに二つの魔と闘はなければならぬ。況して佛様が悟りをお開きになるまでには如何程苦心して種々の魔と闘つて來られたか、想像して見ると實に尊いことである。

降魔が出來て初めて成道が出来るのである。此の成道までの努力といふものは實に大變なものであつたらうと思はれる。吾々はたゞ迷つてゐるだけであるから、ほぼ推量するだけのことで、悟つた境界などはよく分らぬけれども、モウ一足の所で色々な妨げが起るやうである。それを凡て打ち破つて行つて、人に褒められることも、人に迫害されることも全く意に介しない、所謂境遇に負けない、周圍のものに一切支配されないといふ覺悟が出來て、こゝに於て初めて成道で、即ち悟りをお開きになつたのである。

### 七、説法と入滅

成道せられてから直ちに世間に出て説法を始められたのであるが、此の説法が八十の御齡まで凡そ五十年近く續いたのである。教へを説くにしても唯だ説くのは易しいことであるが、釋尊は常に其の心に歡喜の念をもつて教へをお説きになつたのである。お經の中に『樂説無畏』樂説して畏れ無しといつてある。樂説とはいつても悦んで教へを説くことを謂ふのであるが、これが容易に行へることではない。いつでも大勢の人が悉く緊張して聽いて呉れ、ば吾々でも喜んで説くが、決してさういふことばかりはない。私などは唯だ佛様の教へのお取次ぎをするだけで、而もちやんとお膳立ての出來てゐる所で話すのだから何でもないが、世の中に乘出して有らゆる人を相手に教へを説くことは中々容易な業ではない。それも世間の人の氣

に入る話だけして居れば、皆黙つて聴くかも知れないが、自分の信ずる所を憚る所なく説けば、妨げが起るかも知れない、迫害が来るかも知れない、敵が多く出来るかも知れない。斯ういふ中でどんな目に遭つても心から悦びを感じて教へを説くことは、佛の大慈悲の御心でない限りは決して出来ることではない。私などは凡夫だから誰か一人欠伸をしても『なんだ、欠伸をして居る人がある、モウ止さう』といふ氣持になる。その癖に自分が人の説を聴く時は随分欠伸をする。どうも人間は我が儘なものである。

さて釋尊は四十數年も説法をせられて、八十で亡くなられたので、これを入滅といふ。人間に死ぬといふことのあるのは意義のあることである。人間の命に限りがあるのは實はよいことである。釋尊は『若し自分がいつまでも世の中に生きてゐたなら、佛にはいつでも逢つて教へが聴けるといふ我が儘な心持が起つて、中々眞面目に教へを聴かないであらう。』と仰せられた。名所の近邊にゐる人は大概其の

懈怠の心

名所を見て居ない。私は神田の駿河臺に三年ゐたが、一度もニコライ堂を見に行かなかつた。それから本郷へ引越す前の日に大急ぎで見に行つて、ニコライといふ人に逢つて非常に感心して、その後は時々本郷から通つて行つてニコライの教へを聴いた。それ位なら近くにゐる中に行けば宜かつたのだが、人間は變なもので、いつでも行けると思ふと中々行かない。そのことをお釋迦様は云つてらつしやる。いつでも佛に逢つて教へが聴かれると思ふと大概は聴かない。聴いたとしても魂を籠めては聴かない。又明日聴かれると思ふから宜い加減に聴いてゐる。ところが佛がゐなくなつてしまふと初めて、もう佛様はゐらつしやらない。生きてゐらつしやる間にモットよく聴いて置けばよかつたと、そこで初めて眞剣に考へるやうになり、佛が生きて居られた時に説かれたことを又繰返して考へるやうになる。それ故に八十まで生きて説かれたのは皆大勢の人に對する教へであるが、死んで行かれることも亦衆生に對する教へであると仰しやつた。佛の教へは有難いと分つて居るやう

でも、本當には分つて居ない。ところが佛の御入滅といふことに出逢つて見て、初めて佛の生きてゐらつしやる間にお説きになつたことを本當に眞面目に考へて、そこでやうやく其の深い意義がわかるのである。それだから死ぬといふことは本當に大きな教訓であると、法華經の中にも、また涅槃經の中にも繰返して説いてある。

人生に死がなかつたら人間はどんなに我が儘になるか分らない。だから人が死ぬことは吾々に大きな教訓を遺して行くものだと思へば、死んで行く人に對して唯だ悼み悲しむだけでなく、心から掌を合せて感謝して、回向の一遍もしようといふ心が起る筈である。實際吾々は親達が生きてゐる間は親父は嚴ましい、母親はうるさいものと思つてゐたが、死んで見ると、生きてるうちにもう少し何として置けばよかつたなアと熟々考へる。吾々でも少しばかり本でも讀めば、『人生に死がなかつたら人間はモット我が儘になるだらう』など、理窟は一通りいへるが、吾々凡夫であ

るから、自分がまさか今夜死にはすまいと思つてゐる。人生無常で、いつ死ぬか分らぬといふ理窟は重々承知してゐながら、まさか今夜ぢやなからうといふ了簡で居る。現に私など明日支那料理を御馳走になる約束がしてある。明日の晝過ぎ支那料理が食べられると思つてゐるのだから、實は淺ましいものである。此處で一週間も續けてお話を申上げる約束をしたりするのも、まさか今夜死ぬとは思はないからである。しかし若し今夜死んだとしたらどうであらう。私などは實に見苦しい一生を終つたことになるであらう。

多くの人は他人の死ぬのを見ても、自分だけはまだ、當分大丈夫だと思つてゐる。これが人間の常である。それ故に今日すべきことを明日に延ばし、今月すべきことを來月に延ばし、『いづれ其のうちにやらう』と思つてゐる。私共學生時分に、試験前になるといつでも今日は英語を何頁、漢文を何頁、數學を何頁勉強しようと、ちやんと時間割を拵へて始めるけれども、夜十時になると眠くなつて、又明日

にしようと思つて寝てしまふ。斯ういふ事を繰返して愈々試験の前日になると、『斯んなところは出はしまい』と思つて讀まないで行く、生憎そこが出る。さういふ目に幾度も遭つてゐながら今以後後悔しないで、『いづれそのうち』を續けてゐる。それでも人生に死があればこそ、私共は時々『生きてる間に確りしなければならぬ』と考へるのである。死といふことは吾々にどんなに大きな教訓になるか知れない。子供が死んで行くのを見るにつけても此の事が痛切に思はれる。——私は子供を三人亡くした。一人は生れてから一週間、一人は一箇月、一人は三ヶ月位で死んで行つた。子供が生れて直ぐ死ぬのを見ると、『馬鹿々々しい、一體何の爲に生れて來たのか。折角生れて來たのなら、少しは世の中の役に立つてから死んだら宜さうなものだ。散々父親や母親に苦勞させて、直ぐ死んで行くのなら生れて來ない方が宜かつたらう』といふやうな氣もする。ところがよく考へて見ると、生れて直ぐ死んだ子供でも、決して無駄に生れて無駄に死んだのではない。赤ん坊だから口は

何時死別しても後悔ないやうに

利けないので、黙つて死んで行くけれども、『私は今死んで行きます。お父さんあなたは現在生きてゐるけれども、あなたもいつ死ぬか分らない。今日の一日を無駄になさるな。今日の一日を何故無駄になさるか。モット確かりなさい』と、死によつて親に大きな教訓を遺して行く。それ故に此の幼い子を心の師として、心から掌を合せて拜む氣持になれるのである。

人間がお互ひに死といふことを考へ、今夜死に別れをするかも知れぬと思つたら決して無理や我儘は云へない。親子でも、兄弟でも夫婦でも、今夜喧嘩してお互にブン／＼してゐて、明日の朝目が覺めて見たら喧嘩の相手が死んでゐたとしたら、『あゝ喧嘩をしなければよかつた。もう少し優しくすればよかつた』と思ふに違ひない。殊に夫婦喧嘩などは大抵は今に向ふが謝つて來るであらうと、兩方で多寡を括つてやつてゐる。その場合に喧嘩の相手が死んだとしたらどうであらう。『あゝ喧嘩をしなければよかつた、邪慳なことを云はなければよかつた』と熟々思ふであら

う。故にお互ひはいつ死に別れても後悔しないだけの覺悟を持つことが大切である。さうすれば今日一日でも喧嘩は出来ない、邪慳なことも出来ない。人間が常に死を考へてゐたら必ず立派な一生が送れるであらうと思はれる。日蓮上人は「先づ臨終を習うて」といはれて、一切の問題よりも此の問題が大切であると教へられたが、それはいつ死んでも後悔のない行ひをせよと教へられたものと解釋すべきであらう。釋尊の御入滅によつて與へられた教訓は實に大きいものである。私共は凡夫であつて、碌なことは出来ぬけれども、斯ういふ佛の教へを伺つてゐるので、始終とはいへないけれども、殊勝にも時々斯ういふ問題を眞面目に考へて見る。その眞面目になるのが度重なれば、幾らか自分の一生が意義のあるものにならうと思ふ。

## 八、佛典の特色

斯の如く釋尊の御一生は實に尊いものであつた。私共が經典を讀んで常に感ずることは、世の中には聖人、賢人と謂はれる人が昔から随分多く出て尊い教へを殘して居る。私は佛教を信するからといつて、他の教へは總て價値がないなどは思はない。バイブルを讀んで見れば、耶蘇の教へも尊い。論語を讀めば孔子の教へも尊い。又コーランを繙けばマメホットの教へも尊い。何れも襟を正さねばならぬものだけれども、唯、耶蘇にしても、孔子にしても、マホメットにしても、その教へを説くまでに自分の通つて來た徑路を示して呉れてゐないことが甚だ残念である。耶蘇はガリレヤの大工さんの息子で、三十歳の頃までは父親の手傳ひをしてゐたが、或る時ヨハネといふ人の説教を聽いて感奮興起し、自ら神の教へを傳へることを己れの天職と考へたといふことである。大工の息子が神の子として世に送られたのだといふ自覺を得るまでには、様々に思索し冥想したであらうと思はれるが、その間の精神的變化に就ては新約全書の中にも打ち明けてない。神の子といふ自覺を得る



までに通つて来た途筋をモット詳しく教へて呉れたならば、吾々にまだ深く深い教訓と感銘を與へたであらう。唯だ『吾れは神の子なり』といふ自覺を得たといふだけで、それ以上のことは何も打ち明けて呉れないのは非常に残念に思ふ。マホメツトはアラビヤの或る富豪の家に養子に行つて商賣をしてゐたが、三十五歳の頃から數年間靜かに考へた結果として、吾れは神によつて送られたる豫言者なり、との自覺を得たといふことである。ただの商人が神によつて送られた豫言者であるといふ自覺を得るに至るまでには、精神的に種々な途を辿つたであらうと思ふが、マホメツトの遺したコーランを讀んで見てもそのことに就て何も説いて居ない。孔子は論語の中に『十五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず』と云つてゐる。しかしどうして三十にして立つたか、どうして四十になつて惑はなくなつたかといふ、その徑路は云つてゐない。孔子が四十にして惑はないやうになるまでには様々な煩悶もあり努力もあつたであらうが、その間の事情は孔子も打ち明けてゐ

釋尊の歩  
まれた跡

ない。

然るに釋尊は御幼年の時から、三十五にして世に出て教へをお説きになるまでに辿られた途筋を少しも隠さずに打ち明けて下された。釋尊の御一生程ハツキリしたものはない。經典を讀まずとも、唯だ釋尊の御一生を知つただけでも、成程人間は斯ういふ途を通つたら意義ある一生が送れるだらうと首肯ける。この一事だけでも、私共は佛法を學ぶ悦びを特に感じなければならぬと思ふ。釋尊は天から降つて來て教へを説かれたのではない。人間として世に出て人生の有らゆる苦難を嘗め盡して、遂に悟りを開いて教へを説かれた。その通り抜けられた途筋を包まず示して下さつて實に有難いことである。さういふ譯で、吾々が釋尊の御一生を明かにするのは實に意義のあることである。

しかし釋尊が如何に勝れた方で在られても、一切の人が佛の尊い教へを聽いてこれを理解する力をもつて居なければ、折角の教へも的のないのに矢を放つやうなも

のであつたらう。さう考へると、釋尊の御出現以前に於て婆羅門の教へによつて、人々が相當に訓練を受けてゐた所へ釋尊が出られたことは大いに意味のあることである。その意味からいつて、一切の教へは佛法の續きだと云へる。佛様があられて急に佛法が始まつたのではない。佛教の興る前に婆羅門の教へがあつて、その婆羅門の教へが次第に發達した後に佛教のやうな勝れた教へが興つたのである。凡そ宗教を弘めるのに、二つの大事な條件がある。一つは一切の教へを質物と思はないことである。質物で人を欺く教へが百年、二百年、千年も人の心を支配することは決してあり得ない。人間はそんなに馬鹿ではない筈である。佛教を信じてゐる者が動もすれば『耶穌は質物だ』といふ。しかし質の教へが千年も二千年も人の心を支配してゐたとすれば、人間はよく／＼詰らぬものといふことになるではないか。そんなことを云ふのは自分で自分を侮辱することである。十年や二十年は下らない教へによつて世を欺き、人を迷はすことも出来やうが、五百年、千年と迷はし

續けることは到底出来ない。所謂聖者その人は心から深く信ずるところを世の爲に説いたから、その教へが五百年も千年も人の心を支配してゐるに違ひない。私共は佛教を信じてゐるけれども、耶穌にしても心から自ら神の子であると信じて教へを説いたものと思ふ。マホメツトも心から神によつて送られたと信じて教へを説いたに違ひない。孔子は『五十にして天命を知る』と云つた。五十歳になつて初めて『天は何故に自分をこの世に生んだか。斯の道を説かせるためである』と悟つて、殊に魂を打込んで儒教を説かれた、といふのである。苟くも一つの教へを創めた程の人が確信なくして教へを説くことは出来ない。又同じ佛教の中に於ても法華經を説く人あり、念佛を説く人あり、禪を説く人もあるが、世を欺き人を誑すために説いてゐるのではない。何れも世を救ひ人を導くために説いてゐるのだといふことを認めなければならぬ。確信もなくして世の人を迷はせ、單に自分一身の榮えることを目的として説くといふやうな淺墓な教へが五百年、千年と世に榮えることはあ



教の選擇

り得ない。こゝを確りと考へなければならぬ。

第二の問題として、然らばどれでも宜いかといへば、決してどれでも宜いとはいへぬ。人の生命には限りがある。百年生きる人はない。人の體力にも、心の力にも限りがあるのだから、最も善いものを選ばねばならぬことは勿論である。どれでも皆相當に價値のある教へであらうけれども、その中の最も勝れた教へを擇んで、自分の身の力と心をこれに打込まなければならぬ。ウツカリして居てはならぬ。此の一生は二度と來ない。今日一日は再び戻つては來ない。今日一日を無駄に過して、あゝ無駄をしたと後悔しても追ひつかぬ。僅か五十年か六十年の生命である。その日々を朝寢をし、晝寢をし、夕寢をして飯を澤山食べてお客と世間話をして居れば、一日の中で教へを學ぶべき時間は極めて僅かである。その僅かの時間を下らない教へに打ち込んでしまつてどうするか。それ故にどれでも相當に尊い教へではあるけれども、出来るだけ勝れた教へを擇んで、この教へに全身の力を打込むやうに

心掛けねばならない。

それにはシツカリした決心が大切である。所謂發心することである。與へられた今日の日に何の縁あつてか佛の教へを學ぶことが出來た。此の有難い縁を無駄にしてはならないと心から思ひ詰めることが即ち發心である。徒らに多くの經典を讀み種々の理論を弄んでも、それは單なる道樂であつて何の力にもならない。勿論宗教的に云へば人間の生命はこの世だけではない。後まで續く生命であるが、後まで續く生命を意義あるやうにするためには、この世に於ける此の一日を無駄にしないといふシツカリした覺悟を持つことが極めて大切である。斯様に釋尊の御一生から自分達のことを考へて、自ら省み自ら勵むやうにしなければならぬ。楞嚴經の中に、

多聞ありと雖も、若し修行せざれば不聞と等し。人の食を説くも終に飽くこと能はざるが如し。

とあるのは眞に良い教訓である。書畫骨董を玩ぶ人がいろ／＼の物を買ひ集めて、其の多いのを誇るやうな心持で多くの經論を讀んで、得意になつて居る人も世間には少くないが、それはまことに詰らぬことである。信仰といふものは道樂半分にやるべきものではない、モット眞面目な心持でなければならぬ。

### 九、釋尊と其の時代

次に釋尊が世の中に出て教へをお説きになつた前後の大體の事情を考へて見よう。御承知の通り印度は隨分古い國で、釋尊の出現せられた當時は、既に文化の發達が絶頂に達したといつてもよい位であつた。當時の印度に於ける宗教の有様はどんなであつたかと申せば、前に申した如く佛教の興る以前は婆羅門教であつて、婆羅門教の中から隨分學者も出た。一體何れの國でも其の國の打建てられる時は武力

印度の所謂  
四姓

を以てしなければならぬから、最初は武士階級が最も勢力を持つてゐるのが當然である。而して日本以外の世界の何れの國に於ても最初から國王のあつた國はない。初めは民衆が集つて國を造り、共和政治のやうな状態であるが、其の國を統一し、發展せしめる必要上其の國の中から智慧のある人とか、徳のある人とかを選んで上に推戴するのが定まつた例である。獨り吾が日本のみは皇室の御祖先が吾々の先祖を率ゐて此の國に御到着になつて、此の國を肇められたのであるから、これは實に世界無比の國と申さなければならぬ。印度も他の國と同じく、初めは武士階級が國を建て、その中から特に力の有る者を國王に推すといふ状態であつた。この王國の中であつた有力なものが中印度だけでも十か十一もあつたといふことである。その國王を舍んだ武士階級を刹帝利と稱してゐた。

さて何れの國でも、宗教は早くから發達するものであつて、まだ其の國が十分に整頓しない時から何かの宗教が起つて来る。人間が自分の力だけで生きて行かれない

いといふことはどんな野蠻人にも分る。例へば雨が欲しいと思つても降らないし、平穩を望んでも風が吹く。人間は雨を降らすことも風も吹かすことも出来ないから、どこかに雨を降らせたり、風を起したりする人間以上の力があるだらうといふことは、教育のない者でも思ひつく。そこから宗教が起つて來るのである。宗教の發達については後に又申すつもりであるが、一方に於ては武士が勢力を持つて國を治めて居り、これに並んで宗教家たる婆羅門が相當に重きをなして居たので、武士と婆羅門とが一般人民の上に立つて居たわけである。尤も最初は武力を以て國を建てたのであるから、武士の方が上で、第一は武士、第二は婆羅門、それから第三は毘舍、即ち商人及び地主であつた。吾が國では士農工商といつて武士の次は農民といふことになつてゐたが、ヨーロッパのギリシヤ、ローマなどでは寧ろ商人の方が重んぜられてゐた。印度でも同じく商人、及び農民の中の廣大な土地を所有する地主が重んぜられてゐたのである。それから第四には首陀、即ち小作農と奴隸――

奴隸といつても他の國の奴隸とは多少事情が異つて居るが、先づ此の四つの階級を即ち四姓と稱するのである。

此の外に別に旋陀羅といふものがある。これはアリアン人種がインダス河の上流から入つて來た時に征服されたものらしいので、餘程劣等なものとして抑へつけられて、殆んど人間らしく取扱はれて居なかつた。所謂賤民である。日本でも昔は穢多と稱せらるゝ階級があつて、汚ない仕事のみをしてゐた。印度でも同じく多くの仕事は皆他の階級の者が取上げてしまつて、旋陀羅は獸の皮を剝ぐとか、生物を殺すとかいふやうな、極く汚ない仕事をしなければ暮しが立たなかつた。いつでも汚ない仕事をしてゐると自然に品性も下劣になるものである。日本でも同じことである。私は餘りその知識はないけれども、人類學者などの説によると、昔の穢多と稱する者の體質とか、その他凡てに亘つて調べて見ても、決して人間として劣等な者ではない。併し數百年の長い間虐待されて、卑しい仕事ばかり與へられて來た爲に

## 釋尊の卓見

心も僻み、人格の下劣な者が多くなつたのは實に氣の毒であると申して居る。旃陀羅もその通りで、久しく逆境に置かれ、卑しい職業のみを與へられた爲に段々心が僻んで來たのは已むを得ない。併しながら釋尊は斯ういふ中に出て『一切衆生悉く佛性あり』、苟くも人間として生きてゐる以上は、皆佛となるべき性質を具へてゐるものだ、人間として卑しむべきものは一人もないと説かれた。これは當時の社會に於ては驚異的なことであつたであらう。現在の吾々が此の言葉を聽いても當然の事だと思ふが、斯ういふ階級制度の嚴しかつた時に、國王の子と生れた釋尊が『一切衆生悉く佛性あり』と仰しやつたことが、どれだけ印度人全體に大きな希望を與へたか分らない。この一つの言葉だけでも、佛の大慈悲といふことは考へられるのである。

併しそれから後に至つても、即ち釋尊の時代より後でも階級制度はなほ嚴しかつた。私は二十日間ばかり印度を旅行したが、現在でもまだ相當に階級制度は甚し

いやうである。例へば首陀の家系の者と刹帝利の家系の者とは道で會つて挨拶をするのにも區別をしてゐる。刹帝利の方は立つて少し首を下げるくらゐだが首陀の家系の者は膝の下まで頭を下げて、まるで殿様と家來ほどの差がある。私は或る日本人の家に暫く御厄介になつて居たが、實に滑稽な話をその奥様から聞かされた。その家の四つになる子供が縁側で遊んでゐて、誤つて庭へ落ちて泣いてゐるのを庭掃除の男が見て、縁側へ抱き上げて呉れた。さうすると他の雇人がそれを見て、『あいつは首陀で、身分が低い者でありながら、日本から來た偉い人の子供に手を觸れるといふのは、飛んでもない僭越な事をする奴だ。身分を忘れて主人の子供に手を觸れるやうな、不都合千萬な奴と一緒に働くことは出来ない。今からお暇を貰ひたい』と、ストライキもやり兼ねまじき氣勢なので、奥様は弱つてしまつた。そこで、『あれは決して悪い見でしたのではあるまい。子供が泣くので、ツイ可哀想だと思つて抱いたのだから、そんなに云はないでもいゝだらう』と宥めたが、何

んと云つても聞き入れない。仕方なく其の庭掃除の男を連れて来て、「洵に相濟みません、以後は決して斯う云ふ不都合な真似は致しません」といつて謝まらせて、漸く納まつたといふことである。

話が横道へ外れるが、この状態ではいかに一部分の印度人が獨立運動をしても駄目だと思はれる。人間を人間として尊重しないで、舉國一致の出來やう筈がない。唯々一部の人が政治運動をやつて獨立々々といつても、其の他の大衆は無氣力で、人間だか動物だか分らぬやうな生活をしてゐる。労働者などの有様を見ると、印度の食事は大抵ライスカレーに定まつてゐるやうであるが、土の上に坐つて、大きな木の葉を前に置いて、その中にライスカレーを入れて、砂や泥の付いた手で掻き廻しながら食べてゐる。斯ういふ浅ましい生活をしてゐる者を集めて獨立運動をして、たとへ獨立して見ても直ぐ潰れてしまふことは明かである。先づ第一に國民の本質をモット善くしなければならぬ。カルカッタで或る人に逢つた時に獨立運動

の話が出て、「君はどう思ふか」と訊かれたので、「印度は佛教の起つた所で吾々はそのお蔭を受けてゐるのだから、印度には充分好意を持つのであるが、獨立運動は當分物にならないだらう」と私は答へて置いた。現在でも斯んな状態であるから、お釋迦様當時に於て、長い間虐げられた者が如何に無氣力であつたか略々想像が出來やうと思ふ。

これは餘談であるが、印度の昔の事に立戻つて考へると、社會が次第に複雑になつて來ると、簡単な制度では國を治めることが出來ないので、整備した法律を作る必要が起つて來るのである。然るに法律を作らうとしても、刹帝利はたゞの武弁であつて、概して學問がないから、法律などを作る力がないので、自分達に代つてこの國の法律を作つて呉れと婆羅門に頼んだ。それで婆羅門が武士階級及び國王などの依頼を受けて作つたのが印度の法律の起りである。其の依頼を受けた婆羅門は一つの條件を持ち出した。「法律を作ることはお引受致しませう。併し折角お頼みを受

婆羅門の全盛時代

けて作つたものが行はれないやうでは何にもならぬ。自分達は天を祀る（天とは神のこと、印度は多神教であるから多くの神を祀るのである。）ことを職業としてゐる。若し自分達に法律を作らせて置いて、あなた方がこれを實行しないやうなことになるれば、自分達は構はないとしても、天がこれを罰するであらう。天の罰を恐ろしいと思ふなら自分達の法律を必ず守るといふ誓約をなさい」と要求した。武士の方でも、「それは尤もなことである。作られた法律は必ず守ります」と約束して、婆羅門の幾人かの學者に頼んで法律を作らせた。その時に婆羅門が今までは第一刹帝利、第二婆羅門であつたのを婆羅門第一、刹帝利第二と順序を變へてしまつた。婆羅門は俗人と異つて天を祀る者であるから之を先づ第一に尊敬しなければ、國の泰平は望めない。第二が刹帝利で、刹帝利の中から王も出るのであるが、王と雖も婆羅門に出逢つたら、王様の方から敬禮をしなければならぬ。斯ういふ習慣が紀元前七世紀頃から既に出来てゐたやうである。されば釋尊御出現の頃には身分の上から

いふと婆羅門第一、刹帝利第二、毘舍第三、首陀第四で、それより以外に旃陀羅があつた譯である。

### 一〇、宗教の發達

現世の利益

一體當時の宗教はどういふものであつたかといふと、先づ一番最初に發達したものは現世の福を祈ることを主にする宗教である。これは印度ばかりでなく、ギリシヤでも、ローマでも、或は支那の古代の事を調べて見ても皆同じことである。人間は最初から後の世、前の世を考へる力はないから、先づ此の世で安全に生きることが望むのである。併し前に申した如く、此の世の事は人間の思ふやうにならぬ。思ひ掛けない時に雨が降つたり、風が吹いたりする。尤も人間が何も努力しないで、犬や猫と同じやうな生活してゐた時には、人間以上の力を考へる餘裕もなかつたで

あらう。ところが少し人間に智慧がついて来ると、以前は裸體で洞穴の中は住んでゐたものが、其の穴から出て家を建て、木の皮を剥いで着物を作つて着るやうになる。また河や海に行當ると、之を横切ることが出来ないで引つ返して来たものが、段々工夫して舟を造るやうになる。さうして幾らか人間生活が向上して来ると、そこで初めて自分達人間の力では到底及ばぬ何かの力があるといふことに気がつく。水を見て唯だ引返した時には何も深くは考へなかつたが、舟を作つてその舟が大波に遭つて引つくり返ると、『自分達は斯んなに苦心して舟を作つたけれども、これを引つくり返すものがあるのを以て見ると、どこかに人間より上のものがあるに違ひない』と気が付く。『折角家を拵へたけれども、大風のために吹き飛ばされてしまつた。これは風を吹かす者がどこかにゐるのであらう』と、人間生活が稍々進んで来た時に初めて人間以上の力を認めるやうになる。斯くして雨を降らし、風を吹かし、波を起し、その他色々人間力の及ばないことをするものが幾つもあると

いふことを考へ、この自然の大きな力を人格的に認めて、それ等を天と名づけたので、これが所謂印度の諸天である。

此の諸天に對して祈りを捧げる。どういふことを祈るかといへば穀物がよく出来るやうに、大雨が降らぬやうに、大風が吹かぬやうに、海が荒れぬやうに、即ち現世安穩——この世を安穩にして戴きたいといふことを祈る。これが最初の宗教である。婆羅門は大勢の者から頼まれて天を祀つて現世の幸福を祈つたのである。

ところが天といふやうな、人間以上のものを考へると同時に、誰の頭にも浮んで来るのは天地創造の問題である。此の山や河はどうして出来たか、人間はどうして出来たか、草や木はどうして出来たかといふ疑問は、誰にも起るものである。そこで諸天の中で一番上の天を見付けて、此の天が人間でも、山でも河でも凡ての物を造つたのであると解釋する。たとへ多神教であつても、其の多くの神を同じものと思はれない。その神の中にどれか一つ特に勝れた神があつて、この神が凡ての

きの元であらうといふ解釋が自然に出来る。それで婆羅門教でも、日本で帝釋天といつて居るのを特に有力な天と考へ、此の天の力によつて凡ての物が形を成したのだといふ解釋を下したのである。現在印度では佛教を信じてゐる者は極く少数で、大部分は婆羅門とマホメツト教を信じて居るが、婆羅門教の寺へ行くと、此の帝釋天を祀つて居る。

斯の如くして昔から天地創造の神を認め、その外にも色々な神を認めて福を祈るのである。併しながら神に福を祈るといふ思想がさういつまでも續くものではな<sup>い</sup>。現在日本でも割合に暢氣な人は現世の幸福を祈る程度で満足してゐるけれども、少し考へが進むと、現世の幸福を祈るといふ宗教では満足が出来なくなる。それには二つの理由がある。其の一つには眼前の事實がこれを否定する。幸福を祈つても祈つても不仕合な者は數知れずゐる。祈らないでも可なり平穩な境遇にゐる者もある。この事實が祈つても駄目だといふことを證據立てる譯である。今一つに

は、人間が人間以上のものに對して勝手な注文をするのは不都合なことだといふ、即ち倫理的な思想も起つて来る。神様（印度では天）は人間より以上のものである。人間以上の神に吾々人間が勝手な注文をするのは失敬なことである。そんなことを頼んでも、到底聽入れては呉れまいといふことも考へられる。又人間の注文は一致しないものであるといふことも考へられる。雨の降ることを望む者もあり、降らぬことを望む者もある。米の高くなることを望む者もあり、米の安くなるのを望む者もあるから、神様は雨を降らしてよいのか、降らさぬのがよいのか、米を高くしてよいのか、安くしてよいのか分らぬわけである。されば實際の事を見ても、また理論的に考へても、現世の祈りをかけるのは如何にも愚かなことであるといふ點に氣がつく筈である。

そこで初めて人間の幸とか不幸とかいふものは人間に對する賞罰だといふ思想が生れて来る。善い事をした者には其の賞として幸福が與へられ、心得の悪い者には



其の罰として不幸が與へられるのだといふ思想が起つて來るのである。釋尊御出現前の婆羅門教でも主として此の事を説くやうになつた。皆其の行ひを慎しまなければならぬ。善い行ひをすればその賞として幸福が與へられる。行ひが悪ければ其の罰として禍が與へられる。この賞罰を司るのが帝釋天である。帝釋天を天地を創造した神と認めるだけでなく、之を裁判長の如く考へ、天上から人間共を見下して、善い者には幸福を與へ、悪い者には禍を與へるといふ解釋を下すやうになつた。支那でも孔子の出られる以前の詩經や、書經を讀んで見ると矢張り同じ思想で、天は善に福を與へ、惡に禍を與へるのであるから、人々は毎日の行ひを慎しむことによつて幸福の與へられるのを待つより外はないと説いてある。これは唯だ福を祈るといふ程度の宗教に較べれば餘程進んだもので、日本でも現在世間で心懸けが善いといはれる人は大體この程度ではないかと思はれる。毎日の行ひを慎しんでゐれば決して悪いことはない。悪いことをした者が一時成功しても、後には結局

不幸になるといふ考へから行ひを慎しむのを、世間では心懸けの善い人といつて居る。『正直の頭に神宿る』とか、『天道人を殺さず』とかいふ諺が昔からある。善いことをしてゐれば、今直ぐ福が來ないとしても、應ては必ず來る。悪いことをしてゐれば今直ぐ禍が來ないでも、長い間には必ず禍が來るといふのである。此の『天道人を殺さず』といふのは徳川時代には盛んに用ひられた言葉である。ところが有名な平賀源内即ち風來山人は、非常なひねくれ者で、俺は少しも悪いことをしないのに貧乏で、幸福などは來はしない。『天道人殺し』だと惡口を吐いてゐる。印度の昔に戻つて考へると、天といつても殆んど、人間と同じやうに思つて居たものだから、帝釋天が如何に偉くとも一人で凡ての人間を監視することは出來ないであらうといふのでその下に屬する四天王があつて、これが帝釋天を輔けて人間の行ひをよく觀察し、之を帝釋天に報告して、之に基いて帝釋天が善い者には幸福を與へ、悪い者には禍を與へるといふやうに考へたのである。尙ほ面白いことには、

此の四天王も毎日歩いてゐるのでなく、一月の中に日を決めて見廻るといふことである。そこで四天王の見廻る時に悪いことをしてゐると直ぐ報告されるから氣をつけようといふのであるが、四天王の見廻る日は、毎月一日と十五日と二十八日となつてゐる。この傳説が支那を経て日本にも入つて來た。私共の子供の時分には、お店などでも一日と十五日と二十八日には、どんな吝な主人でも店の者に休暇を與へるとか、御馳走を食べさせるとかいふ習はしがあつた。是れは『あの主人は中々感心な奴だ』と帝釋天に認められたいからで、所謂天の賞罰といふ考へから來た習慣である。

斯ういふやうにして婆羅門教では各自の行ひを慎しむことを教へたのであるが、しかし唯だ善い行ひをせよと云つても、そのみではあまり淺薄であるから、其の教への基礎として、大體人間とは斯の如きもの、天地とは斯の如きものである。人間が間違つた行ひをすれば人間存在の原理に背くといふやうな一種の哲學說、倫理

說といふやうなものが婆羅門の間に發達して來た。これが佛教の興る以前の婆羅門の教義である。

ところが、何れの國でも同じやうに、人間の文化が相當に進むと生活が一體に華やかになり、それが聽て宗教界にまで自然に影響して來る。例へば建物にしても、初めは質素な物で濟んで居たのが、段々と飾りを付けた立派な建物になる。又帝釋其の他の諸天の像を造るにしても、最初は石に刻むとか木に刻むとかいふだけであつたが、後には金箔を塗つて立派にするといふやうに凡てが華やかになり、宗教家の生活も世間が華やかになるに従つて自ら華やかにならざるを得ない。さうなると其の立派な殿堂を維持するには多くの金が必要。婆羅門も最初は非常に質素で、唯々生きてさへゐられれば宜いといふ程度の生活をしてゐたが、段々と華やかな生活をやるやうになると、金の必要が感じられる。随つて世の勢力あり、地位あり、財産のある者と結び付かなければならぬことになつた。何れの國に於ても宗教の墮落

はそこに原因がある。印度もその通りで、佛教以前から既にその弊害があつたのである。商人や地主の中で殊に豪奢な生活をしてゐた者を長者と申すので、これは經典の中にも度々出て居る。長者は階級からいふと三番目であるが、何にしろ金があるから其の富の力で利帝利、即ち武士階級とも親しく交はるやうになつて、時には長者の中から大臣に取立てられた例もある。それで長者は富の力を以て武士や國王をも動かすといふ状態であつた。婆羅門は此の長者若しくは利帝利即ち武士や王者などと結びついて、富の力とか政治的の勢力とかを利用して、其の一門の繁昌を圖り、殿堂をも立派にするといふやうになつた。

又釋尊御出現の頃になると、現在の日本でいふ労働争議のやうなものも大分起つて來た。地主と小作人との争ひ、或は雇主と使用人との間の争ひも、次第に生活が華やかになり、利害の打算が盛んになるに隨つて自然と起つたのである。併し現在と異つて、首陀とか、旃陀羅とかいふ者は教育がないから、文字の讀める者も碌に

無いといふ状態であるから、争ひを起しても、上層階級の武士なり地主なりがこれを壓迫して餘り大きな問題にはしなかつたやうである。斯ういふ場合に雇主が善い人で、物が分つてゐれば宜いのであるが、武士にも地主にも随分横暴な所謂分らず屋がゐるので、下層の者は立つ瀬がない。そこで彼等も堪りかねて婆羅門の所へ來て、婆羅門は天を祭ることを職業としてゐるのだから、『どうぞ自分達を憐れんで、斯んなに苦しませずに立つて行けるやうに天に祈つて下さい』といふことを頼んだ。婆羅門も彼等の苦しい事情は充分知り盡してゐるけれども、一文にもならない貧乏人を相手にしても仕方がない。そこで何といふかといふと、『お前達は前世で悪い行ひをした者である。人間の生命は此の世だけのものではない。此の世で苦しむのは前の世の罪の報ひだから、この世で出来るだけ苦しむが宜い。さうすれば次の世ではモット樂な境界に生れるであらう』と説いたのである。斯んな場合に前の世といふ説は非常に重寶である。

三世因果の  
説

一體前の世とか後の世とかいふ思想はどうして發達したかといふと、前に申した賞罰の思想から自然に發達して來るのである。何故かといふと善いことをすれば天が福を與へ、悪いことをすれば天が禍を與へるといふことが現實に少しも狂はず現はれれば問題はないけれども、社會が複雑になるとさうは行かぬ。正直者がいつ迄も苦しんで居たり、不心得者でも樂な生活をして居るものもあつて、賞罰も當てにならぬといふことを少し頭のある人は考へるやうになる。幾ら正直にしてゐても樂になれないのなら正直にして居るだけ馬鹿らしい。その場合に『人間の命はこの世だけのものではないぞ』といふことを考へると、これが非常な力となる。僅か五十年か六十年のこの世だけで勘定を合せようとするのが間違ひである。人間の生命は前世から續き、又來世にも續くものである。現世に於て幸福が來ないからとて失望することは無い。必ず後で其の報が來る。又現世に於て惡事を働いて罰せられないでも、來世で必ず其の報が來るから決して安心は出來ない。斯ういふ説が認められ

ると、そこで初めて安心して善を勵むやうになる。されば賞罰の思想が段々發展して來れば、どうしても過去、現在、未來の三世を一貫した生命を考へなければならぬことになるのである。無論これは宗教として極めて大切なことで、佛教に於ても勿論此の三世の生命については説いてあるのである。

三世の生命といふものを眞面目に考へれば、現在の此の一日がウツカリ送れるものではない。此の考へ方が間違ふと未來説といふものは人間に禍する。これは今佛教を信する人に取つても重大な問題であらうと思ふ。人間は幾ら長く生きても百までは生きられないが、過去は非常に長く未來も亦非常に長い。而も現在の生命が未來に續くものとすれば、この世の今日の一日を無駄に出來る筈がない。現在を善くしないで未來が善くなる筈がないからである。

此の生空しく過ぎて後に悔ゆるも及ぶこと無し。  
と涅槃經にいつてあるのは、誰も能く考へて見なければならぬ事である。現在怠

けてゐて、後の世に於て幸福にならうと思つても、それは因果の道理に照して出来ない相談である。永遠の生命だと思へば尙ほ更、永遠に亘つて影響を及ぼすべき今日一日の行ひを正しくするやうに勵まねばならぬ筈である。

ところが凡夫の習ひで、怠け癖がついてゐるから「ナニ、先が長いだから悠つくりでよい」といふ心持が起り勝ちである。私なども人には色々と理窟を云ふけれども中々實行が出来ない。私の學生時代にケールといふ先生が西洋哲學の講義をしてゐて、卒業論文を書いて出した時に可なり良い點をつけて呉れた。そこで私は早速先生の所へお禮に行つて、「大變良い點をつけて戴いて有難うございました。私の論文など實に詰らないものだったのに、あんな良い點をつけて下さつては却つてお恥しいことです」といつた。さうしたら「イヤどうして中々立派なものだよ」と云つて呉れるものと期待してゐたところが、「全くその通りだ、洵に下らぬものだった」といふ實に意外な返事であつた。

『それではどうしてあんな良い點をつけて呉れたのですか』といふと、『どうせ誰のも似たやうなものだから良い點をつけて置いた』と、先生から斯う云はれたので、私は酷く失望してゐると、「さう失望するには及ばない。君はまだ二十幾つ、三十にはならぬ。將來があるのだから、これから大に勉強したら宜いだらう。カントは五十七歳の時に初めて自分の獨特の學説を發表して、それ以來世界を動かすやうな學者になつたのだ。君も今から大に勉強して、五十過ぎる頃にはカントのやうに立派な學説を發表したら宜いだらう」と慰めて呉れた。この言葉に力を得て、早速カントの話を友人達に吹聴して歩いた。「カントは五十七から始めたんだ。自分達はまだ若いんだから、少しは遊んで居ても宜いだらう」と、まるで見當違ひなことを云ひ出して、ブラ／＼して居たものだから、五十七を過ぎてても一向昔と變らない。カントは五十七からだなど、云つて怠けて居たのが悪かつたと、此頃になつて熟々思つて居るが、人間はどうも先が長いと思ふと緊張した心持になりにくい。本當に永遠

婆羅門の苦行

の生命であると思へば思ふ程、永遠の基を作るその機會が今日の此の日であると考へて、今日の此の日を空しくしないやうに心掛ける必要がある。——過去、現在、未來の關係を斯ういふ風に考へなければならぬのであるが、婆羅門にはそれ程親切に教へて呉れるものが殆んどなく、帝王と生れるのは前の世で善いことをした報ひである、貧乏人に生れるのは前の世で悪いことをした報ひである。現在の苦しみを懃へるよりも其の苦しみを我慢するが宜い。我慢すれば後の世に於ては人間界を離れて天上界に生れることが出来るといふことを主として教へたのであつた。

又婆羅門の中には仙人と稱する者があつた。經典の中にも迦毘羅仙人とか、阿私陀仙人とか、度々仙人のことが出て居るが、仙人といふものは特別に世間を離れ、山奥で淨らかな生活をしてゐた者である。また一方には婆羅門の中に色々難行苦行を積む習はしが發達して來た。例へば斷食をするとか、或は不眠の行とか、水の中に入つて不動の形を執つてゐるとか、掌に香を炷いて熱いのを我慢するといふや

うな苦行が發達して來た。これは即ち現世と來世との關係を考へ、現世に於て苦しみを多くすれば來世に於て樂が出来るといふので人間界を離れて天上界に生れることを理想として難行苦行が隨分行はれた。現在でも印度にはその習慣が残つてゐて、斷食をするとか、夜眠らないで往來に立つて苦行をしてゐる者などもある。

併しながら釋尊は後に至つて、難行苦行は悪いことではない、無論人間が苦しい思ひをして自分を鍛鍊するのはよいけれども、來世の報ひを望むために難行をするのでは意味がない。これは根本の心掛けが間違つてゐる。今ここで苦んでおけば後で樂になれるといふのでは、全く取引きでもするやうな考へ方である。今他人に物をやつて置けば、後で代償が來るといふのと同じ考へ方である。それでは本當の宗教ではないと批判を加へて居られるが、洵に御尤もなことである。

斯ういふ状態で、婆羅門教は可なり勢力を持つてゐたけれども、印度人全體は無論救はれなかつたのである。山の中に入つて淨らかな生活をしてゐる仙人には相當

な學者があつても、その學者は生きた世の中を知らないから、生きた世の中に大切な教へは説かないし、一方の世間と交つてゐる者は金持や貴族と結びついて御機嫌を取つてばかりゐるから、貧しい者を救はうといふ念はなく、名譽心や、利慾心に驅られて一般の人間を憐むことの出来ない状態であつた。正しく何人か本當の教へを説いて、普く一切衆生を救ふ人が出なければならぬ時期であつた。この時代の要求に應じて釋尊が出て來られたのである。どうしても釋尊のやうな人が出られずならぬ時であつたのである。如何に偉大な人でもその時代の要求に應じて出なければ、教へを説いて世の中に大なる影響を及ぼすことは出来ない。丁度その時に釋尊のやうな方が御出現になつた譯である。

釋尊の教へは非常に尊いものであるが、これが又久しく世に行れて居ると種々の弊害が生じて來る。佛敎も末に至つては昔の婆羅門と同じやうな弊害が生じて來たといふことは、佛敎を信する者の大に注意しなければならぬことである。凡そ宗敎

が悪くなるには二つの途がある。一つには血の氣を失つたカラ／＼の乾物のやうな宗敎になつてしまふ。むづかしい理窟ばかり捏ねて、生きた人間がどんなに苦んでゐようと、どんな問題を持つて居ても振り向かうともしない。一方には腐つて行くものもある。腐るといふのは世間に迎合することばかり主として、斯う云つたなら皆の氣に入るだらう、斯う云つたら受けが好いであらうと、世間の人の意を迎へることのみを考へ、世間を導くべき教へが世間に導かれて行くのである。

『今や非常時なり。』ウム、さうだ非常時だ、確かりやらう。『三年後はオリンピックだ』ウム、さうだオリンピックだ』といふやうに、何でも宗敎家が世間に引摺られてゐる。教へによつて世間を導くのではなく、世間に結びついて自分の宗旨の繁昌のみを圖つて居る。これが腐つた宗敎、世間に迎合する宗敎である。大慈悲心を以て一切の人を導かうといふ教へでなければ眞に教へたる價値はない。婆羅門が斯くの如く乾からびた宗敎や、腐つた宗敎となつた時に釋尊が御出現になつたのである。

が、若し釋尊の教への末が血の氣が失せてカラ／＼なものになつたり、或は腐りは  
てた時は誰かまた釋尊の御精神に戻つて、本當の教へを世に弘めなければならぬ譯  
であらう。これは現在自分達の問題で、お互ひが心を平らかにして工夫し、研究し  
なければならぬことであらうと思ふ。

大體釋尊御出現當時の事情は斯の如きもので、その中に於て釋尊が大慈悲の心を  
以て一切の人に教へを説かれることとなり、その教への上に大乘と小乗、方便の教  
へと眞實の教へがあつた譯である。

### 一一、昔の印度の教育

次に佛教の中に於て小乗と大乘、方便の教へと眞實の教へといふやうに種々の區  
別があるので、それ等の點について述べたいと思ふが、それに先立つて、當時の印

度の人一般に如何なる程度の教育を受けてゐたかといふことについて少しくいつ  
て置きたい。現在のやうに教育が普及してゐれば、可なり難かしいことを聽いても  
理解が出来けれども、昔は我が國でもさうであつたが、殊に印度あたりでは教育  
が普及せず、大多數の者は文字も書けないといふ状態であつた。さういふ人々を相  
手に教へを説くことは随分骨の折れたことであらうと察せられる。

大體印度に於て釋尊御在世の頃までの普通の教育はどんな状態であつたかといふ  
と、普通教育としては五つの學科を教へたのである。勿論この五つの學科は、現在  
の日本の普通教育のやうに、殆んど凡ての人に教へられ、津々浦々まで普及したも  
のではなかつたが、釋尊は勿論、相當な地位があつて、生活に餘裕のある者の子は  
此の五つを教へられたもので、これを五明と稱するのである。明とは心の中を明か  
にする、即ち智慧分別を興へるといふ意味である。

五明の名を擧げると、内明、聲明、因明、醫方明、工巧明である。内明といふ

### 所謂五明



のは倫理道德で、即ち心の中を整へる爲の學科である。婆羅門の全盛時代に於ては其の教義を此の内明といふ學科の中で教へたのであるが、佛教が盛んになつてからは、無論その教理が内明として教へられた。例へば儒教の教理なども之と類を同じうするものといふべきである。

次に聲明といふのは我が國の佛教の中にもその一部分が傳はつてゐる。今日の佛教でいふ聲明はお經の讀み方とか、論議などをやることであるが、印度の昔の聲明といふのはモット意味が廣い。吾々の子供の時代には、本を讀むことと文字を書くことが教育の中では一番大事だといはれてゐた。所謂『讀み書き』であるが、此の『讀み書き』が聲明の一部分であつた。それから發音法と音樂——印度人は非常に音樂を重んじたやうであるが、この四つを含んだものが即ち聲明である。此の聲明の一部分だけが佛教と共に我國に傳はつて現在でも叡山とか、高野山などでやつてゐるが、これは印度の聲明の一部分に過ぎないのである。

眼を過信する弊

私は平生痛切に感じてゐることであるが、日本でも、支那でも餘りに眼ばかりを重んじて過ぎて、耳を輕んじて來た。何でも文字に書かれて居るのを見ると本物だと思ふ、本に書いてあると如何にも眞理らしく感ずる習はしであるが、本の中にも嘘を書いてあるのが澤山ある。新聞などは随分嘘を書いてゐる。それなのに耳で聞いたことは餘り感心しないで、字にかいてあるのを見ると皆本當だと思ふ悪い癖がある。秦の始皇が書物を焚いた筈だと熟々感ずる。勿論眼も大事であるけれども、人間は言葉を以てお互ひに意思を通じ合はなければ生きて居られないのであるから、耳をモウ少し大切にするやうに改めたいと思ふ。

それから正しい發音をすることは我國では餘り重んじられないけれども、ギリシヤやローマでは随分大切なことになつて居た。印度でも昔は大切な事になつて居たやうである。我が國では發音は殆んどお構ひなく、唯だ文字が讀めれば宜いといふことになつてゐるが、これは將來に於ては大に氣をつけなければならぬ。尤も何れ

の國でも地方々々によつて訛りはあるけれども、日本はあまりに訛りがひど過ぎる。差合ひがあるかも知れないが、東北地方の人は「シ」と「ス」と混同して居る。又薩摩の人などは「ラ、リ、ル、レ、ロ、」が云へない。薩摩の人のいふのを聞くと、「私は薩摩の者で愛います」といふ。發音を蔑ろにした結果として一番困るのは、自分の國の名が分らなくなつて居る。斯んな恥かしいことはない。フランスの人に「あなたの國は何といふのか」と訊くと、「フランス」といふ。ドイツの人に「あなたもドイツ人ですか」と云ふ。ところが日本人は或る人は「ニホン」だといふし、或る人は「ニッポン」だといふ。自分の國の名が分らぬといふ者は世界のどこにもない。實に恥かしいことで、全く眼ばかりで教育した弊害がそこに及んだのである。文字で書けば「日本」と書くから同じであるけれども、自分の國の名が二つあるのはをかしい。よく調べて見るとこれには色々の事情があつて、京都では「ニホン」といひ、中國や四國、九州地方では「ニッポン」といつたらしい。現在ではど

れが正しいのか分らない。

私はどうも氣になるので文部省へ行つて「一體これからの子供にはニホンと教へたらよいか、ニッポンと教へたらよいか」と尋ねたところが、普通學務局などでは「ニッポンが正しい」といふ返答であつた。それでは小學校兒童は全部「ニッポン」といつてゐるかといふと、東京では相變らず「ニホン橋へ行く」と云つてゐるし、大阪では「ニッポン橋」といふ。常盤橋の向ふにある銀行は何んといふ銀行ですかと尋ねると、大概の人は「日本銀行です」と答へる。其の銀行の總裁に「あなたの銀行は何んですか」と問ふと、「日本銀行です」といふ。ところが紙幣にはちやんと「ニッポン銀行」と書いてある。一體どつちが本當なのか分らない。これは文字を重んじ、眼を重んじ過ぎた弊である。今後の普通教育に於てはこゝに意を用ひなければならぬと思ふ。唯だ本を読めば俐巧になるといふ一種の偏見が出来てゐるが、本を読んでも馬鹿は馬鹿である。知識は眼からも入るけれども、耳からも入

るのであるから、將來はモウ少し發音を正しくすることにも力を用ひなければならぬと思はれる。さういふ點からいふと昔の印度は中々偉い。三千年の昔既に聲明に於て讀み書きと、正しい發音及び音楽を教へてゐる。

次に因明といふのは論理學（ロジック）と、文法（グランマー）を教へるものであつて、印度では昔から此等の學科を相當に重んじたやうである。次に醫方明といふのは、醫術を教へたといふことではなく、現在の所謂衛生生理——身體を健康に保つことと、それから人間の身體にはどんな物が藥になるかといふ所藥物學の大體を教へ、又藥物學に縁故を持つ所の生物學の初歩のやうな事をも教へたやうである。それから工巧明といふのは字を書くことと、繪を描くこと、物を計算すること即ち算術を教へたものである。

これが印度の二千數百年前に於ける高等普通教育であるが、よく考へて見ると是れだけの事が出来れば大抵の事には間に合ふ。倫理道德を辨へて居て、一通り讀み

書きが出来、正しい發音が出来て、音樂も相當に出来る。文法も心得て居て論理が正しく、衛生生理の心得があつて藥の事にも明るく、文字が書いて算盤が出来るならば、先づ一通りの用は足りる譯である。これ以上は百姓をする者には農業上の知識を與へ、工業をする者には工業上の知識を與へるとか、それ／＼専門に分れる譯であるが、普通教育としては大體以上のことを教へ、尙ほ刹帝利即ち武士の家では此より以外に武技を習はせた。釋尊も武藝には非常に熟達して居られたやうである。釋尊も此等の教育を一通りお受けになつたが、相當の家の子であれば、人間として世の中に立つのに困らぬ爲に是れだけの教育は與へられたのである。二千數百年、殆んど三千年に近い昔に於て、既に人間を作るといふことに於ては相當に苦心を拂つてゐたことが分る。

釋尊は非常に天才的な方であつたと見えて、凡ての學科に秀でて居られたし、殊に武藝に於ては非常に熟達して居られたといふことが傳へられて居る。後に佛教の

敵となつた、提婆達多と武藝の競技をなされた時、釋尊の方が非常に優秀な成績を挙げられたので、その時から提婆が口惜しがつて居たといふことが傳へられて居る。此等の事を私は非常に大切な事だと思ふ。何も習はない者が、『ナニあんなことは詰らぬ』といつて見たところで、それは負け惜しみとしか考へられないが、釋尊は世の中の事を一通り修めて後に、『世間的の事には深い意味がないぞ』と言はれるのだから、何人と雖も承服するわけである。吾々が金を持ちもしないで、『金持になつたつて詰らぬ』とか、總理大臣になれもしない者が、『總理大臣になつたつて詰らぬ』といつたところで、單なる負け惜しみとしか聞えない。釋尊は國王の子と生れて、出来るだけの完全な教養を受けられて、世間的に誰にも負けられないだけの力を具へられて後に、『世間的の生活だけでは無意味であるぞ』と仰しやるのだから、そこで初めてその言葉に大きな力がある。さういふ意味に於て、釋尊が國王の子とお生れになつたことには、後世の吾々から考へれば非常に深い意味がある。

順境と逆境

話が横道へ入るかも知れないが、人間は苦勞をすれば世の中の事がよく分るから、苦勞する方がよいに相違ないけれども、併し多くの人は苦勞をすれば其の性質が僻むものである。甚だ恥かしい話であるけれども、現に私などは家が貧しくなつたために、中學の四年頃から學校へ通ふことが出来なくなつて、父親の懇意な人に縋つて、其等の人々の力で漸く學生生活を終つたので、随分苦勞はしてゐる方である。さて苦勞をして後自分で振り返つて見ると、どうも兎角僻んで不可ない。自分が多く苦んでゐるから、世の中の樂な人のする事が馬鹿々々しく見える。どつちかといふと人の缺點ばかり見える。實は暢び暢びした生活をしないで、青年時代を逆境に過して來た報が來てゐるのではないかと熟々悲しく思つてゐる。さて世に立つて見れば、人の悪い所を見るよりは寧ろ人の美點を見出して、その長所を伸ばすやうに力を添へてやるのが世の中を善くするのに大事なことに相違ない。自分もモツト人の良い所が見えたら、まだく明るい氣分で世を送れるだらうと常に感ずる。

それで理想をいへば、あまり苦しまない境遇にゐながら、而も其の樂な境遇に馴れないで、何處までも人生の問題を深入りして考へられることである。釋尊は國王の子と生れ、出来るだけ完全な教育を受けて、人生に於て自分より幸福なものはないといふ位の境遇に居られて、而も斯んなことをしてゐては無意味だと思つて、深入りして人生の意義を考へられたのであるから、これこそ本當に理想的な御修行であつたと思はれる。以上で大體當時の教育状態について申述べた譯である。

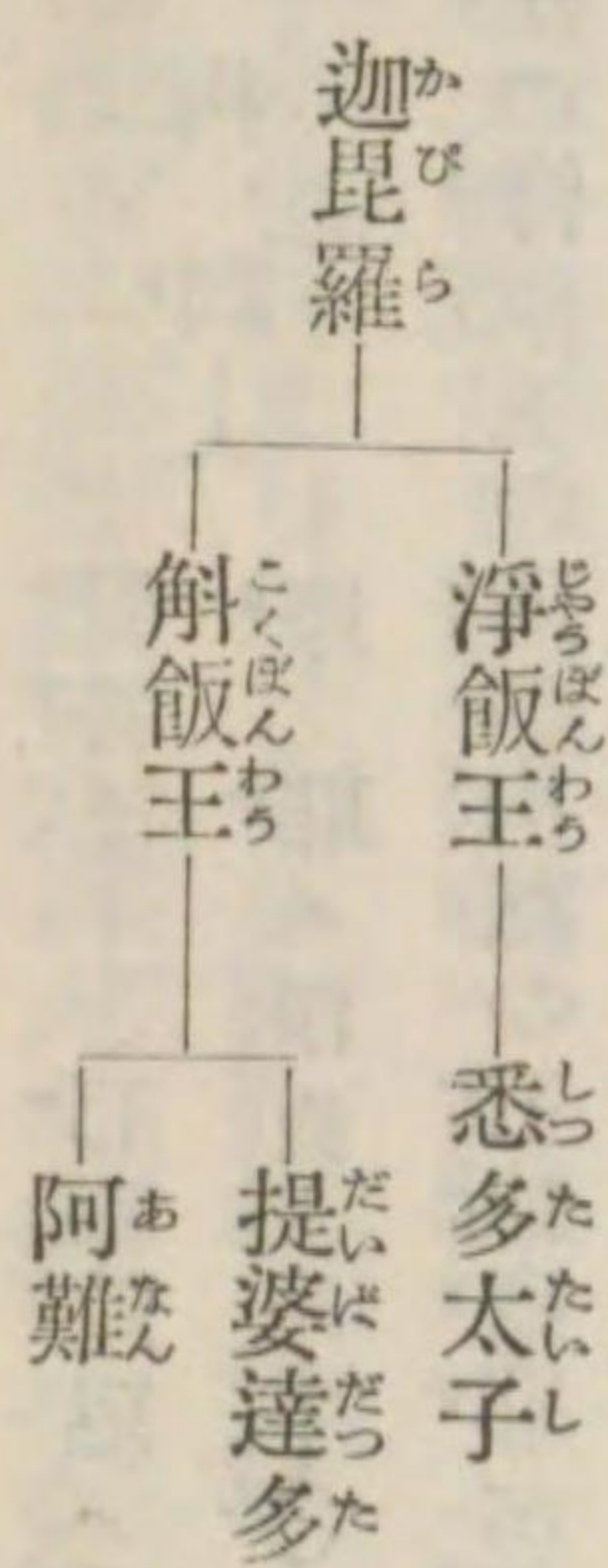
### 一一一、釋迦牟尼といふ名

釋尊と其の國

釋尊は國王の子と生れて榮華の生活を送られたと申したが、然らばその榮華の程度はどうであつたかといふと、無論印度としては最上の生活であつたに相違ないが、後世の吾々が考へる程のものではなかつたやうである。國といつても迦毘羅と

いふ釋尊の國は方五百里と記録にあり、その里數も日本より狭いのであるから、さう大きな國ではない。私はその方の知識は餘り持つてゐないが、さういふ事に詳しい人に調べて貰つたところが、方五百里の國王といへば大體長野縣か新潟縣の半分位と思へば間違ひないといふことであつた。されば國王といつてもその勢力の及ぶ範圍は大體日本の小さい縣の知事位のものであつたと思へばよいのである。併し印度に於ては小さい國が多かつたのであるから、その中にあつては非常に裕かな國であつたのである。

釋尊の教理を辨へる上に於ては餘り重要な事でないかも知れないが、釋尊の周圍の關係について少しく申すと、



拘利 — 覺善王 — 耶輸陀羅 (悉多太子の夫人)  
 摩耶 (淨飯王の夫人)

迦毘羅の淨飯王の所へ拘利の王妹摩耶が嫁ぎ、その間に生れたのが悉多太子である。さうして摩耶の兄たる善覺王の姫で、摩耶からいへば姪に當る耶輸陀羅と悉多太子が結婚されて、その間に生れたのが羅睺羅で、釋尊と耶輸陀羅とは從兄妹同志の關係である。さういふ譯で迦毘羅と拘利とは非常に縁の深い國である。

こゝに不思議なことは、釋尊の從兄弟に當る人に提婆と阿難が出てゐることである。阿難は釋尊の最も忠實なお弟子であつたに拘はらず、阿難の兄たる提婆は生涯佛敵となつて佛敎の弘まることを妨げてゐたといふ。又釋尊のお子は羅睺羅一人ではなく、善星といふお子もあつたが、これは親の敎へに背いて罪を多く犯したといふことが傳へられて居る。一體世の中には兩親とも立派な人であるにも拘らず、その子が不良で兩親がいつも苦勞して居るといふ例も隨分ある。私なども知合ひの人か

提婆と阿難の兄弟

ら、『自分は今まで一度も不心得な事をした憶えはない。妻もさう間違つたことはしてゐない。それなのに子供が大變不心得者で、世間に對してまことに恥かしい。どうすれば矯るであらうか』と相談を受けることもある。阿難と提婆の場合も同じことで、同じ親の子でありながら一人は佛の最も忠實な弟子であり、一人は佛の敵になつてゐるとは、洵に不思議なことである。更に一つの例を挙げれば、頻婆娑羅王とその妃の韋提希夫人は實に熱心な佛敎信者であつたが、その子の阿闍世は父親を殺し、母親を擁護して王の位を奪ひ、提婆の信者になつて佛敎に迫害を加へるとか、有らん限りの悪事を働いたのである。韋提希夫人が幽閉されてゐる所へ釋尊が阿難を連れて行かれて共に慰められた時、韋提希夫人が一番先に持出した問題は、『私達は夫婦共熱心に佛の敎へを信じてゐるのに、私達夫婦の間から阿闍世のやうな悪い子が生れました。又あなたは佛様で、一切の人を救はれる方でありながら、あなたの從弟に提婆といふ悪人が生れてゐるのは不思議でなりません。これは一體

どういふ譯でせうか。」といふことであつた。

これは韋提希夫人としては實に痛切な質問であつたと思はれる。自分達の事だけでなく、自分達が教へを受ける釋尊の從弟が佛教に迫害をしてゐることを眼の前に見せつけられては、善い事をして必ず善い報ひがあるかどうか怪しいといふ疑ひを懐くのも無理はない。これは實に大事な問題である。その大事な問題に對して釋尊は何も返事をなさらないで、「左様な人生の煩はしい事を思ひ捨て、専ら佛の道を學んで、自分も佛の淨土に生れるやうな者になれ」と答へられ、其の修行の仕方を懇ろに説かれた。是れが即ち觀無量壽經である。考へやうによつては、これは隨分無責任な話である。斯んな大事な問題を持つて來られたのに、釋尊は直接之に満足するやうな返事をお與へにならず、「人生の事にくよくよするな、佛の教へを守ればよい。人生の煩ひに捉はれるな。修業をせよ」と全然見當の異つたことを云つて居られる。ところが韋提希夫人は其の教へにスツカリ感激し、何も彼も忘れて非常な歡

複雑なる人生

喜を感じたといふことである。何だか見當のつかぬ、不思議な事のやうであるが、この釋尊の態度をよく考へて見ると、そこに深い意味がある。何故ならば人生の事は簡單でない。また人間の生命はこの世の三十年か五十年だけのものではない。前世から未來に亘つての非常に長い生命である。この長い生命の中に於て吾々はどれ程多くの事をして居たか分らぬ。また現在の世だけにしても、甚だ複雑なものであつて、たとへ親子といつても、親と子と一緒にゐる時間よりは、他人と一緒にゐる時間の方が多い。實に複雑極まる人生で、而も人々は皆此の世だけに限られぬ生命を持つてゐるのであるから、始終定規で測るやうに、因果の關係が直ちに現はれて來るものではない。人生は至て複雑であるから夫婦揃つて善人であつても、前の世からの何かの關係か、或は現在の世の何かの關係かで、そこに悪い子が生れることのあるのも已むを得ないことである。勿論誰でも出來るだけさういふことは避けたい。お互ひにそんな事がなければ結構であるが、場合によつ

てさういふ、理解の出来ないやうなことが現はれて来る。そこが人生である。人生は非常にむづかしいものである。凡ての問題を今こゝで解決しようと思つても出来ないことがある。親子兄弟夫婦の心が皆揃つてゐるに越したことはないけれども、それが望めない場合もある。何分にも複雑な世の中であるから、自分がどんなに誠實を盡しても、その誠實が通らぬ場合があるかも知れない。結局は自分の幸福は自分で作るより外はない。少し亂暴な言ひ方のやうだが、自分を救ふものは結局自分より外にない。出来るならば良き夫に、良き妻があり、良き先生を得、良き友達を得たいのだけれども、幾ら望んでも出来なかつたらどうするか。出来ないからといつて人間を廢める譯には行かない。結局自己を救ふのは自己であることを考へなければならぬ。

又たとへ善人と善人とが集つても、年齢が異ひ、境遇が異へば、顔が異ふと同じやうに人の性質や氣分が異ふので、兩方の意見が必ずしも一致するとは限らない。

夫婦共に善人であるけれども、氣の合はないこともある。或は親と子の間に意見の衝突もある。段々世の中が複雑になればなる程、此の傾向は著しくなる。釋尊が『そんな眼の前の事ばかり考へずに、先づ自分が確りした者になれ』と云はれた、此の精神を捉へることが大事である。自分を救ふものは結局自分である。誰でも斯ういふ問題を時々眞面目に考へて見る必要があらうと思ふ。吾々は自分が親切にしてやつたことを人が感じないからといつて短氣を起してはならない。正直にしてゐながら一家一族に悪い者が出て、世を呪ひ人を怨むには及ばない。社會が非常に複雑であるといふことを考へれば、釋尊が斯ういふ問題に直接に返事をなさらないで、自分の心を立て直すやうに説かれたのは深い意味のあることであると思はれる。釋尊が自分の身の廻りの人を救はれなかつたことのあるのは不思議のやうであるが、そこが世の中である。社會は非常に複雑であるから急には行かないこともある。時に依つては教へて直ぐ効くこともあるし、容易に効き目のないこともあるに



違ひない。併し人間は皆な佛性を備へてゐるものであるから、悪人でも永久に悪人ではない。然るべき機会があれば正しい道に戻ることも出来るのであるから、決して短氣を起してはならぬ。

以上で大體釋尊が世の中に出られた當時の事情に就ての話を終つて、釋尊の五十年間に説かれたことの内容に入るとしやう。

釋尊は長い間難行苦行を積まれ、佛陀伽耶に於て人生の問題の最後の解決を得られ、所謂悟りを開いて後に世の中に出て教へを説かれた。佛陀伽耶の菩提樹の下の大きな石の上に坐つて靜かに考へて居るうちに、長い間の研究の結果が熟して來て、所謂成道となつたのであるが、その時の感想を釋尊は後に至つて言つてゐらつしやる。「あの時は當分あの石の上に坐つて凝つとしてゐたかつた。」とあるがこれは非常に面白いことである。長い間考へた結果が熟して來て、本當の心の悦びが見出せたのであるから、再びうるさい世に戻りたくないと思はれるのは、人情として尤

成道の時の感想

もなことである。考への間違つた者や、悪人や、馬鹿の多い世の中には戻りたくない。本當に心が明るくなり、淨らかにになり、深き悦びが感じられたのであるから、この儘いつ迄も凝つとしてゐたい。斯ういふ心持の起きたのは少しも無理ではない。吾々は凡夫であるから、そんなことは夢にも知らないけれども、時として本など讀んで見て、少し分りかけた時にはモウ世間の人を相手にするのが厭になる。斯んなことが分つたのだが、これを世間の人に話しても大概は分らないだらう。暫く此の儘で凝つとしてゐたいといふ心持は吾々でさへ起るのである。況して釋尊のやうに本當に人生の問題を究められた方は、再び世の中に出て悪人や、愚かな者を相手にするのは厭だといふ感じをお起しになつたのは尤もだと思はれる。

併しながら釋尊は左様に御自身に歡喜を感じられると同時に、世の中の實際の有様に就て更に深く考へられた。自分は長い間の難行苦行の結果として心が明るくなつたけれども、この悦びを感じ得る者は世間に殆んど誰もいないであらうと考へた

時、この世間の人を此の儘に捨て、置くに忍びなくなつた。自分一人としては此の儘一人で引つ込んで考へてゐたいけれども、一度世間の人の身の上を考へる時には、餘りに淺ましく、餘りに氣の毒な生活である。斯う思はれたので、一人でゐる悦びを捨て、再び煩はしい世の中に出て、さうして五十年の間怠らずに教へを説かれた。これが所謂大慈悲である。本當の大慈悲心がなくては出來ることでない。佛を修行する者に對して、大乘の修行をして、菩薩の行を積むには、佛の御心持を自分の心持としなければならぬと教へられるのは即ち此の點である。自分一人としては、寧ろうるさい世の中から遁れた方がよい。釋尊としては尙更さうであつたであらう。元來國王の子であるから、元の王宮へ歸つて生涯靜かに考へて暮せば、これ程樂なことはない。併し世の中の有様を見ては此の儘捨て、は置けないから、固より苦しいこと、骨の折れることは覺悟の上で、再び塵の多い世の中へ戻つて、教へを説くことに身心一切の力を打込まれたのである。

それ故に後世に至つて尊稱して釋迦牟尼佛と申上げるのである。釋迦といふのは此の佛に限つたことでなく、前にもいつた通り其の一族の名で、日本で源氏とか平氏とかいふのと同じであるが、後世に至つて更に『牟尼』といふ語を加へて、此の佛を釋迦牟尼佛と申すのである。釋迦とは『能仁』、牟尼とは『寂默』の意味で、釋迦牟尼を漢譯すれば『能仁寂默』である。大體この語によつて佛といふ者の境涯が能く盡されてゐる。

世の中に出て教へを説く人は能仁寂默でなければならぬ。能仁とは一切の人を憐れみ、一切の人を救ふ力を具へてゐること。寂默とは境遇の爲に何等の影響をも受けないこと。周圍にどんな事件が起つても、どんな變化があつても、その境遇、事情等の變化の爲に少しなりとも心を動かさず、少しなりとも其の影響を受けないことを謂ふのである。人を救ふ人が周圍の影響を受けるやうでは到底人は救へない。自分の根性がグラ／＼してゐて、人を救ふことは出來ない。人を救ふ人は、其の周

圍から影響を受けないだけの覺悟を持つてゐなければならぬ。教へを説く人が世間に影響されて、世間の流行ばかりを追つてゐては到底世間を教へることの出来るものではない。寂黙が最も必要である。周圍が如何に變らうとも、自分は自分として守るところがあり、悟るところがあれば決して周圍の影響を受けない。そこで初めて一切の人を教へ導くことが出来るのである。されば能仁とは世を救ふ働きのことであり、寂黙とは自ら守るところを謂ふのである。

天台大師の書かれた『法華文句』の中に此の『能仁寂黙』といふ譯語が出て居るが、その説明に、

寂黙故不住ニ生死一能仁故不住ニ涅槃一

とある。『寂黙』とは周圍の變化に動かされないことであるが、『生死』とは、世間の凡夫の生活をいふのである。悟つた人は人生の變化に捉はれないのである。無論人生の變化と無關係にはなれない。物を食べれば腹が張るし、食べなければ減る。

金があれば樂な暮しが出来ると、金がなければ貧しい生活をしなければならぬが、それに捉はれてはならぬのである。強ひて『金はない方がよい、貧乏の方が氣樂だ』などいふには及ばぬ。併しそれに捉はれて、金がなければ暮せないとか、大きい家でなければ暮せないとかいふやうでは駄目である。どこまでも人生の變化に捉はれない覺悟を持つことが大切である。人が折角親切に物を持つて來て呉れたのに、『そんな物は要らぬ』と突つ返すのは悪い。『有難う』と云つて貰ふのがよいのである。併し持つて來ないからといって、不愛想な奴だといつて怒る必要はない。

斯ういふやうに、生死に住せぬといふ覺悟がなければならぬが、更に貴いのは『涅槃に住せぬ』といふことである。『涅槃』とは悟つた境界のことをいふのであるが、悟つた自身と迷つた人との間に強いて區別をしないのを、涅槃に住せぬといふのである。自分は悟り切つて居ながら世間の俗人と一緒に住んで、大勢の者を教へ導く爲に力を盡す。此處が佛の最も貴いところである。『生死に住せず』また『涅槃

に住せず』でなければならぬ。即ち迷つた世の中の事に捉はれてもいけないが、悟つたといふことに捉はれて、自分は悟つたのであるから世間の者共とは別だと思ふのも宜しくない。世間の多くの人間が迷つて苦しんでゐるのを見ながらその儘にして置くのは、無慈悲の至といはなければならぬ。また自分が悟つたのは、一人の力で悟つたのでないといふことも考へなければならぬ。釋尊はそこに注意されたが、これは非常に大切なことである。

自分が悟る迄にはどれ程大勢の人に厄介をかけたか。第一親に厄介をかけた。又釋尊の如きは母が早く亡くなられたために、叔母の情で育てられた。或は大勢の臣下にも厄介をかけ、世間の人々の世話をも受けて、そのお蔭で悟つたのであるから、彼等は俗人だと突撥ねるやうな不人情なことは出来ない筈である。散々厄介をかけて置きながら、悟つた後には自分が一人で悟つたといふやうな顔をして、世間を全く相手にしないといふことは、人の道として出来ないことである。人間は一人

感恩の念

で生きては居られぬもので、有ゆる人の恩を受けてゐることに気が付いて見ると、少しでも自分が物を知つたならば、此の恩に報ゆるために其の知識を人に分け與へなければならぬ。何か悦びを感じたなら、その悦びをも皆に分ち與へることが當然である。それ故にどうしても一人で悟つて澄まして居ることは人の道として出来ぬ筈である。世間を離れた方が自分としては氣樂でよいが、併し悟る迄の間にどれ程大勢の力を借りて居るかといふことを考へれば、これに報ゐずにはゐられない。自分だけで世の中と離れ切つた生活をしやうと思はないで、世間の人をも凡夫の苦しい生活から救つてやらなければ受けた恩に對して濟まない。人間として人間らしい顔をして過すことも出来ない。さう云ふ風に考へると佛教を奉ずる者としては所謂菩薩の行を勵むといふことでなければならぬ。自分一人で悟つて、自分一人で涼しい顔をして世間の人を眼下に見下してゐては濟まない筈である。

そこで佛教の中に小乗と大乘の區別を立てることが必要になつて来る。併しながら

ら世間に捉はれて居て離れることの出来ない人が世間を救ふことは出来ない。そこを大に考へなければならぬのである。一度世間を離れた心になると世間の多数の詰らない生活をしてゐる人を其の儘に捨て、置くに忍びない。それで一度世間を離れた心持から、今一度世間に立戻つて來ることが必要なのである。世間に捉はれてゐる者が世間を救へるものではないから、先づ生死に住せずといふまでに成り、その後、涅槃に住せず、即ち悟りの境界に引つ込んでゐないでもう一度世の中に出るといふのが本當なのである。その意味に於て先づ小乗の教へを學んで、世の中の無常を觀することも必要なのである。一度世間を離れて、さうして再び世間に立戻つて行き、愚かなる者や、悪人と共に住んで、彼等の手を取つて救ひ上げて行くことになるべきである。

以上で大體佛敎の中に於て小乗と大乘の區別を立てる爲め準備的な事柄を申し述べた積りである。

### 一三、覺るといふ意義

以上申し述べたやうな事情の下に、釋尊は御修業をお積みになり、結局佛になられたといふことであるが、佛といふ語は前にいふ通り、印度の『佛陀』を略したものであることは明かだけれども『ほとけ』といふ日本語に就ては何等の確かりした説明がない。吾々も子供の時から佛と言ひ慣はして來たが、その意味はどうもよく分らぬ。いろ／＼の説があるが、どれも餘り當てになるのはない。徳川時代の國學者は大體佛敎に反對なものであるから、随分亂暴な説を立てゝゐる。即ち佛といふのはほとほりけ、つまり身體に熱のあることだといふのである。佛敎が日本に傳はつた始めの頃、或る者は之を拜むし、或る者は拜まないといふ有様であつたが、佛敎が傳はつてから、間もなく、大和を中心として非常に熱病が流行つた。之に就て佛

『ほとけ』  
といふ語

教を嫌ふ方からいへば、他國で拜むやうな、そんな不可思議なものを日本に持つて来るから、神様の罰で熱病が流行るのだといふのである。又一方の佛教に歸依した人達は、折角かういふ有難い教が傳はつて來たのに、それを信じない者があるから、佛様が怒られて熱病が流行るのであるといふ。かういふ話があるが、これは雙方共に宜い加減な考へ方であらう。兎に角斯ういふ風に熱病が流行つて仕様がなから、朝鮮から來た佛像を浪花の堀江に捨てたといふやうなことがあつた。それで此の熱氣、即ち『ほとほりけ』といふ語が轉じて『ほとけ』となつたのだといふのである。併しこれは元來佛教の嫌ひな人々から出てゐる説であるから信じられぬ。それで大體に於て今の所では、浮屠家といふのだらうといはれてゐる。これもあまり當てにはならぬが、浮屠家が訛つてほとけになつたといふのである。元來『浮屠』といふのは『佛陀』と同じ意義である。印度では小さい國が多く對立して居たので、北の方とか南の方とか、中央とかで發音がそれ／＼ちがふ。それで或る所で

は佛陀といひ、或る所では浮屠といふが、何れも同じ意味で、浮屠家が訛つてほとけになつたのだらうといふことに多くの人は説明を下してゐる。併しこれも餘り當てにはならないので、それならば『家』といふのを何で附けたか大に不審である。斯ういふ風に種々の説があつても、結局能くは分らないといふことになるが、兎に角佛陀は勿論梵語であるから、これに基けば宜い譯で、即ち佛陀を略して佛といふのだといふ事だけは確かである。

佛陀といふ梵語を直譯すれば『覺者』即ち覺つた者である。佛になるといふことは覺りを得るといふことなのである。日本では長い間の習慣で、死ぬといふと『佛になつた』といはれて居るが、迷つた儘死んでしまつたのでは佛にはならない。然らば覺るといふのはどういふことであるか。先づ私共が自分の心の中を調べて見ると、自己といふものが二つある。即ち二つの心が對立してゐることに氣が附くのである。

その一つの自己は洵に淺ましい自己である。小さい眼の前の利害得失のみに囚はれて、何でも自分に都合の好いことばかりを求めて、他の者を排斥するといふやうな心持、これが一つの自己である。即ち専門的の言葉でいへば煩惱である。この煩惱を除くに就て昔からいろ／＼の事が説かれて居るけれども、此の煩惱が容易には除けない。洵に自分達は勝手なものである。きのふあたりも一度天氣が悪くなりさうであつたが、あゝいふ時に自分は傘を持つて出ないから、どうか家へ歸るまで降らないやうにと思つた。又二三日前は傘を持つて出た。さうすると少しは雨が降る方が宜いやうに思ふ。雨まで勝手に註文をしてゐるのである。それが昨日や今日のみではない。私など可なり長い長い間佛の教に入つてゐるくせに、やはりさういふ心持が出て来る。洵に我儘勝手なもので、これが所謂煩惱である。

併しながら吾々と雖も全く煩惱だけで生きて居るのではない。時には利害を離れ損得を離れ、他人の悦びを自分の悦びとし、他人の憂ひを一緒に憂へるといふ心持

も起らない譯ではない。それは佛の教に入つてからではなく、その前から人間としてさういふ性質を自ら具へてゐる。例へば母親が小さい子供を抱き寄せて、乳を飲ませる時などには、全く自己を離れた心持である。全く教育のない者でも、夜中に嬰兒を抱いて寝てゐる時、嬰兒が眼を覺して泣けば、直ちに抱き寄せて乳を飲ませる。その時にはたゞ子供のことばかりを考へてゐる。子供が泣けば自分の心がいたむ。にこ／＼笑つて乳を飲んでゐれば自分も嬉しい。どんな無智な母親と雖も、乳を飲まして其の子が憎くなるといふ母親はない。その時は全く自分を捨てゝゐる。これは即ち前に申した煩惱とは全く正反對の性質がそこに現はれてゐるものである。

私は先年信州の大町といふ町に滞在して居たことがある。日本アルプスへ行く途中であるが、此處で面白い話を聞いた。あの町の外れに川といつて宜いか、溝といつて宜いか、細い流れがある。その傍には百姓屋がポツ／＼ある。その中の或る家

の若い細君が四つばかりの子供と一緒に寝て居た。それが非常に暑い日であつたものだから、明け方に起きて戸を開けて、又寝たのであるが、何しろ若い人のことだから又グツスリと寝入つてしまつた。母親の方は寝てゐるのに子供は眼を覺して、さうして何處でもよくあることだが、外へ這ひ出して行つた。母親は知らないで寝てゐる。子供は戸口から外へ這ひ出して、今の小さい川の傍まで行つて、もう少しで川に落ちるといふ時に、丁度通り掛つた二十五六の若い男があつた。この有様を見て『アツ危い』と我知らず大きな聲を出して、駆け寄つて行つてこれを捕まへて、其の危い所を助けた。

其の大きな聲に眼を覺された母親は、自分の傍に寝てゐた筈の子供がゐないの  
で、吃驚して外へ出て見ると、いつの間にか川端まで這ひ出して行つて、危い所であつたのを若い男に抱き留められてゐたのであつた。ほんの一瞬の差で川へ落ちて死ぬ所であつた。母親は慌て、駈け出して行つて其の男に厚く御禮をいつた。さう

すると隣の家の細君も此の騒ぎを聞きつけて飛出して来て共にお禮を述べ、『どうぞ何もないけれども、熱いお茶の一つも上げますから休んで行つて下さい』といふと、『いやさうしては居られない、非常に忙ぐのだから……實は急いで此の前を通り掛つたのですが、このお兒さんが餘り氣の毒だから捉まへただけです。お禮なんか言はれることではない』といつて、急いで行かうとする。二人の女房はこの人の袖を引張つて、『まあ／＼さういはないで、是非寄つて行つて下さい』といつて引きとめてゐる。その中に向ふの方から人が来て、その男を見ると矢庭にこれを捕まへてしまつた。呆氣に取られた二人の女房がいろ／＼事情を聞いて見ると、何ぞ圖らんこの男は泥棒で、その晩賊を働いて其の歸り途であつた。成る程それでは急ぐ譯である。其の泥棒は不運にも子供を助けた爲に却つて自分が捕つてしまつた。これは洵に奇妙な話であるが、そこが面白いと思ふ。泥棒はどうせ人の物を取つて儲けやうといふ人だから、あまり善人ではあるまいが、その泥棒が歸りがけに、知らない



子供が川に落ちやうとしてゐるのを見ると自分の一身の利害得失を忘れて之を助けるといふ、そこに人間の人間たる本性がある譯である。そのまゝ子供の危いのを見逃して行つてしまへば自分は助かつたのに、その子供を捕まへた爲に自分は捕まつてしまつた。奇妙なことではあるが、そこに人の人たる本性が現はれて居るので、利害を離れ、損得を超越した心持、これが所謂佛性である。

佛性といひ、法性といひ、或は、眞如といひ、如來藏といひ、種々な言葉でいひ現はされて居るけれども、要するに自分の利害を離れ、得失を超越した心持、これが人間の本性である。人間である以上は心の奥底にこの二つのものが對立して居る。煩惱もあれば佛性もある。それで世の中が苦しいのであると私はつくづく思ふ。どつちか一方だけであつたら嘸ぞ樂だらうと思ふ。煩惱ばかりといふ徹底した生活が出来たら、却つて世の中は樂なものであらう。又佛性だけで、いつも利害損得を全く離れて、唯だ人の爲にといふ考へで居れば樂なのであらうが、大概の人は兩方を具

煩惱と佛性の對立

へて居て、而も大部分が煩惱で、折々佛性が出て來るので、いつも兩方から引張られるから苦しいのである。吾々のやうに相當な年になると、もう先が短い。若い時は色々なことを考へたけれども、段段に世の中を通つて見ると何事も思ふに任せない。此頃やうやく世の中が分つて來た、大に覺つたといふのだが、これは覺つたのではない、實はくたびれたのである。煩惱と佛性の兩方に引張られてくたびれてしまつたのである。それを覺つたなど、いつて寂しく死んで行く。是れが先づ平凡な人の一生であらう。世の中には地位とか、身分とかの異ひがいろくあるけれども、通觀して見れば斯ういふやうな状態である。

併しこれだけでは一生が無意味である、これを何とかしなくてはならぬ。何とか自分の心の中の整理をしなければならぬ。それはたゞ福を祈ることでもなければ、天の罰を恐れるでもない。眞面目に考へて見ると何かの道が欲しいのである。そこで詰り、覺るといふのは、兩方に引ずられてゐる自分の心を一つに纏める道を、

シツカリ捉まへることではなければならぬ。それで此の覺るといふのに二つの意味があるといふことが説かれて居る。その一つは覺察の意味で、一つは覺悟の意味である。

覺察といふこと

覺察といふのは自分の迷ひに氣が附くことである。例へば泥棒が入つた時に早く眼を覺して、泥棒が入つたなと氣が附けば物を取られないで済むが、知らないので済む。それと同じやうに自分の心に煩惱があるといふことが明かに分れば、此の煩惱を制して行くだけの働が生れて来る。それで覺るといふのは迷ひの本性を明かにして、其の迷ひを抑へる力を具へるやうになることで、之を覺察といふのである。これは非常に大切なことで、吾々も始終心に迷ひがあるのは知つてゐるけれども、此の迷ひに就ての考察が足りない。迷ひがあるなと思ふだけで、一切の迷ひの性質を明かにすることはなかくむづかしい。そこが徹底的に分れば泥棒の害を

免れるやうに、自ら煩惱といふものを制して何も害を受けないやうになれる。隨つて世の中の人に害を及ぼし、累ひを及ぼすこともなくなる譯である。

また覺悟といふのは眼のハッキリ覺めたやうな状態である。朝起きた時は何だかボンヤリして居るが、三十分か四十分、庭に出て、水でも打つてゐると眼がスツカリ覺めるのと同じやうに、微かに働いてゐる佛性が段々大きくなつて来て、一切の利害を離れて、世の中の人の爲になるやうに力を盡さうといふ決心が出来る。是れが即ち覺悟である。覺察の方は消極的方面で、覺悟の方は佛性を養つて育つて行くといふ積極的方面である。信心をするのには覺を得ることが目的でなければならぬ。

### 一四、佛性の開發

前にも申したやうに、正しい信心といふものは信心することによつて直ちに幸を得やうといふのでもなければ、信心することによつて天の咎めを免れやうといふのでもない。自分の心を整理し、煩惱を除いて佛性を養つて育てるといふことを主とすべきである。これが又相持ちのものである。先づ煩惱を除かなければ佛性はなかく伸びて来ないといふことが考へられる。丁度田に草が生えて居たのでは稲が育たぬから、田の草を抜くことが必要であるやうに、煩惱を制することに先づ力を盡さねばならぬといふことは確かである。併しながら煩惱を除くことばかり考へて居てもなかく除き切れない。煩惱は後からかくと起つて来る。そこで煩惱を除いてから佛性を發揮するといふのでなく、煩惱を除いて行くことに努めながら、佛性を發揮することにも努めて行かなければならない譯で、こゝが非常に大切な所である。

私は此の頃極めて小さい例だけれども、特に此の事に氣が附いた。私の家の庭に

眼前の活きた教訓

藟の木が一本ある。私はこの木の枝ぶりが好きなのだが、此の藟の木の葉に塵埃が附いて容易に取れないので、困つたものだなと思つてゐた。ところが或る日植木屋が来たので、『一體他の木はそんなに塵埃が附いてゐないのに、此の藟だけ斯んなに多くついて居るのはどうしたのだらう。一枚づつ葉を拭く譯にも行かないし、困つたものだが……』といつて聞いて見た。さうすると植木屋が『これは木の勢が悪くからです。木の勢が良くなれば、自然に葉の塵埃なんといふものは取れてしまひます』といふ。そこで庭の隅の方にあつた其の木を庭の真中に植替へてやつた。さうして肥料をやつたところが、今年は大分木の勢が好くなつて、植木屋のいふやうに葉に塵埃があまり溜らないやうになつたので、成る程斯ういふものかと感心した。人間のことも此の通りで、自分の心に迷ひがあるが、どうして之を除かうかと、そればかり考へて居ても、一つの迷ひを除くと他の迷ひが後からかくと起つて来るので仕様がなない。だから佛性を伸ばす修業をすることが肝要である。佛性

が伸びて行くに従つて、煩惱といふものは自然に少くなる。勿論是れは両方から行かなければならぬので、己を戒め、己を制するといふ方の修業もしなければならぬ。戒を守るといふやうなことは主として煩惱を制する方の修行で、前にいつた通り佛はいろくの戒をお説きになつた。殺す勿れ、盗む勿れ、欺く勿れ、嫉む勿れといふやうにいろくあるが、其等は皆所謂煩惱を抑へるに就ての教へである。其等の戒を守ると共に、一方に於ては煩惱と正反對のことを毎日勵むことが最も必要である。

例へば吾々には食るといふ心持がある。食るまいくと思つても食る心を根絶することは容易に出来ぬ。此の食るといふ迷ひをどうして制するかといへば、それと反對に施すといふことを常に努めるが宜いのである。食る心がありながら人に施すことを努めるには非常に骨が折れる。非常に辛棒をしなければ出来ぬ。随分これは苦しいことである。併し苦しくても何でも無理矢理にでもやつてゐると、それが

習慣になつて、後には心の悦びになる。それが心の悦びになるに随つて、自分でも氣の附かない間に食る心持が薄くなつて來てゐるのである。斯ういふやうに兩方やらなければならぬ。消極的ばかりで、『勿れ』ばかりでは効果が少い。子供に教へるのでも、兎角『勿れ』を主にする方が樂で宜いから、重に『勿れ』ばかりやるやうになる。泥棒をしてはいかぬ、活動寫眞を見てはいかぬと、『勿れ』ばかりやつて居て、親父が餘りやかましいと子供が却つて悪くなる。凡て『勿れ』ばかりやつてゐるから子供は到底やり切れない。新聞を見てはいけない、活動に行つてはいけない、何をしてはいけない、彼にをしてはいけない。終ひには飯も喰つてはいけないとまでになるかも知れない。これでは子供はやり切れない。『勿れ』もいゝが、それと同時に善いものも與へなければならぬ。消極的に『勿れ』ばかりやつて居れば、遂には子が親に背くやうにもなる。それだから活動寫眞を見てはいけないといふならば、何かそれに代るべき健全な樂しみを與へてやらなければならぬ。教育といふ

ものは人々の善い方を伸して、悪い方は抑へて行くといふやうにすべきである。私  
 が子供の時に、お前も大きくなつたら家を持ち、聽ては人をも使ふやうになれとい  
 ふことを、叔母さんといふ人が教へて呉れたが、洵に有難いことに思つた。昔から  
 『一つ叱つて三つ褒めよ』といふことを申すのであるが、叱るのを一つに褒めるの  
 を三つ位の割合にして丁度宜いといふのである。叱つてばかりゐては人は教へられ  
 ないが、褒めてばかりゐても亦自惚れてしまふ。それだから一つ叱つて三つ褒めよ  
 といふのであるが洵に面白い言葉だと思はれる。子供に對するばかりではない各自  
 に自分を叱らなければならず、また褒めなければならぬ。此の貴い佛性を伸ばす爲  
 めに人に施すとか其の他種々の善いことに力を盡すならば、佛性が伸びて行くと共  
 に自ら煩惱が除かれて行くに違ひない。

### 一五、自覺と覺他

佛教に於ては此の兩方面に亘つて教へが立てられてあるので、此の兩方面の修行  
 の完全に出來たものが即ち覺者である。充分に覺察して煩惱を除き盡し、また充分  
 に覺悟して佛性を遺憾なく發揮し得た者、それが所謂佛陀である。その覺察も出來、  
 覺悟も出來た者は其の眼界が廣くなり、明るくなつて行くから、以前には曾て味は  
 つたことのないやうな爽やかな氣分になる。さういふ氣分になつてから世の中の多く  
 の人を見ると、折角斯ういふ尊い性質を有つてゐるのに氣が附かないで、煩惱ばか  
 りに動かされて心には更に平和がなく、暗い氣分で生きてゐる者が多數である。自  
 分が明るい氣分で居れば、他の者が暗い氣分であるのが非常に氣の毒に思はれる。  
 そこで世に出て教へを説くといふことになる。どうしても教へを説かずには居られ

歡喜と哀愍

ないといふ心持が起つて來るのである。それだから覺つた者は自分で覺ると共に他の者を覺らせるといふことになるので、即ち自覺と覺他は必ず相伴ふのである。

佛は此の如く、スツカリ覺つてから世に出て教へを説かれたのであるが、佛弟子たる者はいつも佛の御心を以て吾が心とせよと教へられて居るのであるから、自分がスツカリ覺つて完全無缺なものになつてから初めて人の爲に説くといふのではない。若しそんな事であれば、吾々などは人の前に立つて一言でも口のきけるものではない。併し自分が幾らかでも迷ひを制することが出來、有つてゐる佛性を幾分でも伸ばすことが出來ると、この悦びを一人で私するに忍びない、他の人にもこんな有難いことを早く知らせてやりたい、一人でも二人でも同じ途に入れてやりたいと、斯う思ふやうになるのである。されば自覺が少しでも出來れば、佛の境界に到達しない前から覺他といふ働きが生れて來るのである。又人を覺らせやうといふことに少しでも力を盡して見ると、自分の足らないことが一層明かに分るから、覺他

の爲に益々自覺に努める譯である。これが即ち相持なので、自分が全く何も分らずに人を救はうとしても到底出來はしないが、スツカリ覺つてからなぞといつて居ては間に合はないのである。

之に就て釋尊は面白い譬喩を説いて居られる。譬へばお客をする時に牛の乳を御馳走しやうと思つて搾つたが、牛の乳が足りない。そこでモウ少し澤山にしてからお客をしようといふので、翌日も乳を搾つて前の乳と一緒にしたはまだ足りない。其の明る日もくさういふやうにして七日も八日も搾つて溜めて置いて、澤山になつてから出して見たらスツカリ腐つて居た。斯ういふ事ではいけない。お客をしようと思つたら、その日か或は其の前日に牛の乳を搾つて、若し足りなければ他から取寄せるなり、何とか工夫してお客をすべきで、少し宛搾つて溜つてから人に飲ませやうと思ふと、溜つた時には腐つてしまふのである。それと同じことで、自分も人に施したいが、モウ少し金が溜つたら施しをしやうなどといつて居てはならぬ。

布施の心得

又スツカリ覺つてから人に説かうなどいって居ると、覺り切らない中に死んでしまふかも知れぬ。だから釋尊は、無暗に溜めて置かずに、少しでも溜つたら直ぐ分けてやれといふことを教へてゐらつしやるが、全くその通りである。自分で覺ることに努めると共に、少しでも分つたら其の分つたことを力に應じて他の人にも説いて、其の悦びを分けてやるといふやうに心懸ける。さうすると自分がモツト充分に修行しなければならぬといふことを痛感する。人に教を説くとか、道を説くとかいふことを多少なりともして見ると、自分の足りないことが分つて來る。私なども家で本などを讀んでゐると、是れは面白い、何とか此の事を人にも話して見ようなどと思ふが、さて斯ういふ所へ立つて話さうとするとそれが満足に話せない。それは分つてゐるやうな氣がしてゐるけれども本當に分つて居ないからである。人の前で説くとか、筆を執つて書くとかいふ時になると、分らぬのに分つた積りで居たのは、己を欺いてゐたのだといふことに氣がつくのである。本當に分つて居れば説けない

筈はないのだが、説けないといふのは本當に分つてゐないからである。間違へたといふことをよくいふが、間違へたといふのは本當に分つて居ないからである。二と三と三と加へて幾つだといはれて、返事の出來ない人は決してない筈である。二と三と三と加へたら五といふことは分り切つてゐる。それが分る位に凡ての事が分つて居たら、説き得ないことはない。人に向つて、話などをして見ると、初めて自分はまだ能く分つて居なかつたといふことに氣がつく。吾々も斯ういふ所に出て話をするが、いつも思ふやうには話せない。それでも多少は自惚れもあつて斯うやつて話して居るが、要するに自覺と覺他とが相俟つて進んで行かなければならぬ。即ちいつでも自ら覺り他人に覺すといふことが相俟つて行くべきである。且つ又人を覺すといふことは固より口先ばかりのことではなく、その人の一舉一動が其の周圍に教へを與へるといふことにならなければならぬ。

決して口で説くことだけのみが説法ではない。經文の中に常住の説法といふこと

がある。即ち法華經の壽量品に、

常に此に住して法を説く。

といつてあるが、吾々の爲すことも其の常住の説法の一部にならなければならぬので、此の常住の説法といふことは、唯だ口で説くばかりではなく、吾々の眼つき、顔つき、手つき足つきが、皆説法にならなければならぬ。併し口で説くといふことに非常に巧みな人もあるけれども、身體で説くといふことはなかく難かしい事であると思ふ。

面白いことを聞いたことがある。犬養毅といふ政治家が居て、私も二三度會つたことがあるが字が大變に上手なので、『先生の字は實に立派な字だが、吾々にも時々字を書けなぞといはれるけれども、迎も先生のやうな字は書けない。』といったところが、犬養さんは『イヤ君達は手で書くからいけない。俺などは面で書くのだ』といった。面で書くといふのは恥かしいと思はないといふことで、是れは笑談であら

うが、上手に書かうと思はないといふ意味に取れば非常に面白い言葉である。成る程吾々は手で書いてゐるが犬養さんなどは身體で書き、自分の精神で書いてゐるのであらう。だから其の人といふものが其の字に現はれる。それが本當の字といふものである。法を説くのも其の通りで、身體で説くのが眞の説法である。緊張した心持で、地面から生えたやうに此處に立つて居れば、其の立つて居るのを見るだけで周圍の人が皆引締つた心持になる。通りを歩いてゐてもニコ／＼して歩いて居れば、摺れ違ふ人も、何だか知らないがニコ／＼して来る。むづかしい顔をして歩いてゐると、何だか向ふからへんな奴が来るなどと思つて、他の人も自然むづかしい顔になる。若し佛のやうに口に説くことも、手の動かし方や足の踏み方までも一切が申分がなくなつた時には、これを『覺行圓滿』といふのである。この三つを併せて三覺といふが、自ら覺り他を覺らしめ、覺行圓滿となる。斯うなつたのが所謂佛である。



凡て佛を目標として佛の境界に近づくために修行を積み、佛の境界に到達するまでは決して怠るまいと決心したのが即ち菩薩である。菩薩のことは又後に至つて委しくいふつもりであるが、此の決心があるかないかといふことが、菩薩であるかいかの差であるとして見て宜いのである。法華經の方便品の中に、『佛のことは佛でなければ分らぬぞ』といふ意味のことをいつてあるのは、お前達は詰らぬ者だと吾々を突き放された譯ではない。分つたくと思つても、本當にわかるのは容易のことではない。なか／＼佛にはなれるものではない。併し何人でも佛となる本性は有つてゐるのだから、本當の覺を得るまで大に努力しなければならぬといふ趣意なのである。然るに吾々は凡夫であるから、少し物事が分つて來ると、大に分つたやうな氣分になつて、自分で自分を欺いてしまふことが多い。之を大に戒めなければならぬのである。

### 一六、法の意義

#### 法の三意義

#### 其の一、法則

さて佛は覺を得られてから世に出て法を説かれたのであるが、吾等は佛の遺された所の法を信じ、また之を世に弘める爲に力を盡さなければならぬ。就てはこの法といふものをどういふ意義に解釋したら宜いかを明かにして置かなければならぬ。大體佛が法を説かれるといふのは三つの意味が含まれてゐる。尤も此の三つの意味を残らず含んで説かれることもあり、或は此の三つの意味のどれかを具へたものもあるが、兎に角法といふものに三つの意義のあることを考へて置かなければならぬ。その一つは法度とか法則とかいふ意義である。『斯うすべし』或は『斯うすべからず』といふやうなことを定めるのを『法を立つる』といふが、國家に行はれてゐる種々の法律制度などもこの意味に於ての法である。吾々は人間として斯ういふこと

をすべきである。或は人間として斯ういふことをしてはならぬといふことを定められたのを、聖人が法を立てたといふのもやはり此の意味である。佛が法を説くといふのがこの意味である場合も屢々ある。例へば『盗んではならぬ』とか『嫉んではならぬ』とか、また日常の起居動作に就ても、『食事をするには斯うすべきである』とか『道を歩く時には斯ういふ風に歩け』とかいふやうなことを説かれるが、此等は皆法度とか法則とかいふべきもので、佛敎の専門語でいへば『戒律』である。佛が戒律を定められたことは此の意味での説法である。即ち日々守るべき所が随分細かに規定されてあつて、例へばうがひの仕方まで説かれてある。それは佛弟子として守るべき法則を説かれたものである。

併し是れだけでは甚だ不満足なものである。此の意味の法ばかりであると、法を免かれることを工夫する者が生じて来る。孔子は『民免れて恥なし』といはれたが、法に觸れさへしなければ宜いといふ者が出て来るのである。或る寄宿舎で生徒

が夜遊びに出て仕様がな。そこで舎監が八時になつたら門を閉めることに定め、八時までに歸つて来なければ門を閉めて入れないと言ひ渡した。ところが八時過ぎに門を乗越えて歸つて来る者がある。これはどうもいかぬといふので、門を乗越えた者は禁足に處するといふことにした。さうすると今度は塀を乗越える。門を乗越えてはいかぬのなら、塀を乗越えるといふわけで舎監も大に當惑してしまつた。斯ういふ風に法度法則ばかりで縛ると、何か逃げ途を考へるやうになるのである。之に就てまだ可笑しい話がある。私の知つた家で、子供に餘り甘い物を澤山やると身體が悪くなるから、お菓子は一度に二つ以上やらないといふことにした。さうすると子供が『さうですか、一度に二つです』と確めて置いて、一日に幾度も二つ宛貫ひに来る。それで一度に二つ宛と決めたのは宜いが、却つて多くやらなければならぬことになつた。法則ばかりでやると斯ういふことになる。無論法則を立てることも大切だけれども、モット深い根柢をもたなければならぬ。

其の二、教法

そこで第二の意味でいふ法とは教法である。例へば『人間といふものは斯の如き本性を持つてゐるものだから、斯うしなければならぬ』といふやうに、其の理由を明かにして納得の行くやうに教へ込むのである。唯だ命令するだけでなく、其の理由を明かにして、斯うなれば、社會が良くなるのだから、これだけの事は守らなければならぬといふやうに教へるので、佛の説法にも此の意味の『法』を説かれた場合が屢々ある。併し是れだけではまだ充分でない。例へば皆が正直にすれば社會が良くなるから正直にしるといふのは一種の教法だが、相手が亂暴物であると、『ナニ良くななくても宜い』といふ。『そんなに怠けて居ると國が潰れるぞ』といつても、『ナニ潰れても構はない』といふ者に値つては敵はない。

それに就いて参考となるべき話がある。私の知つてゐる所の息子が不良になつて、始終酒を飲んだり、女の友達が出来たりして、始末が悪いので、親父が叱言をいふけれども更に刻き目がない。親に心配をかけるとは、不埒な奴だといつても、

行ひが少しも直らぬ。そこでその親父が私の所に来て、息子に意見をして呉れといふ。併し親達が一生懸命になつて直さうとしても直らぬやうな者に、僕のやうな徳のない者が叱言などをいつても何の役にも立つまいと斷つたが、まア何とか意見して呉れといふので、その不良の息子の日記を取上げて來たのを、兎も角も見せて置いてくれといつて置いて行つた。其の日記を明けて見ると、『どうも自分に意見をいふ奴の氣持が分らぬ』とかいてある。『親は自分達が苦勞して育てたのだから有難いと思へといふけれども、自分は大きくなるほど世の中が面白くなつた。親が勝手に育てたのだから、自分として見れば少しも有難くない。また親が教育を與へてやつたのだから有難く思へといふが、自分は本を多く讀むほど疑問が多くなるばかりだ。親が勝手に教育したので、自分としては少しも有難くない。親がいろ／＼人間の道を説いて、有難く思へといふが、自分は根本からこんな此の世の中に生れたことが有難くないのだ』と斯ういふやうなことが日記に幾ヶ所となく書いてある。斯

ういふ者に値つては實に敵はない。  
 斯ういふ者にあつては法則でも縛れぬが、一通りの教法でも役に立たぬ。そこで私はこの日記を見てから親父を呼びつけて、『日記を読んで見たよ』『どうだつた』『イヤ酷いことが書いてある。併し要するに斯んな世の中に生れたくないといふのだから仕方がないではないか』といふと、『イヤ、君まで息子の味方になつては困る』と親父も大に弱つて居た。斯ういふのになると尋常一様の教法では役に立たぬ。どうしても、人間といふものゝ本性から説いて、人間として自ら振返つて見ることゝを教へなければならぬ。人間といふものは本來斯ういふものだ、天地萬有とは斯ういふものだ。吾々は斯ういふ本性を以て此の天地の間に生きてゐるのだから、どうしても自分の勝手をするといふことは許されないのだといふやうに、ズツト深入りして、原理原則から説いてやらなければならぬ。斯ういふ説法は深い理を説くのである。

其の三、眞理

即ち法を説くといふのは『眞理』を明かにすることになるので、それが法といふものゝ第三の意義である。佛教の經典の中にも、天地萬物はどういふものであるか。人間の本來はどういふものであるかといふことが始終説いてある。方便品にも、佛と佛とは諸法の實相を知つて居るといつてある。親に孝行せよ、夫婦仲よくせよといふだけを教へるのには何も如是相、如是體などといはなくても宜さそうなものだけれども、教へといふものにシツカリした根柢を與へるのには、萬有の原理、根本の原則といふものを明かにして行かなければならぬのである。非常に面倒のやうだが深入りして來るとそこまで行かなければならぬ。此の意味で佛が法を覺つたのだといふことが方便品にもいつてある。『諸法の實相』を知るといふのは即ち根本的の理を知ること、此の根がなければ、幹であり葉である所の教法も、法則も立たなくなる。法律學者でも經濟學者でも、深入りして行けば、哲學に到達しなければならぬといふのも此の事である。

佛の妙法

佛が教を説かれるのに、此の何れかの意味で法を説かれる場合もあり、此の三つをスツカリ含んで説かれる場合もある。此の三つをスツカリ含んで法を説かれるといふのは其の最も優れたものである。それが法則としても申分がなく、教としても正しく、天地萬有の原理を説き盡してゐるものであれば實に申分がない。さういふ法を稱して妙法といふのである。即ち唯だ法則を立てるだけではない。根本に於て天地萬有の本性を明かにし、その深い理を本にして教を立て、その教を本にして法則を立てるといつたやうに、三つのものを皆含んだのを妙法といふのである。但し此の如き原理は言葉や文章に盡せるものではないから、言葉に現はれた法といふものを頼りにして、言葉にいへない所の其の根本の理を捉まへなければならぬので、是れが本當の佛法の修業である。

そこまで深入りせぬ人もあるが、實はそこまで深入りして行かなければ教へを立てることも出來ず、世の中を正しくすることも出來ない。よく世間では忙がしくて

そんなことを考へてゐる閑がないといふ人もあるけれども、根柢がシツカリとして居なければ何事でも本當に定まるものではない。兩方の車の輪が廻るには、其の心棒がシツカリして居なければならぬ。道を歩くのにも右足を踏出したら左の足はシツカリと大地を踏しめて行かなければならぬ。兩方の足を一緒に出せば引つくり返つてしまふ。さういふ譯で妙法が尊いといふので、その妙法が法華經の中に説いてある。此の經には佛の心の中にあるものを打ち明けて説き示されてあるものだから、吾々は法華經を信ずるといふことを、非常に尊いことだと思ふのである。此の法華經の内容に就ては更に後に至つて申述べるが、法といふことは斯ういふ意味に解釋したいと思ふ。それだから説法といふことは決してやさしいことではない。ただ嘘を吐くなとか、泥棒をするなとかいふことではない。嘘を吐いたら人が迷惑するなどといふ簡單なものではない。誠實といふことが人間の存在の根本であり、天地萬有の存在の根本だから、曲つてゐるといふことは凡ての物の存在を破壊するこ

とである。イギリスのカーライルは、『大きな家の煉瓦が一つでも曲つて居たら、其の建築の全體が曲つてしまふ。嘘を吐くのは凡ての人の存在の根柢を破壊することだから嘘を吐くことが悪いのだ』と、斯ういふことを説いて居る。併し例へば子供に天地萬有の原理をいつて見ても仕様がなから、自分の心にはシツカリした根柢を具へて居て、相手に應じて浅くも、深くも、やさしくも難しくも説いて行くといふので初めて本當の説法が出来るのである。

大體に於て佛法といふものゝ解釋は斯うつけて宜いものだと思ふが、さて佛の説かれた教への中に小乗と大乘があつて、大乘の中に法華經なるものが特殊の地位を占めてゐるといふことは、モウ少し佛教の内容を詳しく申上げなければ分らないと思ふから、此より今少し立入つて其等の事に説き及ぼして行くとしやう。

### 一七、信解の力

聽法者の種々

一體佛の教へを聽きに集まつた者は、どういふ心持で集まつて來たらうかといふことを考へて見よう。今は直接に佛の教へを聽くことは出來ぬから經典を讀むとか、或は經典に基いた書物などを讀むのであるが、何れにしても人情に變りはない。今私共が佛教に就いていろいろ習ふのでも、佛様のゐらつしやる時分に教へを伺つた者でも、其の中にはいろいろの種類のものがあるに違ひない。釋尊の頃でも一種の好奇心で聽きに來た者もあつた。一體佛教といふのはどんなものか、一つ聞いて見やうかといふ心持で聽きに來る者、それは別にさう深く思ひ詰めた者ではない。この頃釋迦といふ人が説いてゐるから聽いて見やうかといふ心持である。今でも現に佛教といふのはどんなものかといふ好奇心から、書畫や骨董を弄ると大し

て異はない心持で佛教を學ぶ人もある。此處からでも次第に深入りして行けば宜い  
 のだから、必ずしも之を排斥すべきではない。それから今一つは信心といふことを  
 したら直ちに自分の身に幸福が來るだらうと思つて、教へを聽きに來た者もあつ  
 た。今でも大多數は此の類のものであらう。これは直接利益を求めるのであるか  
 ら、急に効き目がないと直ぐ外へ行つてしまふ。今でも斯ういふのが多い。

第三には研究心で教へを聽きに來た者がある。人生といふものはどういふものか  
 知りたい、人間が生きているといふ意味はどんなものか聽いて見やうといふやうに、全  
 く『知りたい』といふ氣持だけで聽きに來たので、今でも佛教の書物などを讀む人  
 の中に斯ういふ人も随分あるに相違ない。第四には本當に自分が生れ更らうとして  
 教へを聽きに來た者がある。これが本當の信者である。自分は今まで詰らない生活  
 をして來たから良い教へを聽いて生き方を更へやう、生れ更らうといふ心持から教  
 へを求めるのである。今でも斯ういふ人が随分ある。細かに分ければ何十種にも分

けられるであらうが、大雑束に分ければ以上のやうなもので、此等は何れも縁を結  
 ぶ爲になるのだから、どれも排斥すべきものではない。

しかし第四の所謂『生れ更らう』といふ心持であつて、初めて眞の信心といふも  
 のになるので、其の他の者は途中でグラ／＼する恐れがある。例へば興味本位で聽  
 きに來て、面白くなければやめてしまふ。効き目があらうと思つて來ても、効き目  
 がなければ止してしまふといふやうな譯で、以上の中の初めの三種はあまり頼もし  
 くない。眞に自分が生れ更らうといふ心持で聽く者、これが本當の頼もしい信心と  
 いふべきである。尤も初め研究の積りで學んで居たものが研究だけに止まらない  
 で、心からこれを信じて、生れ更らうと思ふやうになるのも多くある。何れにして  
 も今までの自分の生活を振返つて見て、其の無意味のものであつたことに氣がつ  
 き、佛の教へに依つて、新しい生活に入らうと思ひ定めた時が、所謂發心である。  
 發心といふのは『發菩提心』といふ言葉を略したもので、即ち菩提を求める心を

起すのである。菩提とは『覺』で、覺を求め、心を起すのである。自ら今までの事を反省して見て、斯んな生き方をした日には百年二百年と生きても、生きたかひは無い。眞の生き方を知つて、生れ更つた者になりたいと思ひ立つのが即ち發菩提心、略していへば發心である。此處まで來なければ佛敎を學んだかひは無い。幾ら經典を讀んでも、専門語を多く覺えても、此の決心がつかなければ、たゞ物好きか、研究かになつてしまふ譯である。併しどれも發心の縁にはなるのであるから、どれからでも入つて行くが宜いのである。私などは若い人達に、『初から信じろなんといつても信じられるものでないから、兎も角も佛敎といふものに近づくと宜い。研究の爲でも、物好きでも構はぬから近づくと宜い。例へば此處に在る柱が梅檀のやうな香のある木であるならば、その香が觸つた手に移る、その移つた香は消えはしない。佛様の敎に觸れば、或はそれが研究でも、物好きでも、或は攻撃する積りでも宜しい。幾度も觸れば自然に香が移るやうに、その敎といふものに自分の

心が惹き附けられて行くのであるから兎も角も觸るが宜い。觸らないで遠くに居るのが一番困る』といふのであるが、世の中で何が始末が悪いといつて、無頓着程始末の悪いものはない。佛敎は怪しからぬものだと攻撃する人はまだく縁がある。それを縁として、決してさういふ譯ぢやないといふことを説けば幾らか分つて來る。之を逆縁といつて矢張り一種の縁である。一番困るのは全く冷淡な人である。『君も佛敎のことを少し學んだらどうか』といつても、『イヤ、僕は暇がないから御免蒙る』といつて澄して居る人があるが、これ程困るものはない。これを經典の中に『一闡提』といつてある。何も信じやうとしないもので、和譯して『不信』といふのである。有難いとも、面白いとも、邪魔だとも思はない。自分の方は別だと云つて澄して居る、これは實に困る。兎に角何かの縁が出來て、長く觸つてゐる間に何等かの感化を受け、何等かの影響を受けずには居られないものである。そこで佛の敎へを學び初めてから、どんな程度に進んで行くかといふことを考へ

三ノ

白

遊

ア

マ

カ

ク

ケ

コ

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク



信解の力

なければならぬが、その前に一つ考へて置かなければならぬのは、信ずるといふことだけで行くか行かないかといふ問題である。無論宗教に於て最も大切なものは信であるが、此の法華經を開けて見ると、屢々信解といふことが説かれて居る。これは大に注意すべきことである。例へばバイブルなどを開けて見ると、『信』の力といふものが繰返して教へてあるが、『解』の意味はあまり説いてない。佛典に於ては屢々信解といふ字が出て居る。信じなければ何も善い行ひは出来ないけれども、其の信ずるのに解といふものが伴はなければならぬ。たゞ有難い、何だか有難いといふばかりでは甚だ危ない。なぜ有難いのかといふ疑ひが起つて來ると、久しい間の信仰が滅茶々々になつてしまふ。老人の方には随分御經驗があらうと思ふが、子供を信仰に入れやうと思つて、親父が佛壇の前で掌を合せて拜んでゐると、小さい時は大人の眞似をするのが好きだから、親父の後で同じやうに掌を合せて居る。ところが、十五六になると止めてしまふ。『どうしたのだ。何故此の頃は佛様を拜まない』

のか』といつて尋ねると、『何だか分りもしないのに拜むのは馬鹿々々しいから止めた』といふ。

斯ういふのがよくあつて、私なども度々相談を受ける。

『どうしたものだらう。うちの子供は此の頃生意氣になつてしまつて、佛様を拜まなくなつたが、どうしたら元の通りになるでせう』と聞かれるから、『それは駄目でせう。馬鹿々々しいと思つたら全く馬鹿々々しいのだから仕方がない。一度離れたらなか／＼戻るものではない』と返事をする。斯うなるのは少しも不思議なことではないので、要するに信あつて解が足りなかつたからである。小さい中は譯が分らぬでやつてゐるが、段々分別が附いて來ると疑ひが起る。一度疑ひが起つたものを元へ戻さうとしても、それは容易に出来ることではない。唯だ一筋に元へ戻さうと思つても、それは出来ない。其の疑ひを解くべき途を開いてやらなければ、無條件に元へ戻るものではない。その疑ひを解決することに力を盡させないで、疑ひをそ

疑惑と其の解決

の儘取消させやうと思つても、取消せるものではない。『日本はよい國だ。』『なぜ日本はよい國か。』それが分らなければ日本人ぢやない。この馬鹿野郎』と怒つて見ても、分らないのは仕様がな、其の疑ひを解いてやらなければ仕様がな。それだから信といふことを本當に續けやうとすれば、なぜ有難いか尊いかといふことを解すべき力を具へることが必要である。解といふものが伴はない信といふものは危い。それで一生通る人も随分あるけれども、實は非常に危い。

今日の學校教育を受けた者は疑はずには居られぬ。普通の教育は科學的の知識を主にしてゐるものであるが、科學といふものは疑ひの中から出て來たものである。疑ひなしに科學は成立たない。フランスのデカルトは、『分らないといふことになれば何も彼も分らない。併し疑はしいと思ふのは、誰が疑はしいと思つてゐるのか、自分が疑つてゐるのである。それだから疑つてゐる自己の存在だけは疑へない』といふことをいつてゐるが、全くその通りで、自分といふものが疑つてゐるのだから

そこから出直すより外はない。疑はずに凡てを解決しようとするのは無理である。併し人間は疑ひだけで止まつて居られない。疑ひを起して然る後に其の疑ひを解決しようといふ要求が心に起るのである。面白い昔話がある。地中海の中にクリート島といふ島がある。此の島の人は嘘をつくのて有名なのであるが、この島の人がローマへ出て或る家へやつて來て、『私は嘘つきですよ』といつたので、其の相手の人が全く分らなくなつてしまつた。嘘つきだといふのだから今いつたことは嘘なんだから。さうすれば今、『嘘つきだ』といつたのが嘘なんだから、嘘をつかない人なのだらう。嘘をつかないとすれば今のことが本當だらう。若し本當なら『嘘つきだ』といふことが本當なんだから、矢張り嘘をつくのだらう。何か何だか分らなくなつてしまつたといふ話があるが、疑ふといふことに就ても其の通りで、疑はしいといふことも疑はしいとなつては、居ても立つても居られぬわけである。疑ふと共に、その疑ひの中を脱出したいといふ望みは必ず起る。これが人の本性である。深く

疑へば必ず其疑ひを解決する爲に何ものかを求めるといふことになるものである。併し疑ひといふものから出發した科學的知識に基いて教育される今の時代であるから、無條件で信じるといつても、相當に頭が出来て來れば信じられなくなる。そこで信ずるといふことは大切だが、解するといふことが之に伴ふことも大切で、どういふ譯で信ずべきものかといふことを、一通りは明かにしなければならぬのである。佛教で信解といふことを、併せて説かれて居るのは、非常に尊いことである。三千年の昔から釋尊が斯ういふことをお考へになつて、信ずると解すると兩方から行かなければ、本當にシツカリした思想の根柢は出來ないぞと仰つしやつたことは、洵に今日に至つて最も適切に感ぜらるゝわけである。

若したゞ深く究めるといふだけで、信ずるといふことがなかつたら、疑ひが多くなるばかりである。解するばかりで一生涯を終る人は疑問の中で終つてしまふばかりである。研究して新しい知識が得られると、その新しい知識が又新しい疑問を生

研究と疑問

む。近世の科學の進歩といふものは疑問を多くして來たものといつても宜い。たゞ研究ばかりしてゐれば、今までの一つの疑問が二つにも三つにもなる。昔は水といふものは不思議なものだと思つた。熱くなれば煙になるし、冷たくなれば氷になる。洵に不思議なものと思はれた。ところが研究が進んで來ると、ナニ水は少しも不思議ぢやない、酸素と水素が集まつて水になつたのだといふことが分つた。ところが、その酸素とは何だ、水素とは何だ、と疑問が二つになつてしまつた。水素は元素だといふことが分ると、今度は其の元素とは何だと、また新しい問題が起つて來る。元素とは宇宙を支配するエネルギーの現はれた。其のエネルギーとは何だと、又新しい問題が起つて來る。此のやうに一つの問題が解決されると、次から次へと新しい問題が出て來て、人間は解だけでは到底満足されない。解だけでは一度満足されると共に直ちに又不満を生んで來る。斯くして研究が無限に進められて行くのであるから、疑ひを起すといふことは決して悪いことではないが、たゞ解だけ

知識の悪用

で行くと、一生疑ひの中で終らなければならぬといふことになるのである。  
 又人間には前に申したやうに種々の煩惱があるから、物事が分つて来ると、其の分つた理屈を自分の煩惱を満足させることに應用するといふやうな、悪い量見が起つて来る。智慧ばかり進むと悪者になる。孔子は四十にして惑はずといつた。私共は子供の時に論語を讀んで、孔子は分り切つたことをいつて居る、四十になれば惑はないのは當り前ぢやないかと思つた。子供の時には四十にもなれば大變な親父さんだと思つて居たから、四十にもなれば惑はないのは當り前ぢやないかと思つた。ところが自分が四十になつて見ると惑はないどころか、迷ひだけである。子供の時より質の悪い迷ひが出来て来た。智慧が多少附いてゐるから、四十親父の迷ひは恐ろしいものである。どうやつたら世の中を巧く胡魔化して行けるかといふやうな、洵に質の悪い迷ひが多くなる。全く四十にして惑はずどころか、愈々多く惑ふといふことを痛感する。何か一つのを固く信ずるといふことがないと、結局一

生涯が疑ひの連続になつて、一生涯迷ふので、智慧の力といふものも自分の煩惱を成長せしむる方ばかり役に立つて来るのである。  
 そこで信と解との兩方揃はなければならぬといふことを、涅槃經の中に能く説いてある。

有レ信無レ解、增長ニ無明一。有レ解無レ信、增長ニ邪見一。信解圓通。  
 方爲二行本一。

信有つて解無ければ無明を増長す。無明といふのは迷ひのことで、信仰が所謂迷ひになる。分らぬけれども、何だか有難い〜とやつて居ると、徹底的に物事を考へる力が無くなつてしまふ。それを釋尊は戒めて、信有つて解無ければ無明を増長するといはれた。また解有つて信無ければ邪見を増長する。邪見といふのは自己本位の考へである。どういふ様に工風したら人を欺くことが出来るかといふことになつて来るから結局邪見を増長するのである。罪を犯す人には、割合に無學の人が少